風雷のゲートキーパー 長谷川千雨

棚橋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風雷のゲートキーパー　長谷川千雨

【Ｎコード】
Ｎ４５７６Ｖ

【作者名】
棚橋

【あらすじ】
長谷川千雨はどこにでもいる普通の女子中学生だが誰も知らないもう一つの顔がある。それは数百万人に一人しか目覚めないと言われている、異次元から莫大なエネルギーを呼びこみ、それを操ることができる存在、ゲートキーパーという顔だ。
時は２００３年、魔法使いとゲートキーパー、出会わないはずの者達が出会った時、物語は始まる。
これは週刊少年マガジンで好評連載中作品『魔法先生ネギま!』と知る人ぞ知る名作アニメ『ゲートキーパーズ』をクロスさせた二次

制作小説です。

プロローグ（前書き）

以前、似たような小説を投稿しましたがウッカリ消してしまいました。この作品は以前投稿した物に修正などを加え、再投稿しました物です。

また、作者は文才がありません。余り期待しないで下さい。

プロローグ

長谷川千雨が「普通」という言葉を意識し始めたのは何時のことだろう。

千雨が麻帆良学園に入学した当初は、性格も明るく友達も多くクラスの人気者だった。

しかし入学から半年もたった頃から周りから孤立していく。理由は簡単、周りとは違うから、ただそれだけだった。

例えばどうして車より速く走れる人間がいる？

どうしてパンチ一発で人が数十メートル吹っ飛ぶ？そしてなぜぶっ飛ばされた奴はかすり傷程度だけでピンピンしている？

学園長の頭の形はどう見てもおかしい。

そんな千雨の質問に対して同学年の親友達はまるでそれらが当たり前であるかのようにこう返答した。

「人間だって練習すれば車より速く走れるよ」

「ほら、それはあれだよ。CGとか使っているんだよ」

「学園長だって人間だよ？どうしてそんなに気になるの？」

「長谷川、お前おかしいよ…」

「千雨ちゃんのうそつき。絶交だよ、絶交！」

同学年の友達は千雨を徹底的に嘘つきと罵った。

それはまだ幼すぎた千雨の心を粉々にするのに十分すぎる出来事であった。

それから千雨はメガネなしで他人の顔を見て喋れなくなった。他人と違うことがすることが怖くなった。そして千雨は非日常が大嫌いになった。

それから数年たったある日の帰り道。その日はたまたま帰りが遅く、

千雨は真っ暗な道を一人歩いていた。それからしばらくたった頃だろうか、千雨は不意に誰かに見られている感じがした。

（…誰だろう？）

突然怖くなった千雨は急いで帰ろうとした。その時であった、自分の背丈の何倍もある鬼が立ちふさがったのは。

「すまんなぁ、嬢ちゃん。あのまま気づかなったら見逃してやったのになぁ…。気づかれたからには死んでもらわなアカンのや！」

そう言って鬼は拳を振り下ろした。

鬼が喋っていることを驚くよりも、無力な千雨はただ両手を突き出して目を閉じながら自分が死ぬことを待つしかできなかった。

（…？）

しかし何時までたっても最期の時が来ない。

恐る恐る目を開けると千雨の手から二重の同心円状の門が鬼の拳を防いでいる光景が映っていた。

「な、何や！？」

そして同心円状の門から風が噴き出し、鬼を細切れにした。

「ヒッ！？」

鬼がバラバラになる光景を見てしまった千雨は火がついたようにその場から逃げ出した。

どうしようどうしよう…。殺してしまった。あの力は何？お願い、イジメないで。お母さんお父さん。私は化け物…。

「大丈夫…あなたは化け物なんかじゃないわ…」

千雨は声がする方向に慌てて振り向く。

そこには真っ白な着物を着たロングヘアーの女の子が立っていた。

彼女の手のひらには白いオコジョが「キー、キー」と鳴いている。

（…この娘だれ？）

こんな夜中に着物など、余りにも場違いすぎる格好の彼女に千雨は警戒するがそんな千雨とは裏腹に女の子は話を続ける。

「私は…北条雪乃。この子は、お友達のヒサメ。あなたも私と同じ…ゲートキーパー…」

「ゲート…キーパー？」

雪乃と千雨が出会ってから数年の時が流れた。小学６年生になった千雨は雪乃と親友となり、彼女と接することによって以前のように笑うことが増えた。

雪乃も千雨と時々会うようになり、固かった表情が少し柔らかくなった気がする。

そんな千雨は雪乃からはゲートの使い方を習っており、身体能力や実力も上がってきている。ただし、訓練以外では絶対にゲートを使ってはいけないという約束で教えて貰っているが。

「じゃあ、今日はもう帰るから。明日は卒業式だから早く帰らないと…」

「…千雨、明日卒業式が終わったら…真っ先にここに来て。話したいこともあるし、渡したい物もあるの…」

「…？うん、分かった」

翌日、千雨の通う小学校で卒業式が行われた。千雨は卒業証書を持ったまま、雪乃と約束した場所へと走っていく。

千雨がそこへ向かうと既に雪乃はそこへいた。

「ハア、ハア…ごめん。待った？」

「ううん。今来たところ。…それで千雨、あなたに話さなければならないことがあるから…」

雪乃は酷く悲しそうな表情をしていた。

千雨は何となく嫌な予感がした。まるでもう雪乃に二度と会えないような…そんな気がしたのだ。

「私は…今日をもってこの街を出て行くわ。インベーダーの動きが

活性化し始めたから…」
「え？」
そんな…待ってよ。
「ホントはもっと早く言うべきだった…でも、この戦いに千雨を巻き込む訳にはいかないから…」
「そ、それなら私も　…」
「ダメ」
千雨の発言を遮り、雪乃は会話を再開する。
「千雨は戦うにはまだ若すぎるわ。それに…あなたには覚悟がある？自分の命を賭けてまで何かを守りたいという覚悟が…」
千雨は何も言い返せなかった。
「それと…コレをあげる。私より千雨が持っている方がいいから…」
ス…と差し出したのは少々汚れた木刀だった。
「これは…私の友達の武器。大切に使って…」
千雨はそれを無言で受け取る。ズシリと木刀とは思えない重さだ。
もしかしたらこの木刀の持ち主の覚悟が具現化したものではないのか、千雨はそう感じた。
「それじゃあ、さようなら。大丈夫、千雨。私達はいつかまた会えるから…」
スーと、雪乃が消えていった。そこには何もなかったように桜が散っていた。
「…さようなら北条。そうだな、また会えるよな」

プロローグ（後書き）

はい、始まりました。千雨は最初から強くするか否かで悩んでいます。

第1話　新学期（前書き）

だ、誰か私に…ぶ、文才を…。
はい、第1話です。

第1話　新学期

「「「「3年！A組！ネギ先生ー！！」」」」

（…アホらし）

今日をもって中学3年生になった長谷川千雨はクラスメイトがバカ騒ぎしている光景をすごく冷めた視線で見つめていた。

（中学3年になったっていうのにコイツらときたら…お前らは幼稚園児か！？あー！コスプレがしたい、衣装を作りたい、ブログの更新がしたい…）

クラスメイトの非常識さにイライラしながら千雨は学生寮に帰ってからやりたいことを頭に浮かべることで気を紛らわせた。

元々千雨は学校が嫌いだ。

どこが嫌いかと言うと、常識という言葉が通用しない連中と一緒に勉学を共にしなければならないからだ。

例えば自分のクラスである3ーAにはこれでもかというくらい個性的な人物が多い。

外人4人、大学生クラスの頭脳を持つ天才2人、学園長の孫に財閥の娘、小学校低学年並みの背丈の姉妹にグラビアアイドル顔負けのスタイルを持つ奴らが4人ほど。

さらには超人的運動神経をもつ奴らがチラホラいるし、ロボットといった人外までもいる。まさに変人オールスターズ。

「普通」「日常」という言葉を激しく好む千雨にとってこのクラスにいること事態、拷問を受けていることに等しいのだ。

些細なことで大騒ぎするし、3日に1回は何かしらの授業が潰れる。

学園祭や体育祭のお祭り行事になるとやりたい放題でもう止まらないし、止められない。

更にはわずか9歳の担任、ネギ・スプリングフィールド。
コイツが来てから毎日がトラブルの連続だ。
クラスメイトの制服をくしゃみでぶっ飛ばす、期末テストの勉強会で何故か野球拳をやることを許可したりなどなど…。
（私の胃袋に穴が開くのも時間の問題だな、こりゃ）
そして不運は続き、ネギは3－Aの正式担任となってしまった。
単純に考えて、卒業までこの疫病神と関わらなければならないことになる。
これから先どうなるかわからないが…とりあえず一つだけ解ることは…今年1年は今までどの年より騒がしく、厄介なことになるといったことだけであった。しかし千雨は気づいていなかった。自分がその厄介事に首を突っ込むことに…。

今日の授業が全て終わった放課後。
周りのクラスメイトは部活やら仲のいい友達と一緒にいる中、千雨は一人街に出かけていた。
（…やっと1日が終わった。今日は佐々木が貧血になったんだっけか。…桜通りの吸血鬼？そんなもんいるわけがないだろうが…まあ、いるかもしれないけどよ）
今日あった身体測定でクラスメイトの間で話題になったのはここ最近噂になっている桜通りの吸血鬼。
そんな中、クラスメイトの一人、佐々木まき絵が昨夜、桜通りで倒れているのが見つかり「吸血鬼は実在するのではないか」という噂

が一気に広まったのだ。
無論、千雨はバカバカしくて話の輪などには入らなかったが。
千雨は基本的に友達と呼べる人間がほとんどいない。
例外は、自分と同じ存在で「氷結」のゲートキーパーである北条雪乃くらいだ。
…いや、雪乃は小学校の卒業式の日に自分の目の前で消えたので、実質いないに等しいだろう。
（私って友達いないよな…）
味気ない学園生活、孤立する日々。
クラスメイトが騒いでいる光景を冷めた目線で見ている中でどこか楽しそうだな、と思う自分がいる。心のどこかには自分にだって友達を作ってみたいし、あいつらのように騒いでみたいと思う。
…でも。
『千雨ちゃんのうそつき』
「…！！」
ズキリと心臓を誰かに握られる感覚がした。イジメによって幼き日にできた傷は千雨の心を蝕んでいる。
普通じゃない、他人と違うことをすることを恐れている自分が心の中にいる。その呪縛はまだ自分を縛りつけていた。
「なあ、北条。私、どうしたらいいんだよ…」
そんな千雨の呟きは街の騒音でかき消されてしまった。やがて千雨は心のイライラを解消するため、行くあてもないが歩き始めた。
そんな千雨の去っていく背中には哀愁が漂っていた。
（…遅くなっちまった。）
街に長く居すぎてしまい、気づいたら、いつもならもうとっくに帰っている時間になっていた。そんな憂鬱な気分の千雨はさらに不幸な出来事に遭遇する羽目になる。
トボトボと歩いていた千雨は猛スピードで走ってきた誰かに「ドンっ」と勢いよくぶつかるってしまったのだ。
「痛ぇ…なにしやがる！」

「…長谷川？ゴメン、ワザとじゃないの！」
そこにいたのはクラスの中でもあまり関わりたくない人物兼トラブルメーカー、神楽坂明日菜だった。
「い、今ネギが襲われてて…追っかけてる途中だったの！」
「誰に？いいんちょか？」
ショタコン趣味のいいんちょこと雪広あやかはネギ先生にぞっこんだ。ああ、遂に強行手段に…。
「違う！…確かにあいつならやりかねないけど違うわよ！吸血鬼よ吸血鬼！」
…は？今、なんて言った？
口をポカンと開けたまま呆然としている千雨の頭上で爆発音が響いた。
嫌な予感がして恐る恐る視線を空へ向けると杖に乗ったネギが何者かと魔法で戦っている姿だった。
さらに神楽坂が吸血鬼と呼ぶ人物も魔法で応戦している。
「…なあ、神楽坂。もしかしたらなんだか先生は魔法使いか何かか？」
「えっ！？あ、あれは…あれよ、あれ！ＣＧかなんかよ！」
（ウソつくならもっとまともなウソついてくれよ…）
結論、あの先生は魔法使い、神楽坂がそれを知っているってことになるな。そんな神楽坂が慌てるということは吸血鬼も本物ということだ。
「と、とにかく！あたしはネギを追いかけるから！このままだとあいつ血を吸われてアイツが吸血鬼の仲間入りよ」
これ以上聞かれるとマズいと思ったのか無理矢理話を切り上げ、神楽坂は全速力でこの場から逃げ出した。

（さて…どうするかな）

一人残された千雨はどうするか悩んでいた。
魔法、吸血鬼。神楽坂はネギを助けに行くと言っていた。しかし相手は吸血鬼、ちょっとケンカが強いだけの中学生が勝てる相手だろうか？
更には相手は魔法も使える。もしあいつらに何かあったら？
私ならあいつに対抗できる力がある、あいつと戦える。でも…。
『あなたに覚悟はある？自分の命を賭けてまで守りたいものはある？』
千雨は雪乃に最後に言われたことを思い出していた。…覚悟。千雨は目をつむってジッ、と考える。
…何のために？
私は関係ない者をトラブルに巻き込む奴のが一番嫌いだから。あの吸血鬼は神楽坂や先生にそれをするつもりだ。
…それでもいいの？あなたは普通でいたいんじゃないの？
…うるせえ。
今行ったら戻れないよ？吸血鬼に目をつけられるよ？普通じゃなくなっちゃうよ？
うるさい…それでも…。
千雨は自問自答を繰り返す。
…逃げるのか？私は。もっともらしい言い訳をしてそれを飲み込んで。私は何をしたい、この力で何をしたい…？
さんざん悩み、千雨はゆっくりと目を開ける。目には迷いの色が消えていた。
（北条…戦う理由を見つけたよ、私。あいつらがいつまでも笑ったりバカ騒ぎできる日常を守りたい。正義や建て前とかじゃない、それが私の本心だ）
千雨は通学カバンを肩から下ろし、中から小さく折り畳まれたあるものを取り出す。
そしてその柄部分を押し、刃部分を飛び出させる。それはあの日雪乃から貰ったはいいもの今まで使う機会がなかった…あの古い木刀

だった。
この木刀は持ち運びができるように小さく折り畳むことができる特殊木刀なのだ。そして中学に入って以来、使わずに封印してきた異能の力…ゲートを発動させる。
「ゲート…オープン！」
グオン！千雨の足元に二重に描かれた同心円状の門が開く。
そこから溢れ出る力を両足へと集中させ、近くのビルへと向かって飛び上がった。
人間の脚力では不可能な技だが「風」の力で強化した脚力ならば話は別。楽々とビル屋上へと着地する。
「うっし。ゲートはちゃんと開くな。待ってろよ、吸血鬼…」
千雨はそう呟くとビルからビルへと飛び移っていく。ここに『風雷』のゲートキーパー、長谷川千雨が誕生した。

第1話　新学期（後書き）

千雨が使っている木刀は、「ゲートキーパーズ」の主人公、浮矢瞬本人が使っていたものです。瞬が死んだ後、ずっと雪乃が持っており、それを千雨に授けたのです。と言うか、折り畳みできる木刀ってもはや木刀とは呼ばないのでは？

…さて、次回は千雨が戦います。初めての戦闘シーン…上手く書けるかな…。

第2話　疾風の千雨（前書き）

戦闘描写が上手く書けない。千雨の性格がめちゃくちゃ変わっています、ご注意を。

第2話　疾風の千雨

千雨がビルからビルへ飛び移っていると遠くの方でネギの悲鳴や激しい音が聞こえてきた。
「…やっぱり、神楽坂達じゃ、かなわないか…」
手遅れになる前に急いで行かなくては。千雨はそう思うと移動スピードを上げた。

そんな中、千雨がこの場に近づいてきているなど微塵も知らないネギと明日菜はエヴァンジェリンと絡繰茶々丸の攻撃に苦戦していた。英雄の父からとてつもない魔力を受け継いだはいいが、実戦経験が圧倒的に少ないネギと一般人より運動神経が高い程度の明日菜では、賞金６００万ドルの吸血鬼エヴァンジェリンと戦闘用ガイノイドの茶々丸を相手するのはいくらなんでも分が悪すぎた。最初こそネギ達が優勢に立ったものの、直ぐにエヴァンジェリン達に優勢が戻ってしまった。
「まあ、この『闇の福音』と呼ばれるエヴァンジェリン相手にお前らはもったほうだ」
「ぐっ…」
そんなエヴァンジェリンの発言に明日菜は悔しそうに唇を噛み締め、睨み付ける。
そんな中、ネギは茶々丸と戦闘中だが魔法を発動させる為の呪文詠唱が茶々丸の妨害で出来ないという状況に陥っていた。
どれだけの魔法の達人と言えど、詠唱中に妨害されてしまっては魔法は使えない。それはネギも例外ではない。
「ラス・テル　マ…あうっ！」
茶々丸のデコピン攻撃にネギは集中力を乱されてしまい、魔法を使

うことができない。そんなネギにできることは必死で茶々丸から逃げ回ることだけだ。
「ネギ！」
そんな光景を見て急いで助けに行こうとする明日菜だが、エヴァンジェリンがそれを許さない。
「何処へ行こうとしているんだ？神楽坂明日菜」
エヴァンジェリンはあっという間に明日菜の正面に立ちふさがる。
「邪魔なのよ、エヴァちゃん！」
無論、明日菜も立ち止まる訳にはいかない。
拳を握りしめ、エヴァンジェリンに殴りかかる。強行突破をするつもりらしい。
…それこそがエヴァンジェリンの企みだとは知らずに。
「ふん」
バカの一つ覚えだ…そう思いながらエヴァンジェリンはカウンターを明日菜の腹部めがけて放つ体制を取る。
それに気づいた明日菜は急いで止まろうとするが、走り出した体は急には止まれない。そして…。
ボクゥ！
「う…ぐえ…」
エヴァンジェリンのカウンターをまともに喰らって、明日菜はその場に崩れ落ちた。
「あ、明日菜さん！」
ネギは明日菜を心配し一瞬だけだが目を逸らしてしまう。
その隙を茶々丸は見逃さず、ネギが握りしめている杖を叩き落とし、それを足で蹴飛ばして屋上の隅へと追いやる。
「あー！僕の杖がー！」
自分の大切な杖を足蹴され思わず叫んでしまうネギ。
そんな茶々丸の行動にエヴァンジェリンは賞賛の声を漏らす。
「よくやった茶々丸、下がれ。後は私がやる！」
吸血鬼だけでなく人形使いでもある彼女は糸を使い、ネギを拘束す

る。
ネギは糸で拘束された上に呪文発動に必要な杖を失い、全くの無防備になってしまう。
そんなネギを見たエヴァンジェリンは一人心の中でほくそ笑んだ。
（クク…ようやく…ようやくだ！この忌々しい登校地獄から解放される日がきた！１５年待った甲斐があった…）
ネギの父、ナギがエヴァンジェリンにかけた呪い、登校地獄。この呪いは当時悪事の限りを尽くしてきたエヴァンジェリンをこの地、麻帆良に閉じ込めた呪いだ。
ナギは3年たったら呪いを解除すると言って、旅立ったが呪いを解除する前にエヴァンジェリンを残して死んでしまった。
しかもナギがめちゃくちゃに呪いをかけてしまったせいで、誰にも呪いを解くことができない。
結果、１５年も麻帆良の地から外へ一歩も出れない状態になってしまっているのだ。
だがしかし、天はエヴァンジェリンを見捨てなかった。
ナギの実の息子、ネギが麻帆良に教師としてやってきたのだ。
ナギと血縁のネギの血を使って呪いを解こうと2月から綿密な計画をたて、そして今日、その計画を実行させた。
途中、神楽坂明日菜が割り込んで来たのは予想外だったが、恐れるには及ばない。現に彼女はネギの近くで気絶している。
「悪いな、ぼーや。恨むのなら…自分の父を憎んでくれ」
そう言い、ネギの首筋に噛み付こうとして…不意に誰かの気配を感じた。
（誰か来る…？）
「ゲートオープン！」
その声を聞いて、ふと頭上を見上げる。そしてエヴァは見た。クラスメイトである長谷川千雨がこちらに向かって攻撃をしてくる光景を。

（やべえ、神楽坂がマグダウェルにやられた。にしても、あのマグダウェルが吸血鬼だったのか）
千雨はビルの間を駆け抜けながら、吸血鬼の正体が自分のクラスのサボリ魔であることに驚きを隠せないでいた。
（しかも絡繰までマグダウェルとグルだったとは…。っとヤバい、先生が拘束された！）
急いで自分の正面にゲートを展開。
「ゲートオープン！」
かけ声と共にネギを拘束している糸を千切るための風の弾丸を数個精製する。
「真空ミサイル！」
技名と共に風の弾丸を発射。ネギを拘束している糸を切り裂き、千雨は屋上へと着地。
急いで落ちてある杖とネギを回収し、エヴァンジェリンから間合いを取る。
そして呆然とその光景を見ていたネギに杖を押し付け、こう言った。
「よう先生、こんばんは。大丈夫か？」

「長谷川…千雨…」
ギリッと歯を食いしばり、エヴァンジェリンは唸った。計算外だ。一般人代表のような人物が自分が見たことのない技を使ってネギを救出したのだ。そこには普段教室で見ているような暗い雰囲気はなかった。
（せっかくのチャンス、このまま引くか…戦うか…）
「あ、危ないですよ、千雨さん！」
「まあ、見てろよ、先生」

千雨は自信満々にそう言い、木刀を握りしめる。
（かつて私に勝負を挑んできた奴は数え切れない…。だが…木刀1本で私に挑んでくるだと？…屈辱だ！）
「茶々丸！こいつを叩きのめせ！骨の2、3本くらいは折ってもかまわん！」
「了解しました、マスター」
「は、長谷川さん！」
主からの命令を受けた父々丸は両腕からブレードを出し、こちらへ向かってくる。
これはマズい、完全にエヴァンジェリンを怒らせてしまった。ネギはあまりの気迫に涙が出てきたが千雨はニヤリと笑って茶々丸へと突っ込んでいく。
「ロボット三原則もクソもあったもんじゃないな」
「私はロボットではありません、ガイノイドです」
「同じもんだろ」
そんなことを言いつつも戦闘が開始された。
茶々丸は2刀流の長所である手数の多さで千雨を攻め立てる。一方の千雨は木刀とは思えない強度で茶々丸の攻撃を防いでいた。
その攻防戦は中学生が行っているとは思えないほど。しかし千雨は防御をやりたくてやっている訳ではない。
（隙が出来りゃあ…決められるのに）
いくらゲートという異能の力があっても、2年近くのブランクでガイノイドである茶々丸との戦闘はかなりキツい。更にはエヴァンジェリンが見ている中、迂闊に手の内を曝す訳にもいかない。そこでとった作戦は相手の隙ができるまで待つという「カメ作戦」だ。
そんなことが何時まで続いただろうか、両者の均衡が崩れる時がきた。それを破ったのは茶々丸だ。
このままでは拉致があかないと、判断したのだろう。間合いを開け、ブレードを思いっきり振り下ろした。
（それを…待ってたぁ！）

その際にできた隙を千雨は見逃さず、振り下ろしたブレードを叩き折る。
「…！引け、茶々丸…」
これ以上の勝負は危険だ、と判断したのだろう。苦虫を噛み潰したような表情をしたエヴァンジェリンは茶々丸に指示を送る。
「…ですが」
「いいから引くんだ、茶々丸！長谷川千雨の乱入は計画外だ。不確定要素が多すぎる、ここは一旦引くんだ！」
「…はい」
茶々丸は主の命令に従い、手を引いた。
「ふん、運が良かったなぼーや。今日のところは手を引いてやろう。それと…長谷川千雨。人の優雅な時を邪魔した罪、覚えておけよ」
「ふん、人襲っておいて何が優雅な時間だよ」
「…行くぞ、茶々丸」
そう言うと、エヴァンジェリン達は飛び去って行く。
「行ったか…。先生、私達とりあえずは勝ったんだ。もう少し…」
「う…、ヒック…うわーん！」
戦いが終わったので、緊張の糸が切れたのかネギは火がついたように泣き出した。
（そっか…こいつ9歳だもんな。怖かっただろうに）
千雨はそんなネギの頭を泣き止むまでずっと撫で続けた。

「す、すいません。ずっと慰めてもらって…」
「ああ、いいよいいよ。お前はまだ子供なんだから」
千雨は気絶している明日菜を部屋に運ぶため、ネギと一緒に寮の廊下を歩いていた。
「え…と、神楽坂と近衛の部屋に先生も暮らしているんだよな」
「はい…ただ…このかさんには心配をかけてしまいましたね」

時刻は既に午後9時を回っている。今頃このかは帰りが遅いネギとアスナを心配して待っているだろう。
「長谷川さん、ここですよ、ここ。ここが僕が寝泊まりしている部屋ですよ、今度遊びに来て下さいね」
ネギはポケットからキーを取り出し、ドアを開ける。
「た、ただいま…」
「お邪魔します…」
しかし木乃香がいつも言ってくれる「おかえり」が今日はない。
部屋は静かで少し不気味だ。もしかしたら怒っているんじゃないか、とネギは嫌な予感がした。そして不安げにリビングに続く扉をゆっくり開く。そこには…。
「スー、スー」
テーブルに突っ伏して寝ている木乃香がいた。
「…眠ってますね」
「疲れてるんだろうよ。そっとしてやろうぜ」
千雨はそう言うと背負った明日菜を二段ベットの上の階に降ろす。
そして何を思ったのかいきなり明日菜の制服を脱がし始めた。
「な、何やっているんですか!?」
「何って…着替えさせるんだよ。制服のままで寝るとシワ付くからな。だから先生、悪いがちょっと部屋出てくれ」
「は…はい」
ネギは慌てて部屋を飛び出した。千雨はタンスから明日菜の着替えと思うものを取り出す。
(ったく、なんで助けに行ったこいつを私が助けているんだか…)
千雨がそんな風に考えている時であった。
「せっちゃん…」
今まで寝ていた木乃香が寝言を言い始めたのは。
「せっちゃん…なんで私のこと避けるん?…なんで嫌いになるん?」
「…」
その寝言を聞き、なんとも言えない気分になった千雨はさっさと明

日菜を着替えさせ、部屋を出て行く。ネギには木乃香にきちんと謝るように言って自分の部屋に戻っていった。

自分の部屋に戻った千雨はいつも通りにブログを更新し、ベットへと倒れる。

（…今日はいろんなことがありすぎた。吸血鬼に魔法。それと、せっちゃん）

せっちゃんとは誰だか知らないが寝言を言っていた木乃香は泣き出しそうな顔をしていた。

つらかったのだろう。いじめられていた千雨にとって人に避けられることはどれだけつらいことか、身に染みるほど分かる。

（なんなんだよ、そのせっちゃんって奴はよ）

千雨は木乃香を避けるせっちゃんという奴にイライラしながら眠りについた。

第2話　疾風の千雨（後書き）

とりあえず襲撃初日は終了。ここから少しずつ原作から離れて行きます。近いうちにゲートキーパーズのキャラも登場させたいですね。

第3話　門と魔法（前書き）

今回はあまり進みません。

第3話　門と魔法

エヴァンジェリンの出撃事件から一夜明けた翌日、千雨はいつもより遅めに寮を出た。理由は学校に行くか行かないかで迷っていたからだ。学校に行けば必然的に昨日殺し合いをしたエヴァンジェリンと茶々丸と会わざるを得ない。それはかなり気まずい光景だ。かといって学校を休むことで生じるデメリットもある。新学期が始まって2日目で休めば嫌でも注目を浴びてしまう。しかも桜通りの吸血鬼というウワサが立っている今だ、朝倉和美や早乙女ハルナに「桜通りの吸血鬼の被害者」など根も葉もないウワサが立ってしまう可能性だって否定できない。結果、時間ギリギリまで悩んだが学校に行くことにした。そして…。

（こうなるんだよな―！）

真帆良名物、登校マラソン。普段は早めに学校に来る千雨にとって無縁のものだったが、今日は違う。大急ぎで電車から降り、千雨は飛び出すように走る。周りには千雨と同じように走る生徒がたくさんいた。腕時計を見るとかなりギリギリの時間。

（間にあうか！？）

前方に真帆良学園の校舎が見えた。既に予鈴が鳴っているのが聞こえ、校舎には徒歩通学の生徒が次々と駆け込んでいた。千雨は急いで校舎に入り、靴を脱ぎ、上履きを履く。一気に階段を駆け上り、教室へと走る。

（まあ、ここまでくれば大丈夫か？…ん？）

千雨は自分のクラスの前で奇妙な光景を目にした。自分の担任であるネギが生徒である明日菜に米俵のように担がれている光景だ。

「…何やってんだ、お前ら？」

「…あっ、千雨ちゃん！あの…聞きたいことがあるんだけど！」

ああ、恐らく…というかほぼ確実に昨日のことだろう。こっちにも

聞きたいことがあるが、お互いこんな廊下で話せるような内容ではないだろう。
「こんなところで話せる内容じゃねえ。昼休みにな」
それだけを言い残して千雨は教室に入っていく。
「ちょ、ちょっと！」
慌てて明日菜も教室に入って千雨に話そうとすると本令がなる。仕方なく自分の席につく明日菜。続いてネギも恐る恐る入ってきた。
ただ絡繰を見た時にはひどくビビっていたが。
昼休み、千雨は売店でパンを買い、明日菜とネギが話し合いに指定した進路指導室へと向かった。なるほど、確かにあそこは人の出入りも少ないし、教室や屋上のように盗み聞きされるような心配もないだろう。
「悪い、待たせたな」
ガチャ、と扉を開けて中に入る。既にネギと明日菜がイスに座って待っていた。「あ…大丈夫よ。あたし達も来たばっかりだから。…ねえ、千雨ちゃん、昨日あたし達を助けたって…本当？」
「ああ」
「ど、どうやって！？あたしでも適わなかったのに！もしかして千雨ちゃんも魔法使い？」
「ちょっと落ち着け。今から順に説明するから」
さて、何から話したらいいのか…。
「まあ、私は魔法使いじゃあないな。強いて言うのなら…超能力者か？」
「「ちょ、超能力！？」」
「そうだな…まずは私が使う能力から話そう。そのためには少し昔話をしなきゃならない」
そう言ってチラッと2人を見る。2人はめちゃくちゃ驚いている顔をしていた。
「時は１９６９年、高度成長期。戦後の日本が急速に成長して言った時代だな。この頃、一般的には公表されてないが世の中を騒がせ

ていた怪物がいた。…それがインベーター」
「インベーター？あの…宇宙人とか言う奴…ですか？」
「まあ、そんなものだ。奴らは軍が持ってる通常兵器では傷を付けることすらできない。このまま人類は滅ぶのか、となった時現れたのが私と同じ超能力者達…ゲートキーパーと呼ばれる奴らだ。」
「そのインベーターってのはなんなの？映画である宇宙からやって来た侵略者とかなの？」
明日菜は早速千雨に質問をする。
「違うな。奴らは人間の負の感情で生み出された化身と呼べる存在。高度成長期による時代の変化で現れたんじゃないか…と私は考えている」
「じゃあそのゲートキーパーとは？」
今度はネギが質問をする。
「ゲートっていう超能力を使える人間のこと。まあ、分かりやすく言うと異次元から膨大なエネルギーを呼び出し、自在に操ることができる人間のことだな。ちなみに1人1人能力は違うぞ。…そうだな、ちょっと見せてやるよ」
そう言うと千雨は売店で買った菓子パンを手のひらに乗せる。
「ゲートオープン」
ブン！と手のひらからゲートが開き、そこから出たカマイタチで菓子パンを3等分に切る。
「「おー！！」」
「…まあ、こんなしょうもないことには使わないけどな。他に例に出すなら身体能力を極限まで上げることができる『迫撃』のゲートや相手を催眠状態にする『幻惑』のゲート、炎を操る『赤熱』のゲートなんかあるな」
ゲート能力について一通り説明し終えた千雨は次の説明に進む。
「それで、人類はゲートキーパーでインベーターに反撃を開始する。…まあ、そのインベーターのほとんどは倒され、人類の平和は守られたのでした、めでたしめでたし…とまあこんな感じ。ちなみにゲ

ートキーパーに目覚める確率は数百万人中一人くらいだ。…それでネギ先生、私の秘密聞いたんだから、あんたの秘密もしゃべってもらうぜ」
「う…ですよね」
「当たり前だ」
「分かりましたよ…」
しぶしぶネギは自分の正体について話始めた。
「ふーん、立派な魔法使いね。それでこの学園に来たのも修行のためか」
「は、はい」
「なるほどな、合点がついた。神楽坂の制服がぶっ飛ばされたのも魔法の仕業って訳か」
ネギの秘密を聞き、1人納得する千雨。（と、なると…先生の身の回りに起きたトラブルは全部魔法が関わっているわけか）
「なあ、先生。正体がバレたらマズいんだろ?だったら魔法を今まで以上に隠すべきだ。今は神楽坂だけだから何とかなるけど、これが朝倉や早乙女にバレてみろ、どうなるか分かったもんじゃないぞ」
「た、確かに…あの2人にバレるってことは世界にバレることと同じことだもんね」
あの噂好きの2人にバレてみろ、ネットに公開、世界中に魔法使いのことがバレる、なんてことも有り得ない話ではない。
「っと、お2人さん。そろそろ昼休み終わるぞ」
千雨は腕時計を叩き、時刻を知らせる。次の授業まで残り5分を切っていた。
「あっ!」
慌てて飛び出す2人。千雨はゆっくりと廊下を歩きながら心の中で2人に誤っていた。
（…ウソ、ついちゃったな…）
そう、千雨はさっきのインベーターの説明でたった1つだけウソをついた。それは…。

（インベーターは滅んではいない。アイツらは…まだ生きているんだ。インベーターは人間の負の感情から生まれる。…つまりは人類がいる限り増え続け、人類が滅びない限りアイツらも滅ばないってこと…）

インベーター相手では良くて現状維持が精一杯。やがて人類は…。

（かつてのゲートキーパー達はどんな気持ちでこの世界を守ったんだろう…。でも守った世界はどうなった?増え続ける犯罪、バブル崩壊、就職氷河期…希望なんて見えやしない世界。北条…かつてのゲートキーパー達はどうして戦えたんだ?こんなしょうもない世界になるって分かってたんだろう?）

そんな千雨の問いに答えてくれる人は誰もいなかった。

「あー、宮崎。ちょっといいか?」

「ふぇ!?」

放課後、千雨はもう一つの疑問を明らかにするために放課後、図書館にいる宮崎のどかに会いにいった。しかしのどかの方はあまり話さない相手に脅えているようだ。

「あ、あの…私お金なんて持っていないし…」

（…私って不良に見えんのか?）

「違う、宮崎!私はお前に聞きたいことがあるんだ!」

「な、何ですか…?」

のどかは子犬のように目をウルウルさせ、脅えている。事情を知らない人が見たら千雨がのどかをいじめている光景に見えるだろう。

「…近衛のことでな。お前、あいつと同じ部活だから親しいだろ?だからカツアゲとかそんなんじゃないんだよ」

「え…?このかさん…ですか?」

（長谷川さんってこのかさんと仲良いのかな…?）

のどかはクラスで一匹狼と化している千雨の意外な交友関係に驚きつつも話に戻る。

「えっと…それじゃあ、このかさんの何が聞きたいんですか?」

「ああ…あいつが言ってたんだが…せっちゃんって誰だか分かるか

？」
「せっちゃん…？多分、刹那さんのことではないかと思います」
「桜咲？」
桜咲刹那は千雨やのどかと同じ３－Ａのクラスメイトだ。ただ、千雨と同じく交友関係はあまり広くないらしいが。
「ええ。元々刹那さんとこのかさんは小さい頃からの幼なじみで仲が良かったらしいんですよ。ただ…真帆良学園で再会してから急に刹那さんが離れていってしまって、今はあまり仲が良くないらしいですけど」
「…何で？」
「わからないんですよ。理由を聞いても答えてくれなくて。このかさん、スッゴい悲しんでて…」
千雨の脳裏に泣いていたこのかの顔が浮かんだ。
（あのサイドポニー野郎…）
「まあ、それだけわかればいいや。ありがと」
そう言って千雨は図書館を出て行った。残されたのどかは
「長谷川さんって意外に優しいんだな」
と、クラスメイトの新たな一面を見てそう思っていた。
図書館でのどかと別れた千雨はイライラしながら歩いていた。原因はもちろん桜咲刹那だ。理由を言わないままずっと幼なじみを避け続けるなどキチガイすぎる。
（お前は近衛がどんな気持ちでいるのか分かってんのか？他人の痛みを理解しようとしていない人間が私は一番嫌いなんだ。だいたい…！？）
千雨は何かが変だと感じて、慌てて周りを見渡す。妙だ、千雨が今いる大通りはこの時間帯、大勢の生徒で賑わっているはず。なのに人１人どころか車１台すら通っていない。まるで世界が大通りを残して消えてしまった感じだ。ふと、誰かの気配を感じた。
（誰だ…？）
木刀を取り出し、辺りを警戒する。

「申し訳ありません、長谷川さん」
バッと振り向くとそこには。
「あなたと…手合わせ願います」
今、一番千雨が会いたくない人物、桜咲刹那が立っていた。

第3話　門と魔法（後書き）

次回、千雨対刹那でお送りします。
ゲートキーパーズおなじみのあの技が出るかもしれません。

第４話　桜花と疾風（前書き）

めちゃくちゃ短いです。

第４話　桜花と疾風

その日の昼休み、千雨がネギと明日菜と情報交換をしている間、刹那たちも行動を起こしていた。
「…長谷川が？」
「ああ、こちら側である可能性が高いと、学園長から」
龍宮真名は刹那の発言を信じられないでいた。魔力も気も持っていない一般人が、自分達と同じ裏側の人間だ、と言われても到底信じられない話だろう。
「刹那、その情報は信用できるのか？」
「少なくとも学園長からだからな…信用はできる。ただ見極める必要はあるな。実力やどういう人間か、とかな」
「…愛するお嬢様のため、か？」
龍宮が皮肉を込めて言うと、刹那は黙れと言わんばかりに龍宮を睨みつける。
「龍宮、今回は…私１人でやる。助太刀は無用だ」
それだけ吐き捨てると刹那は屋上から出て行った。そんな刹那の後ろ姿を龍宮はじっと見つめていた。
（…何も変わっていない、あいつは。近衛を護衛するはずの人間が護衛対象を悲しませてどうする？お前だって本当は…近衛と仲良くしたいのだろう？）

「長谷川さん…手合わせ願います」
現在千雨は人っ子１人いない大通りで、刹那と対峙していた。刹那の手には自分の背丈くらいの野太刀が握られている。間違いなくまともな要件じゃないだろう。
「…新手のカツアゲが何かか？悪いな、今持ち合わせが…「とぼけないで下さい」」
千雨の発言を冷たい声で切り捨てる刹那。まるで触れるものを皆、

傷つけるような雰囲気だ。
「私の殺気に気づき、自分の武器を抜く動作…とても素人のそれではありません」
「…何のようで私と戦いたいんだ？」
「そうですね…あなたの実力とどういう人間か、を確かめるためにですね」
「嫌だと言ったら？」
「…力づくでも」
間違いない、こいつはやる気だ。千雨は木刀を両手で強く握りしめる。それを合意と見た刹那も鞘から野太刀を引き抜き、構える。
「行きますよ」
「来いよ」

ドンッ！先に仕掛けてきたのは刹那だ。瞬動を使い、一気に間合いを詰めて、刀を振り下ろす。
「神鳴流奥義、斬岩剣！」
（やべぇ！）
一気に間合いを詰められた千雨は紙一重でそれをかわす。ドン、と千雨がさっきまでいた地点に大きな亀裂が入る。
「真空ミサイル！」
すかさず、千雨は刹那にめがけて風の弾丸を一発放つ。
「甘い」
だが、それを読んでいた刹那は剣でそれを払う。
（かかった）
…しかしそれが千雨の狙いだった。たった一発だけだが、エネルギーを普段の数倍集中させた弾丸はかなりの威力がある。そんなものを刀なんかで払ったら…。
（腕が…！痺れて…！）
そう、別に千雨は弾丸でダメージを与えようなど、考えてはいなかった。ただ決定的な隙を作るためだけにそれを放ち、見事成功させ

た。
（しまった…。早く…持ち替えないと）
しかし刀を強く握りしめていたため、刹那はすぐに手を開いて別の手に持ち替えることができない。
（…今だ！）
チャンスはここしかない、千雨は一気に接近し、木刀を振りかぶり、刹那の腹に思いっきり打ち込んだ。
ボクゥ！
「ぐうっ！」
腕に意識を集中していた刹那は気で防御することもできず、まともにその一撃を食らってしまう。どんなに強い人間だって防御しなければダメージは入ってしまう。それは刹那も例外ではない。刹那は膝から地面に崩れ落ちた。
「まあ、しばらくしたら回復するだろ」
それだけ言うと千雨はその場から去ろうとする。
「ま、待て…」
振り返ると刹那が刀を杖代わりにして立っていた。
「情けのつもり…ですか？」
「ああ、これ以上戦う理由もないだろ？それに…一つ質問していいか？」
質問。その単語に刹那は疑問に思った。自分に質問することなどあるのか？
「お前、近衛と友達だったんだってな」
「…昔の話です」
「でも中学入ってからあいつを避けるようになったらしいな」
「あなたに関係ないでしょう。…それに私などいなくても、このかお嬢様には沢山の友達がいらっしゃいます。私の代わりなんていくらでも…」
しかしそれ以上刹那の言葉は続かなかった。何故なら千雨が彼女の

横っ面を思いきり、ぶん殴ったからだ。

「お前…それは言っちゃいけねえ。あいつは…お前に嫌われたんじゃないかって泣いていたんだぞ!それをお前は、近衛の意思を自分の都合の良いように解釈して、本当に近衛の思いなんて見もしなかった!」

刹那は地面に横たわったままそれを呆然と眺めていた。

「大体、代わりがいる?お前本気で言ってんのか?…本来、一番あいつのそばにいなきゃいけないのはお前だろ!?代わりなんていないんだ!」

「あなたに…何が…」

「解るよ、私には解る。お前は…あいつの痛みを理解しようとしたか?あいつの気持ちになって真剣に考えてみたか?一番の親友に裏切られたんだ、つらくないはずがない。私にだって経験あるからな…」

千雨はかつてのいじめられてた自分を思い浮かべ、顔を歪めた。

「それじゃあ…私はどうしたらいいんですか!」

刹那は立ち上がり、千雨の顔面を殴りつける。気をまとった一撃はクリーンヒットし、千雨の顔からは鼻血が飛びでた。

「私だって…本当は…」

「…そんなもん私にだってわからない。ただ、自分が本当にしたいことを、こうだって思ったことをやればいいんじゃないのか?私だって…さ…」

それだけ言うと、千雨は気絶してしまった。一方の刹那は千雨が言っていた言葉の一つ一つを噛み締めていた。

「私が…思うことを…」

千雨が目覚めたのはそれからしばらくたった頃だ。

「…知らない天井だ」

あの後、刹那に担がれた千雨は彼女の部屋に運ばれたのだ。

「おや、起きたのか…」

「…龍宮」

千雨を看病していたのは色黒でとても中学生とは思えないスタイルの持ち主、龍宮真名だった。

「うちの刹那が色々迷惑をかけてしまったようだな…すまない」

「いや…別に桜咲は？」

「ああ、彼女なら…「キャー！」」

真名が何か言おうとした時、廊下から大騒ぎする声が聞こえた。

「何があったの！？」

「桜咲さんがこのかとラブラブなんだって！」

「ハッ！百合…ネタの神がおりてきたわ！」

「ハ、ハルナ！落ち着くです！」

（…あいつ、踏み出したのか）

刹那の勇気ある行動に千雨は驚いていた。

「感謝するよ、長谷川。刹那を変えてくれて…」

「別に」

それだけ言うと千雨は部屋を出て行った。ただその顔はとても穏やかであったが…。

「…はい、影山さん。間違いありません、本物のゲートキーパーです」

「…やはりな。彼女が北条雪乃が言っていた人物か」

「多分そうですね。…それでどうしますか？こちら側に入れますか？」

「もちろんだ。生粋の能力者は貴重だからな。今は人手が少しでも多いほうがいい。そうだな…かつて五十鈴が君をスカウトした時のようにやるのが一番か？」

「え、五十鈴さん？…自信ないなあ」

「はは、大丈夫さ。…それじゃあ、また」

こうして真帆良の夜は更けていった…。

第４話　桜花と疾風（後書き）

さて、次回はオリジナル回を挟みます。ゲートキーパーズのキャラと千雨が会います。勘の良い人なら誰だか解るのではないでしょうか？それでは次回まで！

第5話　神々の盾（前書き）

オリジナルストーリーです。ご注意を。

第5話　神々の盾

土曜日の午前中、千雨は翌週にある真帆良大停電に備えて買い物に出かけていた。

「…え、と。ロウソク買っただろ。後は…」

この大停電、千雨はあまり好きではない。ネットを趣味とする千雨にとって電気を止められるのはあまりにも痛いことだからだ。インターネットができないパソコンなんてルーが入ってないカレーみたいなもんだ。

「えーと、次は…」

メモを見ながら千雨は買うものを探す。意外と買う物が多く、時間がかかってしまい、結局買い物が終わったのは1時間も後のことだった。

買い物が終わった後、千雨は行きつけのカフェで一服しながらパソコン雑誌を読んでいた。休日だからか客は多く、席もほとんど埋め尽くされている。

「あ、あの…」

声をかけられ、顔を上げる。そこには自分より年上のおしとやかそうな女性が立っていた。

「隣、いいですか?どこも空いていなくて…」

「…いいですよ」

別に断る理由もない千雨は2つ返事で承諾し、女性はイスに座る。

「優しいんですね、あなた。私は真鶴美羽、真帆良大学の医学部に入っているの。よろしくね」

（へー、医学部ね。頭いいんだ…）

しかし美羽の次の発言で千雨は衝撃をうけることになる。
「そんなに緊張しなくても大丈夫ですよ。…ゲートキーパーの長谷川千雨さん」
「ー！！」
ガタリ、とイスから立ち上がる千雨。周りの客が驚いた様子でこちらを見ているが気にしていられない、今こいつは何ていった？
「あ、ごめんなさい！驚かせて…」
「あんた…何もんだ？」
千雨は警戒しながらポケットに手を突っ込み、木刀に触れる。
「…千雨さんと同じ存在とでも言いましょうか」
「まさか…ゲートキーパー？」
千雨は初めて雪乃以外のゲートキーパーに出会い、驚愕の表情を浮かべていた。美羽は申し訳なさそうな顔をしていた。
「あなたに用があるんです。…着いてきてもらえますか」

美羽に言われるがままについていく千雨はとてつもない不安に襲われてた。すでに歩き始めて数十分が経過しているが、景色は華やかな街からさびれた町外れに変わってきている。大丈夫なのだろうか…。
「さて、ここら辺でいいかな」
そう言うと美羽は廃ビルのさびれた外階段に腰掛ける。
「あの…真鶴さん。あなたも…その…」
「美羽でいいわ。ええ、私は『跳躍』のゲートキーパーよ。あなたは…五十鈴さんと同じ『疾風』のゲートキーパーかな？」
「違いますね。私の場合、風と雷です。雷は威力は高いけどコントロールが難しいから…普段は使わないんですよ」
千雨は何個か質問に答えていくうちに、美羽と自然に打ち解けていく。ゲートキーパーという同じ存在だからなのか美羽も千雨に打ち解けていった。しかし何個めかの質問の時、急に美羽の気配が変わ

った。
「千雨ちゃん、最後に…この質問は正直に答えてね。あなたは…どれくらいの頻度でゲートを使っている？」
「え…？どうしてそんなことを…」
「それは…」
美羽はそのことを答えようとした時、ガタンと物音がした。

ふと振り向くと数人の人間がこちらに向かって歩いてくる。
「！？」
…そして異変は起きた。一人の人間が体の内部から、ゴキゴキと嫌な音を立てながら異業の物へと変化していく。それを皮切りに次々と周りの人間も変化を遂げていく。
「う…」
そのグロテスクな光景に千雨は思わず口元を抑える。一方の美羽は見慣れているのか全く動じない。
「無機物タイプ…なるほど…影山さんの言うとおりか。真帆良周辺でインベーダー出現率が異様に高いってウワサは本当か。ちょっと歩いただけでこれだもんね」
そう言うと、美羽は懐から携帯電話を数個取り出し、操作し始める。
「け、携帯なんていじっている場合じゃ…」
「まあ、見てて」
パスワードを入力し終えた美羽は、携帯を次々とインベーダーに投げつける。そして次の瞬間、携帯から凄まじい炎がほとばしった。
「グ…グオオ！」
「ゲ、ゲート！？」
それは間違いなく千雨がこの間使ったゲートだった。しかし…。
（ゲート？あれが？）
ゲートは普通、千雨のように自分の体から出すものだ。しかし美羽

はそれに対し、携帯から出した。しかも美羽のゲート能力は確か『跳躍』だったはず、決して炎を操る『赤熱』ではないはずだ。

しかしゲートでしか倒せないインベーダーは、それをくらってドサリと地面に倒れ、動かなくなる。

「ふう…こんなものかな」

「あ、あの美羽さん。今の…!?危ない!」

しかし美羽は油断し、残りの1体を倒し損ねていた。インベーダーはちぎれた上半身だけで後ろを向いた美羽を襲おうと向かってくる。

「ゲートオープン!」

使うは速度、威力共に高いがコントロールに難しい『雷』。

しかしこの至近距離ならそんな弱点は意味をなさない。千雨は目一杯腕を伸ばして力を振り絞る。

「ライトニング!」

手のひらから凄まじい量の雷がインベーダーを襲う。インベーダーは文字通り塵も残さず消滅してしまった。

(…やっぱり千雨ちゃんは強い。雪乃ちゃんが鍛えただけあるね)

美羽は冷静に千雨の強さを観察する。

「あ、あの美羽さん!今の携帯電話…」

「携帯?ああ、イミテーションゲートのこと?」

「イミテーション?」

「我々イージスネットワークが使う、人口的に作った疑似ゲートのこと。色々なゲートも使えるし、大抵のザコならこれで倒せるわ。一回使ったら壊れちゃうのが難点だけどね」

千雨はようやく合点がいった。なるほど、疑似ゲートか。

「そ、それより。イージスって…」

「…あなたが思っている通りよ。インベーダー殲滅組織イージスネットワーク。私はその一員よ。私は…あなたをスカウトにきたの」

「…また、ですわね」
魔法生徒である高音・D・グッドマンは先ほどまで美羽達が戦闘を行っていた場所まで来ていた。しかしあるのはいつものようにインベーダーの残骸と壊れた携帯電話のみ。
「今月に入ってから既に5回目…どう考えてもおかしいですわ」
学園側はこの事に関して
「君たちは何もしなくていい」
と命令が入っていたが、正義感が強い高音や魔法先生のガンドルフィーニ達はその命令を無視できる訳がなく、こうして独自調査をしている訳だ。
「…必ず、尻尾を掴んで見せますわ」
…もしも、このとき、彼女はこれから先何が起こるか知っていたら間違いなく独自調査を止めていただろう。引きずってでも他のメンバーを止めていただろう。
しかし回り始めた運命は止まらない…彼女もまた、その運命に巻き込まれる一人になるのだから。

場所は変わって、千雨達は真帆良のとある駐車場でイージスネットワーク総長である影山零士と合流していた。
「…おめでとう、これで君は『風雷』のゲートキーパーとして、イージスネットワークの一員として認定された。以後の連絡を待ってくれ」
千雨は影山から自分の顔写真が入っているパスカードを渡される。
「それで、これは疑似ゲート。…あまり数は多くないけど、後は来週渡すわね」
美羽は携帯電話が数個入っている小袋を千雨に渡す。
「あの…美羽さんはどうしてゲートの使用頻度を聞いたんですか？」
「…今のあなたにはまだ全てを話せないわ。ただ…ザコのインベー

ダーの倒すときは必ず疑似ゲートで倒して。自分のゲートは本当にヤバくなった時だけ使うように。…不幸になりたくなかったら、ね」
千雨は美羽が何を話しているのか、半分も理解できなかった。ただ…「不幸になる」という言葉だけ妙に気になった。
「千雨ちゃん、あなたが一番幸せって感じる瞬間って何？」
「え？普通に暮らせることですかね」
「そう…じゃあその幸せを大切にしてね。人生は一回しかないんだから」
またも意味深い言葉をしゃべった美羽はそれから疑似ゲートの使い方や注意を千雨に教えて、一同は解散した。
「…いいのか？副作用を話さなくて…」
「…まだ話すのは早すぎますよ。私の時だって期間を開けてから話したじゃないですか…」
美羽は悲しそうな顔をして、影山を見る。影山もゲートの副作用によって体を蝕まれている。もう先だって長くないのかもしれないのに…。
「私なら大丈夫だ。それに…彼女は実の娘よりも浮矢瞬に似ているな。真っ直ぐなところとかな」
「千雨ちゃんが？…五十鈴さんの前でそれ言わないほうがいいと思いますよ」
美羽は苦笑しながら空を見上げた。
（五十鈴さん…会いたいなぁ）
美羽はかつて自分と共に戦っていたパートナーのことを思い出していた。不器用だけれど、とても優しく、そしてとても強かった憧れの人物のことを。

第5話　神々の盾（後書き）

２１の登場キャラ美羽と影山を出して見ました。
美羽はあの戦いから大きく成長し、頼りになるお姉さんキャラに。
でも彼女のゲートって攻撃手段がないからかなり弱い部類に入るのかな？
さて、次回もお楽しみに！

第6話　大停電（前書き）

1万ＰＶ突破しました！
皆さんのご声援ありがとうございます！

第6話　大停電

「決闘？」

「は、はい…。エヴァンジェリンさんと戦った長谷川さんにアドバイスでもと…」

千雨がイージスネットワークに入ってから3日たった火曜日の昼休み。ネギは千雨を相談に屋上に呼び出され、今にいたる。

（…って言われてもな）

実際に千雨はエヴァンジェリンと戦った訳ではない。そのパートナー、茶々丸と戦っただけである。

「あー、私は絡繰としか戦っていないんだが…いいか？」

「は、はい！」

「まず…絡繰は生半可な攻撃じゃ通用しない。前の戦いから何らかの対策は積んでいるだろうな。だから舐めてると痛い目にあうぞ」

「…はい」

「それと…誰か付き添いはいるのか？」

「はい、アスナさんが…」

神楽坂がいれば問題は解決するな。千雨は思考を巡らす。

「この際、接近戦は神楽坂に全部任せろ。先生は呪文を後ろで唱えていればいい。呪文詠唱のロスタイムがそれで稼げるだろ」

「…は、はい」

それから時間ギリギリまで作戦会議は続いた。

「最後に…なんで先生は戦うんだ？」

「僕は…エヴァンジェリンさんに悪いことをやめてほしいんです。それに授業にだってちゃんと出てほしいですし」

悪いことをやめてほしい一。ネギの考えは甘すぎるのかもしれない。

「そうか。でも自分で決めたんだろ？」

「はい！魔法使いじゃなくて先生として考えたんです！」

そう、これが大事なのだ。自分がこうだ、と思ったことをやる。簡

単そうに見えるがこれはかなり難しい。
「…頑張れよ。先生」
千雨はそれだけ言うと屋上から去っていった。
「ありがとうございます…」
ネギはその場で去っていく千雨に向かって頭を下げた。

「ハァ…」
昼休みも終わり、始まった5時間目。千雨は戸惑っていた。まさかネギが自分に相談してくるとは。
（そんな柄じゃねーのにな…）
幼いころから孤立していた千雨は周りから信頼されることなんてなかった。だからネギに相談相手になったりお礼を言われた時千雨はひどく動揺してしまった。
（お礼言われたってことは…信頼されてるんだよな、私）
何なんだよ、これ…。
結局、千雨は心の葛藤から午後の授業の内容は何一つ入らなかった。

「…はい、疑似ゲート。とりあえずこれだけあれば十分でしょ」
放課後、千雨は美羽と合流しこの前の約束通り、追加分の疑似ゲートを貰った。
「今日の大停電の時にインベーターが現れた場合…私達で倒すことになっているわ。だから心の準備はしていてね」
「は、はい」
千雨は知らないが真帆良学園には周りを巨大な結界に囲むことによって貴重な文献などを侵入者から守っている。しかしこの大停電の

際にその結界が無力と化してしまう。そのため、侵入者がこの日だけ激増するのだ。
その侵入者に紛れて真帆良の外にいるインベーターも侵入して来るのでは？とイージスは予想していた。
（おそらく…真帆良には何かインベーターを引きつける物があるわ、それが何だかわからないけど…）
美羽は千雨と別れた後、一人思考を巡らせていた。
（影山さんと本格的に…調べてみる必要があるわね）

『ーちらは放送部です、これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてくださいーザッ…』
時刻は８時、大停電の時を迎える。学園中の電気が消え、辺りは闇に包まれた。
千雨はロウソクに火を付け、万が一インベーターが現れた時のために装備を整える。服装は動きやすいものに着替え、疑似ゲートや木刀、影山から与えられた地図など必要なものを全てまとめる。
（…何事もなければいいけどな）
耳をすませば外から激しい物音が聞こえる。おそらくネギとエヴァンジェリンの戦闘が始まったのだろう。上手く戦えてればいいが…。
そして…。
「ｐｐｐｐｐ！！」
ー来た！２コール目に千雨は携帯を開く。画面には『イージス（Ａ．Ｅ．Ｇ．Ｉ．Ｓ）』の文字が。
（…やっぱり来たか！）
「はい、長谷川です」
「…強力なＩＰＷが発現した。場所は…真帆良大橋だ」

一方、真帆良大橋で繰り広げるネギとエヴァンジェリンの戦いも佳境に入っていた。
「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!来たれ雷精、風の精!!」
「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック!!来たれ氷精、闇の精!!」
ネギ、エヴァンジェリンの両者はこの日最大の呪文を放つため、詠唱を開始する。
「雷を纏いて吹けよ南洋の嵐!」
「闇を従え吹けよ常夜の氷雪!」
「あ、ありゃ兄貴が今使える中で最強の呪文!しかもエヴァンジェリンも同種の魔法!?打ち合う気かよ兄貴!」
ネギの大胆すぎる決断に驚愕するカモ。
同種の魔法同士がぶつかり合えば、呪文の特性など関係ない、純粋なパワー勝負に持ち込むことになる。
(だけどよ兄貴、勝てんのか?あのエヴァンジェリンに真っ向勝負だなんてー!)
「雷の暴風!!!」
「闇の吹雪!!!」
互いに詠唱が完了したのはほぼ同士。ネギの手から稲妻を纏った竜巻が、エヴァンジェリンの手から吹雪を纏った暗闇が放出された。
両者の魔法は2人の間でぶつかり合い、押し合いになる。
「ぐうう!!」
強力な魔法のぶつかり合いでネギの体が悲鳴をあげていた。既に突き出した腕から何ヶ所か、血が吹き出ている。
…負けんなよ、先生。
その時、昼休みに千雨が最後に言った言葉を思い出す。
(そうだ…負けらんないんだ。負けてたまるかー!)
ネギは残っている全ての魔力を一気に注ぎ込む。その瞬間均衡が崩れ、一気に魔法がエヴァンジェリンのほうになだれ込む。

「何!?」
轟音と閃光がエヴァンジェリンを襲った。
「ハァ…ハァ…」
ネギは膝から崩れ落ちる。
煙が晴れると、服を全部吹っ飛ばされ、全裸で空中に浮いてるエヴァンジェリンの姿が。
「フフフ…。やってくれたな、小僧。さすがは奴の息子だけある」
ネギの渾身の一撃はエヴァンジェリンにはさほど大きなダメージを与えられなかった。
エヴァンジェリンはまだ戦う意志を捨てず呪文を唱えようとする。
しかし茶々丸があることに気づいた。
「いけないマスター!予定より7分27秒も復帰が早い!」
辺り一帯に電気が戻り始め、学園結界も復活する。
「きゃん!」
魔力を絶たれて、宙に浮いてたエヴァンジェリンは真っ逆さまに落ちていく。
「…杖よ!」
ネギは疲れた体を鞭打って杖を呼び出す。そしてそれにまたがって落ちるエヴァンジェリンを救出する。
「…よかった。エヴァンジェリンさん」
ネギはそうポツリと呟くとエヴァンジェリンを橋に下ろす、するとアスナ達が駆け寄ってきた。
「ネギ!あんた大丈夫なの!?」
「ネギ先生、マスターを助けていただき、ありがとうございます」
「えへへ…僕の勝ちですよね!これからはきちんと授業に出て、悪いことも辞めてもらいますからね!」
「ああ…分かったよ…。約束は守る」
決闘の約束をエヴァンジェリンは渋々了解する。
そう、誰もが戦いは終わった…、そう思っていた。だが…。
「排除セヨ…」

「「「「「！？」」」」」
まだ戦いは終わってなどいなかった。

それは真帆良大橋の端にいた。姿はネギと同じくらいだろうかの少年が立っていた。
「ゲートノ一族ヲ抹消セヨ…」
ただ、とても少年とは思えない声を発しているが。
「ヴ…ヴァァ！」
そして変化が始まった。少年は懐からサングラスを取り出し、それをかける。
その瞬間、少年はインベーターへと姿を変え、その腹部から鉄の足が飛び出し、ゴキゴキと音をたてながら全長5メートル大の蜘蛛へと変形した。
「あ、ああ…」
ネギ達は動けなかった。体力を使い果たしたこともあるが、恐怖が体を動かしてくれなかった。
「まさか…インベーター？」
「おい…インベーターとは何だ！？」
ネギとアスナはこれがインベーターだと気づく一方、事情を全く知らないエヴァンジェリンは慌てふためいていた。
「排除セヨ…」
大蜘蛛は体のあちこちから重火器を呼び出し、ネギ達めがけて一気に発射した。
避けようとするネギだが疲労で体が動かない。
エヴァンジェリンも同様に動けない。
「ー！！」

…その時ネギ達の前に誰

かが立ちふさがった。
「『鉄壁』の疑似ゲート、最大出力！」
その人が携帯を突き出した瞬間、両者の間に巨大な壁が出現。インベーターの攻撃を全て防ぐ。
「…2回目だな、先生」
「…長谷川さん！」
長谷川千雨が、真帆良大橋の戦いに参戦した。

第6話　大停電（後書き）

次回、千雨が始めて一人でインベーターと戦います。
次回もお楽しみに！

第7話　ゲートキーパー（前書き）

に…2万ＰＶ突破…だと！？
感無量です！

第7話　ゲートキーパー

「グギギ…ゲートノ一族、抹消セヨ…消去セヨ…」

「…」

千雨は蜘蛛型インベーターを睨みつけながら次の手を考えていた。

「ち、ちょっと千雨ちゃん！あいつってもしかしてインベーター！？いなくなったんじゃないの！？」

「…これが終わったら全部話すよ」

慌てているアスナを横目に千雨はバチン、と木刀を取り出してそれを構える。インベーターも千雨の木刀を見て、自分の体を重火器から巨大な刃物へと変える。

「スタイルを合わせてくれんのか…」

千雨はポツリと呟く。

エヴァンジェリンはそれを見て茶々丸に命令を下す。

「茶々丸、ここから脱出するぞ。おい何をしている、ぼーや！早くこっちに来い！」

エヴァンジェリンの言葉に真っ先にカモが反応する。

「兄貴、アスナの姐さん、早く此処から離れるんだよ！戦えない奴がいたって足手まといになるだけだ！」

「う…うん」

アスナに抱えられているネギは悔しそうに歯を食いしばる。生徒は本来自分が守る立場なのに…。

「千雨ちゃん…頑張って！助けたいけど私達じゃ…だからごめん！」

アスナがそう言うと千雨は「早く行け」と言わんばかりにシッシッと手を振る。アスナは「うん」と呟き、エヴァンジェリンの所へ走っていく。

「グオオ！」

しかしインベーターは高くジャンプ。そしてエヴァンジェリンの元へ走るアスナ達めがけて一気に腕を振り下ろす。

「！」

千雨は急いで携帯を取り出し、身体強化の疑似ゲート『迫撃』を使い、アスナ達の前へ。

ドゴンッ！！

勢いよく振り下ろされた刃物を素手で受け止める。橋は受け止めた衝撃でメキメキと音を立てた。

「脱出します」

その後ろでエヴァンジェリンの元へたどり着いたアスナ達は急いで茶々丸の体にしがみつく。茶々丸は背中からブースターを噴かし、空へと上昇。

それをチラッと見た千雨はニヤリと笑って、足蹴でインベーターを蹴っ飛ばす。インベーターは宙を舞い、大橋の真帆良側入り口に音を立てて倒れた。

「これで思う存分、戦える…」

長谷川千雨とインベーター、戦いの幕は今上がった。

一方、この戦いを観戦している魔法使い達は千雨の常人離れした動きに驚愕していた。

魔法や気を使わず、未知の力で攻撃を防ぎ、身体能力を上昇させる…。

その異質の力に彼らは驚き、そして恐れた。そんな中、インベーター事件を独自に調べる人物の一人、ガンドルフィーニはその場にいた学園長に体を向け、口を開いた。

「学園長…何なんですあれは！彼女はどうして魔法や気を使わずに戦えるのですか！？もしかしてあれはここ最近の…」

「ガンドルフィーニ君…。ワシは言ったはずじゃよ？これは我々は関わってはいけない問題じゃと」

そんな学園長の態度にイライラするガンドルフィーニは続いて発言する。

「何故ですか!?この学園に彼女のような奴らが何人もいるのかもしれないんですよ!我々、魔法使いを脅かす存在「ガンドルフィーニ君!」」

学園長が怒鳴り声を上げる。

「これはもはや我々魔法使いだけの問題じゃないんじゃ…人類全てに関わる問題なんじゃよ!」

学園長は恐怖と怒りが混じった、誰にも見せたことのないような顔をしていた。

「何なんですか…彼女は、そしてあの蜘蛛は…」

「聞かないほうがいいと思うがの…」

ガンドルフィーニは学園長の様子を見て、ただ事ではないと判断したが聞いておかなければ、と自分を奮い立たせる。

「聞かせて下さい」

そんな中、学園長は話し始めた。

「あの蜘蛛…奴らはインベーターと呼ばれている」

「あいつらは…生物、何ですか?」

「違う。生物とは限りなく違う何かじゃ」

魔法使い達は混乱していた。何なんだ、それは…。

「さらに…奴らには生半可な魔法は通用せん、むしろ彼らに力を与えてしまう。奴らはエネルギーの塊みたいな物じゃからな、それを吸収してしまうのじゃ。それを倒せるのは彼女のような門の力を持った者…ゲートキーパーだけじゃ」

学園長の発言に口が塞がるガンドルフィーニ。

魔法使いじゃなく人類全て?魔法ではかなわない存在?何を言っているんだ…。

学園長はさらに続ける。

「奴らは…どこにでもいる。そして奴らは…我々のすぐそばにいる。一説によると…既に人類の約半数は潜在的なインベーターと化しているらしい。もはや我々はどうすることもできん。唯一対抗できる存在の彼女らを君は危険な存在と罵るのか?それなら…我々は彼女

らゲートキーパーの力を頼らずに…インベーターに抵抗できるかのう?…恐らく無理じゃな」

人類の約半数。その敵のあまりの規模にがく然とする魔法使い達。

「…これで納得いったかな、ガンドルフィーニ君。我々にできることなど何もないのじゃ」

ガンドルフィーニは必死に何か答えを返そうと考える。

…しかし何も浮かばない。彼女らが抵抗する存在に手を貸すことすら難しい。

魔法使い達は立ち尽くしていた。インベーターの存在を、そして魔法という自分達の武器が通用しないという恐怖を…。

千雨とインベーターの戦

いは平行線を辿っていた。

疑似ゲートだけでは決定的な一撃を与えることができないからだ。

いくら疑似ゲートと言っても所詮は人口的に作った偽りの門。威力や効果は本物以下だ。

複数の疑似ゲートを使って相手を囲む陣を組めば倒せないこともないのだが、ＧＰＳのチェックや座標修正などでどうしてもスキができてしまう。

さらにはインベーターとの明らかな実戦経験の少なさも大きなハンデだった。

美羽など他のゲートキーパーがいればそのスキを補えるのだが…。

千雨一人しかいない今ではそれは不可能なことだった。

（疑似ゲートももう少ない…。使うか、本物のゲートを?）

既に疑似ゲートのストックは片手で数えるくらいしかない。今日貰った残りは自分の部屋にあるが、今から取りにいく暇などない。

だが…自分が持っている『風雷』のゲートならインベーターを一撃で倒すことが可能だ。しかし…。

『自分のゲートは本当にヤバくなった時だけ使うように』

美羽からの忠告が頭をよぎる。
どうする…どうする！
攻撃してこない千雨をここぞとばかりに攻撃を仕掛けるインベーター。その猛攻撃をよけながら千雨は頭の中をフル回転させる。
（…よし！）
千雨はポケットから疑似ゲートを出し、『寸断』の出力を最大限まで上げる。そして携帯をインベーターの頭上にブン投げた。
『寸断』は剣や刃物を作り出すゲートだ。当然、出力を上げれば巨大な剣が作り出せる。
そして、インベーターの真上にできた大剣は重さと重力に引かれてそのまま落ち、インベーターの背中に深々と突き刺さる。
「グギャアアア！」
インベーターは苦しみ、攻撃の手を止めた。チャンスはここしかない！
「うおおお！ゲートオープン！！」
木刀を両腕でしっかり持ち、インベーターに向かって走り出す。『風』のゲートを展開し、そのエネルギーの全てを木刀へと集中させる。
さらに走り出すことによって木刀に纏った風力はますます大きくなっていく。そして千雨はインベーターの頭上へと飛び上がった。
「ウルトラァァ！旋風ゥ！斬りィィィ！！！」
千雨は膨大な風力を纏った木刀を一気にインベーターの頭に叩きつけた！
その瞬間、辺りに爆発が起こったかのような風が発生。
その風力はネギが先ほど使った呪文『雷の暴風』を遥かに上回る威力だった。
インベーターはその風力でバラバラになり、空中で消滅していく。
そして風が収まった時にはインベーターは跡形もなく消えてしまっていた。
「使っちゃったよ…ゲート…」

その場には、先ほどのインベーターのコアだけが残っていた。

この戦いを離れた場所から見ていたネギ達は千雨の力を見て、驚きを隠せなかった。

「ウソ…だろ。これが長谷川の姐さんの実力…」

「す…すごい」

その中、エヴァンジェリンだけが何かを感じとっていた。

(あれだけの技を詠唱無しでだと?しかも気を使っている訳でもない。この間といい、今回といい…あいつが使う得体のしれない力。…ジジイに聞いてみる必要があるな)

…こうして多くの疑問を残したまま、激動の一夜はとりあえず終わりを迎えたのだった。

第7話　ゲートキーパー（後書き）

はい、とりあえずエヴァンジェリン編はこれで終了。
次回は学園サイドが大騒ぎになるかも…。
お楽しみに！

第8話　愛衣と千雨（前書き）

今回は魔法使いサイドの話です。
話が殆ど進まない…。

第8話　愛衣と千雨

大停電の翌朝、千雨は通学途中、ずっとイライラしていた。
原因は何者かが女子寮から自分のことを尾行しているからだ。しかもあっちは千雨が気づいていないと思っているらしい。だが、自分からして見ればバレバレの尾行であり、それが余計に千雨をイライラさせた。
（…誰だ？朝からご苦労なことで）
千雨は誰か分からないが朝からそんな行動をしている奴らに呆れながら、校舎へと入っていった。

一方千雨を尾行していた人物とは魔法生徒である佐倉愛衣と高音・D・グッドマンの2人であった。
昨夜、得体のしれない力を使って蜘蛛の化け物を倒した人物、長谷川千雨を高音達はマークすることにしたのだ。
しかし何があったのか集まったのは高音と後輩の愛衣とガンドルフィーニだけ。他にいたメンバーの殆どが調査を止めたいと連絡したのだ。そのことに高音は朝から怒っていた。その打ち切る原因を高音自身は知らないのだが。
（全く…どうして他の皆さんは調査を打ち切るなど…臆病風にでも吹かれてしまったのですか？我々、魔法使いは正義のために行動するのではないのですか！？）
しかもリーダー格だったガンドルフィーニも調査を打ち切るか迷っており、高音達に手を引けと警告してきた。高音は長谷川千雨が今月から頻発に起こっているあの原因不明の事件に関わっている、もしくは何かを知っているのだと予想し、尾行を決行させたのだ。
「お…お姉様。やっぱり止めたほうが…」

一方の愛衣はこの計画にあまり乗り気ではなかった。学園長から、関わるなと警告されたのもあるが、あの頭が堅いガンドルフィーニが調査を打ち切るかどうか迷っているなど、ただ事ではない。自分達が踏み込んでいい問題じゃないと感じたのだ。しかし…。

「ハァ…愛衣、あなたなら分かるはずです。我々、正義の魔法使いは何をすべきか、何をやらなければならないかくらいは」

「…それは」

愛衣の言葉は正義感が強い、悪く言ってしまったら頭が堅い高音には届かない。

確かに高音の言い分も分かる。自分達、魔法使いの殆どは正義のために活動してる。

だから高音の行動は魔法使いとして正しいこと、当たり前のことなのだろう。

愛衣が返答に困っていると、校舎から予鈴が響いた。

「…まあ、とりあえずこの辺で。連絡はまたしますわ」

高音はそれだけ言うと、高等部の校舎へと歩いていった。

愛衣は高音の後ろ姿をじっと見つめながらあることを考えていた。

自分が魔法学校にいた頃から、そしてこの学園に来てからますます膨らんでいくその疑問について。

「お姉様…正義っていったい何なんですか…？」

蚊が鳴いたような愛衣の呟きは人混みに紛れて、かき消されていった。

「きょ…京都行きは中止！？」

修学旅行の話題でクラスが大盛り上がりしている中、ネギは学園長室に呼ばれた。そしてネギはあまりのショックに屋根が壊れんばかりに叫んでいた。

「うむ…今回の修学旅行を先方の関西呪術協会が嫌がっているのじ

や」
「え？」
話を聞くとこういうことらしい。
関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪く、今年は魔法使いであるネギがいると言ったら、関西側が修学旅行に難色を示したのだ。学園長は西とのケンカをやめて仲良くしたいのだと言う。そこでネギに特使として、西の長に親書を渡して東と西を和解してほしい…という訳だ。
「無論、あちら側から何かしらの妨害があるかもしれないが…。ネギ君、どうするかのう？」
「…任せて下さい、学園長先生！」
自信満々の目ではっきりとネギは言う。あのエヴァンジェリンの戦いから自信をつけたのか真っ直ぐな目をしていた。

ネギが出て行ってから数分後。
バーン！と学園長室の扉が勢いよく開かれる。
「おい、ジジイ！聞きたいことがある」
エヴァンジェリンがズカズカと部屋に入り込んできたのだ。
「な…何じゃ？」
「とぼけるな。昨日長谷川千雨が使っていた能力はなんだ。さらにインベーターとはなんだ？」
エヴァンジェリンは学園長の胸ぐらを掴んで尋ねる。学園長は冷や汗をかいていた。
「分かった！だからといって…ワシも分からんことが多い。だから間違っているかもしれんぞ？」
「構わん。話してくれ」
そして学園長は昨夜ガンドルフィーニに話したようにゲートやインベーターのことを説明した。

「…もしかしてそいつらはアレか?昔、日本でクーデターを起こした…」
「…正解じゃ。知らなかったんじゃないのか?」
「ふん、呼び名を知らなかっただけだ!それに昔と比べて昨日の奴の姿、違っていなかったか?」
「…まあ、な」
部屋中に嫌な空気が漂う。
「…なあ、ジジイ。インベーターに勝つことはできるか?」
「…無理じゃろうな。奴らは負の感情から生まれる。奴と戦うことは地球上に住む人間全員と戦うもんじゃからな。それと…」
「何だ?」
そして学園長は今までにない真剣な顔でエヴァンジェリンを見つめた。
「…長谷川千雨君にちょっかいを出すのは止めてくれ」
「…」
普段なら「何をバカなことを!」と反論しただろうが、学園長のただならぬ雰囲気にエヴァンジェリンはただ事ではないと、そう感じた。
「…何故だ?」
「彼女に…これ以上ゲートの力を使わせないためじゃ。あれはお前が思っているほど便利な力などではない」
「…分かった」
それでインベーターやゲートの話は終了した。

エヴァンジェリンが去った後、学園長はイスに腰掛け、考えていた。
(…我々、人類にとって1970年のあの日、クーデターを止めたことは正しいことだったのじゃろうか?確かにやり方は問題があったが影山零士の考えは一律あった。そして…もし…)

そこまで考えて…考えるのを止めた。
何故なら…歴史に「もし」なんてないのだから。
「もし」が起こるのは…未来だけだからだ。

放課後、千雨はすぐ寮に帰らず、ぐるっと周り道をしていた。
めったに行かない商店街や修学旅行セールがやってある店などゆっくりと回っていく。
途中、ネギやアスナを見かけたが、向こうが気づいていなかったのか特に話すことはしなかった。
まあ、今は話しかけられない方が都合がいいのだが。
そして、世界樹広場に来た時…千雨はピタッと足を止めて、後ろを振り返った。
「…人のこと、コソコソつけ回すのは関心しねえな。出てこいよ」
「…」
…出てくる気配、なし。
千雨はため息を吐き、威嚇の意味も込めてポケットから疑似ゲートを一つ取り出し、起動。
そしてパスワードを入力するフリをしたところで…そいつは慌てて木陰から出て来た。
(…やっぱりな。少なくともコレがどういう物か知っているってことは…ネギ先生のような魔法関係者か?)
だとしたら面倒くさい。この間の桜咲刹那のように勝負を挑まれても困る。
そしてそいつを千雨は見た。
真帆良学園中等部の制服を身にまとい、どこかオドオドしている少女、佐倉愛衣を。

（ど、どうしよう！）

愛衣はこちらを警戒している千雨にビビりながら自分が何故こんな行動をしたのか思い出していた。

正直、尾行には反対していたが愛衣は時間が過ぎるにつれ、高音とは違う目線で千雨がどういう存在か気になっていた。

彼女がどんな思いで戦っているのか、何が目的なのか…。

そこには高音が言う「正義のため」などではなく、一人の人間として彼女に興味を持っていた。

学校が終わった放課後、偶然帰る千雨の姿を発見した愛衣はすぐに跡をつけた。

何かキッカケがあってくれれば…そう祈っていたが、それが千雨の逆鱗に触れてしまったらしい。

「あ…あの！私、佐倉愛衣って言います！」

「何のようだ」

「私…魔法使いなんです！あなたが…何のために戦うのか、気になって…。ええと…でもあなたと戦うとかそんなんじゃなくて…」

つまり、愛衣は魔法使いで千雨のことが気になっている、ということだ。

「…長谷川千雨」

「え？」

「私の名前だよ、長谷川千雨」

どうやら敵意はないと分かってくれたらしい。

「は、はい！千雨さん！」

「それで…なんで戦うか、だっけ？多分、あんたらとは比べ物にならないくらいしょうもないな。私が戦う理由はうちのクラスの連中がバカみたいにいつまでも騒げるような日常を守りたいだけだ。正義なんて大層な物持ってねえよ」

「…！」

愛衣は衝撃を受けていた。

周りの魔法使い達は正義のために活動することに誇りを持っている。

しかし千雨の活動目的は正義など一切関係ないものだった。
「…あの、千雨さん」
「…ん？」
「また…お話しても…いいですか？」
「私なんかでよければ、な」
それだけ言うと千雨は「そろそろ帰らないと」と、その場を去っていった。

千雨が帰った後、愛衣はしばらくその場に立ち尽くしていた。
（長谷川、千雨…）
今日、愛衣がとった行動、そして千雨との出会いは後に彼女の運命を大きく変えることになる。
…そのことに愛衣自身が気づくのは、まだ先の話である。

第8話　愛衣と千雨（後書き）

愛衣ちゃんは原作とほぼ別人になっちゃうかも…。
高音が嫌な人物になっちゃったかも…。アンチ小説じゃないのに！

第9話　人と異星人（前書き）

前半と後半のギャップが激しいです。

第9話　人と異星人

修学旅行まで残り2日となった日曜日。
千雨は美羽、影山と定期会合を開くため、初めて美羽と会ったカフェに集まった。
「とりあえず、これが大停電の時に出現したのインベーターのコアです」
千雨は布で厳重に梱包したインベーターのコアをテーブルの上に置く。
影山はそれを受け取り、懐に入れる。
「長谷川君の話だと未確認は単体で巨大化か…。今まで数体で結合や合体するタイプとは明らかに違うな」
影山の予想外の発言に驚く美羽。
「影山さん…まさか…新種タイプ？」
「恐らくはな。そこにオリジナルインベーターが絡んでいるかもしれん」
コーヒーを啜りながら、そう言う影山。
少なくとも未確認タイプのインベーターが出たとなると、それをばらまいた親…オリジナルインベーターが存在することになる。又はそのインベーターが何らかの理由で突然変異したか…。
どっちにしたってインベーターを狩る側のイージスにとっては迷惑極まりないことだが。
「まあ、こればかりは調査してみないと分からん。…それと、長谷川君。火曜日から修学旅行らしいね」
「え？は、はい」
突然の話題の切り替えに慌てる千雨。まさかここで自分の修学旅行の話題が出るとは。
「…インベーター出現率が下がっている今だが君達が修学旅行中にインベーター絡みのトラブルに巻き込まれる可能性も否定できない」

影山の話を真剣に聞く千雨。
（そうか…対抗できるゲートキーパーは私だけ。もし何かあったら…）
「まあ、緊急時の連絡や装備の補充などサポートは最大限にする。だがあまりにも気を引き締めすぎないようにしてくれ。モチベーションも下がるし、修学旅行は学生の頃にしか味わえないからな、ガチガチにしていても楽しくはないだろう？」
「…まあ、それは」
「…それと、これは報酬だ」
影山は少し分厚い茶封筒をテーブルに置き、千雨に渡す。
（…そういえばインベーターを倒すと報酬が出るんだっけ）
かつてイージスはインベーターに対抗するために作られた国際組織だった。しかし現在のイージスは旧イージスのデータや技術は受け継いではいるが公的な組織ではなく、民間人で構成されている私的組織となっている。
インベーターハンターとして形を変えたゲートキーパー達はその敵、インベーターに懸賞金を掛ける形で契約しているのだ。
だが、その殆どが本物のゲートを持っている訳ではなく、疑似ゲートを使う者達だが。
そのことをすっかり忘れていた千雨は何か悪いことをした気分で報酬を受け取る。
（まあ、倒したのは1体だけだし少ないだろ）
そしてその金額を数えて…度肝を抜かれることになる。
（福沢諭吉が1枚2枚。……20枚！！？）
せいぜい数千円程度だと高をくくっていた千雨だが、自分が今まで持ったこともない金額が入っており、慌てだす。
「あ、あのあのあの…。こ…こんなに…なんで…？」
「ああ、君は未確認タイプを最初に倒した人物だからな。貴重なデータ提供者として報酬が上乗せされたんだ。受け取ってくれ」
そうは言っても今まで大金とは無縁の生活を過ごしてきた千雨にと

って２０万は「はい、そうですか」と言って受け取れる金額じゃない。

（影山さん、無茶言っちゃだめ。イージスに入りたてで、報酬を貰えることすら知らない千雨ちゃんが、そんな金額与えられて驚くのは当たり前よ）

美羽はかつて似たような経験をしたことがあるので、千雨が慌てている姿を同情するかの目で見ていた。

二年前、美羽がまだ自分がゲートキーパーになりたての頃、オリジナルインベーターである幽霊少女と戦ったことがある。

まあ自分はパートナーである五十鈴を幽霊少女がいる現場に届けただけで、直接戦った訳ではないのだが…その戦闘が終わった数日後、影山に「勝利に貢献したから」と言われ、数千万円が自分の講座に振り込まれており、影山と言い争いをしたことがあるのだ。

何とかして報酬を返そうとする千雨とそれを大人の対応でやんわりとかわす影山。

そんなことが数分続いたが…影山の携帯からけたたましい音がなり響き、中断になる。影山はそれを開いて、顔を歪ませる。

「…！原宿に微弱だが広範囲にＩＰＷが発現している。恐らく地区担当だけでは歯が立たない。二人とも至急、原宿に向かってくれ」

二人とも突然の出来事に驚くがすぐに立て直す。

「「はい！」」

千雨と美羽は美羽のバイクを停めてある駐車場にやってきた。

「千雨ちゃん、乗って！」

美羽はヘルメットを千雨に投げる。

「あの、美羽さん？原宿は電車で行ったほうが速いんじゃ…」

ヘルメットを被りながら、千雨はボソッと呟く。それを聞き、ニヤリと美羽は笑った。

「ただのバイクなら、ね。このバイクはイージスが作った特注品よ。そこらへんのバイクとはスペックは段違いよ！」
美羽が乗っているバイクの名称はＵＰ－５５。
二年前に美羽達がぶっ壊した車、ヨタハチの設計技術をバイクに組み込んだ物だ。
小型ながらゲートエネルギー増幅システム、通称ゲートエンジンを装備、そのスピードは一般車を軽々と超えるスーパーバイク。
しかしその反面、コストが恐ろしく高い代物で、現在美羽が乗っている先行試作機を含めて２機しか作られていない。
「それじゃあ、行くわよ！」
ブゥン！勢い良く加速し、真帆良市外へと飛び出す美羽達。
初めてバイクに乗る千雨はおっかなびっくりで美羽の腰を掴んでいる。
「あ、そうだ！千雨ちゃんも一台貰う？いい物よ、これ！」
美羽のとんでもない発言に驚愕する千雨。
「わ、私免許持ってません！中学生がバイク運転なんてできませんよ！」
「大丈夫大丈夫！これは速い自転車みたいな物だもん、操作も簡単だし、乗っているだけでいいのよ！免許は影山さんのコネを使えば…」
なんだか美羽の性格が違うように見えるのは気のせいだろうか？
（は、早くついて…！）
暴走する美羽に千雨は涙目になりながらその時が来るのをじっと待った。

場所は変わって原宿。
ここに人知れず、インベーターと戦いを繰り広げる者達がいた。
「ハァ…ハァ！」
インベーターハンターである男は、とあるカラオケボックスの中を

必死で逃げ回っていた。
既に疑似ゲートは全て使いきったしまい、ゲート能力を持ってない男ができることは逃げることだけ。
しかも狭い店内でインベーターから逃げ回り続けるのは至難の技だ。
「下の階はダメだ…上に…逃げなきゃ…ヤバい」
店内の階段を使って上の階の踊場に上がった男は…その光景に絶望した。
「…そんな」
上の階は既にインベーターに占拠されていたのだ。数十体のインベーターが店内をうろついている。上も下も危険、完全に逃げ場がなくなってしまった。
「ギ…？」
そしてそのうちの一体が男の存在に気づいた。
ゆっくりとこちらに向かってインベーター達が歩いてくる。
「もう…ダメだ！」
男はうずくまって、自分の死が近づいてくるのをはっきりと感じた。
インベーターが重火器を取り出す音を聞き、ああ、俺は数秒で死ぬんだ、とはっきり思った。
「ゲート…オープン！」
しかし、何時までたっても男の危機的状況は来なかった。
何故なら…我らが主人公、長谷川千雨が男の前に立ち、インベーターと戦っていたのだから。

原宿に着いた二人は急いで割り当てられた現場に急行した。
「…このカラオケボックスね！突破口は私が引き受けるわ。千雨ちゃんは上に上がって敵を倒して！」
「はい！」
店の中に入った美羽は、すぐさま『赤熱』の疑似ゲートを数個使い、

階段近くのインベーターを倒す！
その隙に千雨は二階に上がり、男を救出。
「大丈夫ですか？」
「あ、あんた…増援？」
男はホッとしたのか鼻水を流し、ものすごい顔をしていた。
「はい！だから後は任せて下さい！」
千雨は男を励まし、『寸断』の疑似ゲートを発動、大剣を作り出す。
それを握り、インベーターへ向かって走り出した。
「排除セヨ、排除セヨ！」
インベーター達は一斉に重火器を腹部から取り出し、千雨を狙って放つ。
しかしインベーターのその行動を既に読んでいた千雨は、焦らずに『鉄壁』の疑似ゲートをインベーターの前に展開し、攻撃を全て防ぐ。
それによって発生した煙幕に紛れて、千雨は一体一体確実にインベーターを切り落としていく。
「グアア！」
切り落とされたインベーターはコアだけ残して消滅する。
「…次！」
千雨は通路の奥にいるインベーターを倒しながら、店内を走り出した。その時、「どうして客がいないのだろう」とふと疑問に思ったが、新たなインベーターを見つけ、その疑問を頭から消すことにした。

…その数分後、戦闘は終わった。結果から言えば特に何も変わったこともなく、インベーターのコアを回収して事件は終了。
路地裏で男は何度も千雨に頭を下げて、帰っていた。
…ただ、千雨は一つだけ気になったことを美羽に聞いた。何故か聞

いちゃいけない気もしたが聞かずにはいられなかった。
「…ねえ、美羽さん。どうしてあの店…休日なのに客がいなかったんですか？」
美羽は重い表情を浮かべながら、インベーターのコアを一つ取り出す。
「…感染したのよ、あの店にいた全員にね。インベーターは…昔は命を持たない無機物だったの。でも時代が進み、インベーターは進化した…。他人の迷惑も気にしない心ない人間達は…みんなインベーターになる可能性がある」
「…！じゃあそれ…」
千雨は気づいてしまった。いや…本当は気づいていたのかもしれない。
でもそれだけは認めたくはなかった。だってそれが本当なら今日、私が倒したインベーターの正体は…！
「…人間よ。正確に言えば人間だった物になるわね」
美羽はつらそうにインベーターのコアを見つめる。
千雨は呆然としながら影山が言っていたことを思い出す。
影山は修学旅行中、インベーター絡みのトラブルに巻き込まれる可能性があると言っていた。
千雨は最初、ただインベーターが攻撃を仕掛けてくるだけと思っていた。
だけど…そうじゃない。影山が本当に言いたかったことは…３－Ａのクラスメイトがインベーター化する可能性があると言うことだったのだ。

あの後、千雨は美羽に送られ、自室に戻ってきた。
千雨は特に何もする訳もなく、机に座った。
インベーターの正体を知ってしまった今、もう自分は何も感じない

でインベーターを倒すことはできないだろう。
（でも…倒さないと被害が広がる。でも私がやっているのは殺人と同じ…）
でも、インベーターは化け物だと割り切ることができない。
（どうすれば…いいんだよ！）
突きつけられたあまりにも重すぎる真実に千雨は自問自答を繰り返すことしかできなかった。

第9話　人と異星人（後書き）

とりあえず、次回から修学旅行編に入ります。
オリジナルインベーターなど出していきたいと思います。
構成や何やらで更新遅くなります。
ご注意を。

第１０話　３－Ａ西へ（前書き）

４万ＰＶ突破！ありがとうございます。
さて今回から修学旅行編になります。

第１０話　３－Ａ西へ

「グアア…！」

学校の帰り道、イージスからインベーター発生の連絡を受けた千雨は現場に急行した。

「アア…！」

既に現場はインベーターで埋め尽くされており、辺りには人一人いなかった。

（早く倒さないと…！）

千雨はポケットから疑似ゲートを取り出し、パスワードを入れようとした。しかしその時、誰かの声が聞こえた。

「助ケテ…助ケテ」

誰だ？逃げ遅れた人が近くにいるのか？だとしたらマズい、早く逃がさないと…！

千雨は辺りを見渡す。

しかし辺りには誰もいなく、人の動きもなく、ただインベーターがゆったりとこちらに近づいてくるだけ。

その時、近づいてくるインベーターの一体が喋り始めた。

「痛イ…助ケテ…」

その一体を引き金に次々とインベーター達が喋り始める。

「痛イ痛イ」

「助ケテヨ、オ姉チャン」

「一緒ニナロウ」

「遊ボ遊ボ」

無機質な喋り方と不気味な歩き方で近づいてくるインベーダー。

「あ…ああ…」

疑似ゲートを持つ手が震えて、まともに持てそうにもない。もう…ダメだ。

恐怖に駆られた千雨は疑似ゲートを地面に落とした。

そこで…千雨は気づいてしまった。さっきの声は人の物じゃなかった。インベーダーの物だ。
そしてあいつらは…インベーダーは化け物じゃない…あいつらは…。
「一緒ニ…我ラト共ニ…」
私と同じ…人間なんだから…。

「ー！！」

ハッと目を開ける。
自分は席に座っており、辺りを見渡すと周りには新幹線の中で大騒ぎしているクラスメイトの姿が。
（夢…？）
慌てて腕時計を見ると『４月２２日１１時５６分』とある。
千雨は今日の記憶を辿る。確か今日は修学旅行。９時に大宮駅に集合して、そのまま東京駅まで電車で行き、そこで京都行きの新幹線に乗り換え。
それで席に座ったら疲れて寝てしまった…。ここで記憶が途切れている。
（…気味悪い夢見ちまった）
インベーダーの正体を知ってしまってから数日、千雨はまだ立ち直れていない。
さっきの夢は…自分自身が辿る末路なのだろうか？
もしこのクラスに感染者が出た場合…自分は殺せるのか？
いやそれ以前に…自分はインベーダーを殺せるのだろうか？
元々自分達と同じ存在だった人間を…。
「あの、千雨さん大丈夫ですか？気分が優れないようでしたら…」
千雨と同じ班の班長、雪広あやかが心配な顔でこちらを見ていた。
千雨の顔には嫌な汗が沢山浮いてたし、顔色も悪い。心配するのも無理はないだろう。
「…あ、大丈夫だいいんちょ。少し…嫌な夢、見ちまっただけだか

ら…」
「…そう、ですか？無理しないでくださいね？気分が優れないならいつでも言ってください」
大丈夫だと言う千雨を心配な顔で見るあやか。
と、ここで何か面白いものを見つけたように朝倉和美が千雨に食ってかかる。
「へえー、千雨ちゃん、嫌な夢って何見たの？お化けが出てくる夢？ねぇねぇー何なの？」
千雨は朝倉の質問にイライラしていた。何で、人が必死に悩んでいる間にコイツは…！
それを知らない朝倉は千雨の怒りのボルテージを上げていく。
「無視しないでよ、千雨ちゃん！質問に…」
「うるせえんだよ！ぶち殺すぞクソアマ！！」
キレた千雨は怒鳴り声を上げ、朝倉の胸ぐらを思いっきり掴んだ。
朝倉はそんな千雨の行動に慌て、周りの生徒達は怒鳴り声に驚き、騒ぐのを止めた。
「私はさ、今不機嫌なんだ。黙ってくれよな…！」
千雨はそれだけ言うとドンと朝倉を突き飛ばし、席を立ち上がり通路を歩く。
と、騒ぎを聞きつけたネギがこちら側にやって来る。
「な、何があったんですか！？」
「あ、ネギ君！千雨ちゃんが朝倉を脅して…」
ここでまるっきり状況が飲み込みていないまき絵がネギを誤解させるようなことを言ってしまい、更に事態がややこしいことに。
「お、脅す！？長谷川さん、ダメですよ、そんなことしたら！」
ネギは誤解しているが朝倉は脅されてなどいない。むしろ朝倉はこの事態の元凶で、千雨は被害者なのだ。
それを誤解して煽ってしまい、ますます千雨のイライラは増していく。
千雨はチラリとこちらを見た後、自動ドアをくぐって別の車両に行

ってしまった。
その後、この事態の一部始終を知っているあやかや千鶴が事態を説明する。そして真相を知ったネギは生徒を傷つけたと後悔するように顔をしかめた。

「ハァ…」

千雨は通路でため息を一つ。
やってしまった。流石に今日は我慢しようと決意したのにこのザマか。
落ち込んでいると千雨に近づいてくる人影が一人。それは先週戦ったクラスメイト、桜咲刹那だった。
「あの…大丈夫…ですか？」
千雨の落ち込み具合に刹那は心配した。
「…ああ、何とかな。そういえばさ、桜咲…近衛とは上手くいってんのか？」
「え？ええ、まあ…　おかげ様で」
顔を真っ赤にしながら俯く刹那。色々大変そうだな。
「…！」
とここで、何かを感じとった刹那は気配を変える。バッと竹刀袋から野太刀を取り出し、こちらへ飛んでくるツバメを切り裂いた。
普通なら血や臓器が飛び出るが、紙でできたそれはヒラヒラと床に落ちるだけ。
と、そのツバメと一緒に手紙も落ちてくる。
「…何だこりゃ？折り紙と手紙？」
千雨はしゃがんでそれらを拾う。
「あっ、それは…」
刹那が説明しようとした時、自動ドアが開き、ネギが入ってくる。
「桜咲さん！？と…長谷川さん」
ネギはさっきの発言を気にしているようで千雨を見て、申し訳なさ

そうな顔をしていた。
「…長谷川さん、その封書を私に渡してくれませんか？」
「え？ああ」
刹那が渡せと言うのだから大切なものなのだろう。千雨はそのまま封書を刹那に渡す。それを受け取った刹那は、ネギへと差し出す。
「落とし物ですネギ先生」
「はあ…って、これは僕の大切な親書！？ありがとうございます桜咲さん！」
ネギは慌てて刹那に頭を下げる。刹那な何一つ表情を変えず、とりあえず頭を下げた。
「気をつけて下さい、先生。またこんなことがあるかもしれませんから」
それだけ言うと刹那はスタスタとその場から去っていく。
そして千雨とネギだけが残される。
「…すいません長谷川さん。誤解して…」
「…大丈夫ですよネギ先生。こういうふうに誤解されるのは慣れてますから」
メガネをブリッジをくいっと上げ、ワザと敬語を使う千雨。事態を勝手にややこしいことにしたネギに対してのちょっとした仕返しみたいなものだ。
ネギはあうあうと慌てている。ざまあみろ、とニヤリと笑って千雨は座席に戻った。
席に戻った千雨に待っていたのは謝罪の嵐だった。
元凶の朝倉はもちろんのこと、まき絵やあやかも謝って、まるで葬式のような空気になってしまった。
そんなこんなで一同は京都へと向かう。

修学旅行1日目の夜。千雨はホテルの各班に振り分けられた部屋でため息を一つついた。

今日1日の出来事をまとめると最悪の一言に尽きる。
京都に着いた3－Aが最初に訪れたのは清水寺。恐らくは京都に修学旅行に来た誰もが訪れる定番スポットだろう。
ひとしきり清水寺を楽しんだ生徒達が向かったのは音羽の滝。ご利益がある水があり、その水に誰が仕込んだのか酒が入っていたのだ。
そのせいでクラスの約半数が酒を飲んでしまいダウン。このことが周囲にバレれば修学旅行中止も有り得ない話ではない。
残った生徒達が他の先生をごまかし、酔っ払って寝ている生徒達をバスに押し込んで何とかホテルへとたどり着いた。
更にクラスのリーダーであるあやかも酔っ払いの中に含まれていた。
おかげで残ったメンバーをまとめるのに一苦労するハメに。酔っ払うくらい飲むって…どれくらい飲んだんだ?酒が入っていることくらい一口目で気づいてくれよ、いいんちょ。
「ったくコイツらは…騒ぐだけ騒いで用がすんだらポイか?たちが悪いぜ全く」
「まあまあ」
千雨が布団の中でグウスカ寝ているあやかと朝倉を睨みつけながらぼやいたのを、クラス一のスタイルを持つ那波千鶴がなだめる。
(というかよ…そのスタイルといい性格といい…あんた本当に中3か!?大学生と言っても騙せるぞ!)
「何か言った千雨さん?」
「な、何でもねぇよ!」
千鶴が千雨の心の声を読んだのか、背後に黒いオーラをまといながら威圧感のある声を出す。
それから事態は何事もなく進んだ。予定が変わったりしたものの特に事件もなく物事は進む。
そして時刻は午後9時。千雨達は部屋に備え付けてあるテレビでバラエティー番組を見ていた。と、ここで…。
ppppppp!
「あ、私の」

自分のバックから着信音が鳴り響く。他のメンバーに誤解させないように一言言ってから画面を見る。
画面には『イージス（A．E．G．I．S）』の文字が。
「…！」
できれば修学旅行中は来てほしくない相手からの着信に舌打ちをし、電話をする為に部屋を出る。
「はい、長谷川です」
「…影山だ。君が泊まっているホテルから数キロ先に強力なＩＰＷが発現した。至急向かってくれ」
「はい…あの、影山さん」
「…何だ？」
普段ならここで切っているが聞きたいことがあるのでまだ切らない。
「影山さん…インベーダーの正体って…人間なんですよね」
「…ああ、そうだ。いい気はしないか？」
「当たり前じゃないですか！」
千雨はつい怒鳴り声を上げてしまう。仮にも自分がやっていることは殺人なのだ。いい気になどなれるはずがない。
「私もな…いい気がしないよ。怖いし戦いたくもない。だが…辞めてどうする？インベーダーは我々ゲートキーパーにしか対抗できない。ここで辞めれば…人類は滅ぶだろうな」
「…」
影山の本音を聞き、驚く千雨。
「人類を守るなど人生を半分も生きていない君が背負うには重すぎるかもしれない。だが…やらなきゃやられる。自分の明日くらい…自分で守らなければ…」
「…」
「だが、戦いに慣れろとは言わない。大切なのは恐れることだ。戦うことに何も感じなくなってしまったら…奴らインベーダーと同じ存在になるからな」
「…はい」

「それでどうする？嫌なら…」
「やります。やらせて下さい」
千雨の言葉に影山は少し黙る。
「…無理はするなよ。長谷川君」
プツンと電話が切れる。自分の明日くらい…か。
携帯をパチンと閉じ、部屋に戻る。
そして自分のバックから私服と仕事用道具をまとめたリュックを取り出す。
「あれ？何で着替えたの千雨ちゃん？」
同じ班の村上夏美が不思議そうにこちらを見た。まあそうだろう、もうすぐ寝る時間なのに着替えなどおかしいにもほどがある。
「ああ、ちょっとコンビニに行くからな」
「え？それはマズいんじゃないの？」
「大丈夫だって。ちょっとだけだから。買ってきてほしい物あるか？」
心配する夏美と千鶴をなだめ、買ってきてほしいものを聞き、メモを取る。そして細心の注意をとりながら部屋を出た。
もうとっくに移動時間は過ぎているので、緊張が走る。
もし『鬼の新田』などに見つかったら、携帯電話だらけのリュックを持って何をしているか、説明に苦労する羽目になる。
ホテルのロビーにある女子トイレに入り、換気扇脇の窓を開ける。
そこから外に出て、まるで脱獄している気分になりながらも目的地まで移動する。
（やらなきゃやられる…）
影山が言っていた言葉を思い出しつつ、千雨は走る。

「ねぇ、那波さん。千雨ちゃん知らない！？」
千雨が出てってから数分後、今度はアスナが千鶴達の部屋を訪れて

きた。
「え?千雨さんならコンビニ行くからってついさっき出て行ったわよ」
しまったと額に手を当てる。
もう少し速く来ていたら間に合ってたかもしれないのに。
「じゃあ戻って来たら私の班の部屋に来てって千雨ちゃんに言って!」
「はーい」
テレビを見ながら夏美が答える。アスナはバタンとドアを閉めて部屋を出ていった。

「あ、どうだった姐さん!」
「ダメ、コンビニ行くからって外出したみたい」
「ダメか…長谷川の姐さんが加われば強力な戦力になるのにな…」
アスナが千雨を探すのには訳がある。
アスナの親友であるこのかが関西呪術協会に狙われているのだ。理由は極東一の魔力を持っており、更に呪術協会の会長の娘だからだ。権力狙いの連中に目をつけられ、この修学旅行中に厄介事に巻き込まれるかもしれない。
そこでこのかを守るためにネギ、アスナ、カモ、刹那は3ーA防衛隊を結成。
更にカモは千雨をメンバーに追加しようと提案したのだ。
確かにあの夜、千雨の実力はこの場にいるほとんどのメンバーが見たので、どれだけ強いか知っている。
味方になってくれたらこれほど頼もしい人物はいないだろう。とりあえず話だけでもと、部屋を訪ねると…外出したとのこと。
「とりあえず…千雨ちゃん見たら連絡頂戴。私達はこのかを見張るから」

しかしアスナ達がトラブルに巻き込まれるのはすぐ先の話である。
そしてアスナの人生で最もスリリングな修学旅行が始まるのだった。

第１０話　３－Ａ西へ（後書き）

とりあえずここまで。
次回は戦闘入ります。
うまく書けるといいな…。
次回もお楽しみに！

第１１話　京都対戦（前書き）

京都の方言がうまく書けない…。

第１１話　京都対戦

「…ほな月詠はん、お嬢様をさらったら京都駅に行くから、しっかり頼むで？」
「はい～、千草はん。たっぷり楽しませて貰います～」
京都市内のとあるビルの屋上にて、巫女服姿の女性とゴスロリ姿の少女は遅めの夕食を取りつつ、作戦会議を開いていた。
巫女服姿の女性の名は天ヶ崎千草。彼女こそ清水寺で３－Ａに妨害を仕掛けた張本人で、極東随一の魔力の持ち主であるこのかを狙う人物である。
一方、ゴスロリ姿の少女の名は月詠。千草が雇った神鳴流剣士である。彼女は腕は確かだが、戦闘狂という性格が故に扱いが難しい人物である。
「千草はん、ほんなら先に行きますえ。人払いの結界を張らんといけませんから～」
そう言うと月詠はビルの屋上から飛び降り、空中を飛び回りながら暗闇へと消えていった。
それを千草は遠目に見ながら自分が心底嫌う西洋魔法使いをどう痛みつけるか…それを考えていた。

ホテルから数キロ先にある路上を千雨は走っていた。
（あと…少し）
数百メートルも先に進めば、インベーダーとの戦闘が始まる。
正直、まだ迷っている。自分がインベーダーを殺していいのか否か。だけど…やるしかないのだ。これは自分しかできないことだ。だから…。
「やるしか…ねぇ」
そして千雨はＩＰＷの発現ポイントにたどり着いた。そこは巨大な

駐車場で辺りには車はあるが人影は全くなかった。
すると千雨の存在に気づいたのか数十体のインベーダーがゾロゾロと集まってきた。
「感染…したのかよ！」
これでますますやりずらくなってしまった。せめて辺りに人間が無事か確認できたらやりやすいものの…。
インベーダー達が一斉に腹部を開き、中から重火器を取り出す。
それを見て慌てて千雨はポケットから疑似ゲートを取り出す。普段はすぐできる動作も心が乱れてる状態でやるとうまくいかない。
その隙をインベーダー達は見逃さず、重火器を発射する。
「クッ…」
『鉄壁』の疑似ゲートを自分の正面に張り、攻撃を防ぐ。その隙に数個の疑似ゲートを取り出し『赤熱』のゲートを設定して、インベーダーに投げつける。
空中で疑似ゲートは起動、灼熱の炎はたちまちインベーダーを焼き尽くす。
「グオオッアア！」
インベーダーの約半分は炎から逃げ切れず、そのまま倒れて消滅する。
「よし、あと半分…？」
新たな疑似ゲートを取り出そうとした時、不意に何かがおかしいことに気づく。
仲間がやられたのだからインベーダー側は、警戒や攻撃の一つはしてもいいはずだ。しかしインベーダー達は何事もなかったかのようにただ突っ立っている。
おかしい…。雪乃や影山、美羽からインベーダーが何もしないなど聞いたことがない。
（何かの罠か？いや…それにしたって…）
そして…インベーダーが何もしない理由が遂に分かった。
それは…千雨が戦っているインベーダー達の後ろに一体のインベー

ダーがいたからだ。

そいつは姿や形は一緒だが、他のインベーダーとは放つ気配や殺気がそこら辺のザコとは明らかに違った。そいつが放つ気配にインベーダー達は怯えていたのだ。そして…そいつは自分の体から触手を出し、人間である千雨ではなく、同じ仲間であるハズのインベーダーに向かって突き刺した。

「!?」

突然の行動に驚く千雨。

触手を刺されたインベーダーは僅か数秒で消滅。触手を残っているインベーダー達に突き刺す。

そして、ものの数分で残っていたインベーダー達は全滅。

触手を伸ばしたそいつだけが残った。その光景を見た千雨は頭の中で、ある仮説を立てていた。

（…人間を襲うのがインベーダーの役割）

数十体のインベーダー達を吸収したインベーダーはゴキゴキと姿を変えていく。

（でも…そのインベーダー達を…更に襲う存在。それが…）

背中から巨大なアームを取り出し、外見も人から野獣のような姿へと変わる。

（…それが、新種インベーダーの特徴…！）

変身を終えたインベーダーは千雨を睨んで、雄叫びをあげる。

「グオオオオ！！」

京都を舞台に第2ラウンドが始まる。

まず最初に手を出したのはインベーダー。

背中のアームを伸ばして、千雨を襲う。
（速えっ！）
千雨はバックステップをして、アームを回避。そしてそのドサクサに疑似ゲートをその場に置く。
そしてそのインベーダーの真横に走って、『疾風』のカマイタチをインベーダーに浴びせた。
「…？」
しかしインベーダーはまるで攻撃が効いていないかのように首をブルブルと振った。その証拠に攻撃をくらった箇所には傷一つなく、煙をあげてるだけだ。
「…効いてない！？」
叫び声に反応して、インベーダーはアームを伸ばして千雨をぶっ飛ばした。
いくら疑似とはいえ、攻撃系ゲートの中で『電光』や『爆熱』と並ぶ、最強クラスの『疾風』をくらって無傷とは…。
コンクリートの地面に着地した千雨は次の策を考えていた。
（他のインベーダーを吸収したから防御力が上がっているのか？元々能力が高い新種インベーダーの上位種…たちが悪い！ゲート単体じゃダメだ。複数のゲートで…一気に決めないと！）
疑似ゲートを複数使って威力の高い攻撃を繰り出すことを考える。
…しかしインベーダーの防御力は千雨の予想を遥かに超えていた、生半可な攻撃は効かないだろう。
しかもしくじれば相手も警戒して、同じ手は喰らわない可能性もある。
（使うのは…『疾風』はダメだな。手の内は読まれている。なら…）
インベーダーはアームから破壊光弾を作り出し、突っ立っている千雨に向かって放つ。
「…クソッ！」
考えてさせる暇すら与えないのか！心の中で毒づきながら千雨は『迫撃』を使って、地面を蹴って、空に向かって飛んだ。

そしてインベーダーが姿を消した千雨を探している隙に、千雨はインベーダーの周りに疑似ゲートをセット。手元にある携帯で位置や座標を確認する。

（全システム構築完了…全ての疑似ゲート、ＧＰＳと連動、アクセス開始）

そしてインベーダーは空中にいる千雨を発見。アームを開いて光弾を精製、身動きがとれない千雨目掛けて攻撃する。

「それを…待ってたぁ！ゲートオープン！」

千雨は左手を突き出し、『雷』のゲートを開く。

そこから電撃を放出し、光弾を相殺。そして…。

「グオオ…」

電撃を放出した際に強力な閃光が発生し、相手を目くらましにすることができた。

「いくぜ…ゲートオープン」

携帯のゲート発動キーを押す。インベーダーの四方に設置した疑似ゲートが輝きだし、巨大なゲートを作り出す。そしてインベーダーの体内から光が溢れだす。

「グ…グア…アグゥ…！」

千雨が使ったのは『爆熱』のゲート。しかし、ただ使うだけでは防御力の高いインベーダーには意味がない。いくら防御力が高くてもカバーしきれない部分…体内にゲートをセットしたのだ。

「ガアアア！」

そしてその爆弾が発動し、インベーダーはバラバラに吹き飛んだ。

「ハァ…ハァ…」

とりあえず、危機は去った…。あちこち傷だらけだが千雨は自分は生き残ったという実感をひしひしと感じていた。

一方、千草によってさらわれたこのかを追いかけたネギ達は京都駅で戦いを繰り広げていた。

だがその戦いも佳境に入っていた。
「このかを…返しなさい！」
バチーン！と千草の頭をハリセンで叩くアスナ。友人をさらった相手に容赦ない一撃を浴びせる。
そして月詠の攻撃を振り切った刹那は千草に追加攻撃を与えた。
「ひいい！」
千草は情けない悲鳴をあげながら抱えていたこのかを落とす。刹那はこのかを上手いことキャッチした。人質を取り返したネギ達は更に追い討ちをかけようと接近。
「…！二人とも後ろに下がってください！」
刹那がネギとアスナを呼び止めた。そして二人が慌てて後ろに下がると…上空から異形の怪物が現れた。
「…あの女の差し金ちゅうわけか」
千草は舌打ちをすると、その怪物の背中に乗り、怪物は素早く飛行して月詠も回収すると月明かりの中を飛んでいった。
「…逃げられた！」
刹那は苦虫をかみ殺したような顔でそう唸った。

千草達は近くのビルの屋上に向かった。そこには二十歳くらいの女性が笑いながら千草のことを待っていた。
「…何の真似や？」
「あら…せっかく助けたのに」
女性はニヤニヤ笑いながら千草と喋る。
「ウチらだけでやる言うたはずやで？余計な手出しは…出さないでくれへん？」
自分が言いたいことを言い終えた千草は屋上から階段を使って下に降り始めた。
その女性は千草を見送り、夜の街を見ながら、呟いた。

「へえ…エサを食べたあたしの子を倒せる人間がいるんだ…。久しぶりに楽しめそう…」

彼女はニタリと歪んだ笑みを浮かべていた。

こうして修学旅行1日目は終わりを迎えた。

第１１話　京都対戦（後書き）

次回は、いろいろてんこ盛りな話になりそうです。

第１２話　過去を知る者（前編）（前書き）

初めて前後編にしてみました。
どうぞ。

第１２話　過去を知る者（前編）

あの後、『生命』のゲートで戦闘中にできた傷を直してコンビニに買い物に行った。そしてホテルに帰った時には既に時刻は午後１０時半を過ぎていた。
部屋に戻ったら千雨は夏美や千鶴にめちゃくちゃ怒られたし心配もされた。
２人にどこで何してたと聞かれたが千雨は「羽目を外して街中まで行ってしまった」と言い張り、なんとかごまかした。
その後は就寝時間まで、京都限定のお菓子の話題で盛り上がり布団に入って寝た。
布団に入りながら千雨はぼんやりと考えていた。
（…やっぱりやるしかないよな。こいつらと話してて改めて実感した。…こいつらにはインベーダー事件には巻き込ませねえ。人類全ては無理かもしれないけれど…せめてこの学園の生徒だけでも…守る…）
そう決意した途端にドッと疲れが押し寄せてきた。千雨はそれに身を任せて、眠りについた。

時刻が深夜を回った頃、１人の女性が京都の街並みを歩いていた。
彼女はまるでオモチャを貰った子供のように、楽しそうに周りを見ている。
（わぁ、でっかい建物がいっぱい！こんな都会までは来たことはないからなぁ）
彼女は珍しそうに街にあるものをジロジロ見ていた。まあ、当たり前だろう。彼女が最後に人間の世界を見たのは何百年も前の話なのだから…。

「おっ、あれは…」
女性はある物を見つけて脚を止める。
「あれが犬少年が言っていたゲーセンってヤツか」
女性は新しく興味が沸く物を見つけて、ワクワクしていた。
さっそくそこに向かおうとしたところ…誰かに腕を引っ張られた。
「…どこに行くつもりだい？」
「どこって…あ」
振り向いた女性の先には白髪の少年が呆れたような顔をしながら彼女の腕を握っていた。
「自由時間はもうとっくに終わっているよ。これから作戦会議だってさっき依頼人に言われたばかりじゃないか」
「いいじゃん別に！ゲーセン行こーよ、ゲーセン！」
聞き分けのない彼女に頭を痛くしながら説得を開始する。
「…ゲーセンはお金がないと遊べないよ？君一文無しだろう？」
「う…」
自分より年下の少年に言われてムカッとしたがなんとか落ち着かせる。
「だってあのメガネババアは私が助けたのに「手を出すな」なんて言ったのよ！作戦指揮も実力も三流の癖に！…まあ西洋魔法使いに対しての恨みだけなら二流かな？」
「僕も気にくわないけど…前金だけでかなり高額の依頼だからね。少しくらいは我慢しなくちゃ」
街中を歩きながら2人はお互い言いたいことを話しながら集合地点に向かっていた。
「…にしても、君は変わっているね。君を山奥で見つけてから数ヶ月…君はあの黒い奴らと同じ存在だとはとても思えないな。ただ人を襲うだけしか考えていない奴らとね」
「あたしはそんじょそこらのインベーダーとは違うよ。なんたってオリジナルインベーダーだからね。強さは別格だし、ちゃんとした意志があるわ」

「それが変わっているのさ。本来、君達は人間を滅ぼすために生まれた存在だ。なのに君は人間達の文化や生活を楽しんだり、僕らと協力しあっている。普通なら見下したり、バカにするはずなのにね」
「まあ、人間が生きているからあたしら増えている訳だからね。そこんとこは感謝しなくちゃ。親父みたいに見下してばかりいたらいつか足元すくわれるのがオチよ」
「…親父？」
少年は首を傾げた。インベーダーに繁殖能力はあるのか？
「んー、なんかあたしらはそんな関係で生まれたのよ。まあ、あんまり尊敬できるもんじゃないけどね。人間をナメるばかりに2回も殺されているんだから。学ばないのよ、あいつ」
「人間…ゲートを持つ者かい？」
女性はうんと頷く。
「しかもどちらの戦いも決め手はあの『疾風』の親子よ。まあ親のほうは死神紳士が殺したけど…。30年前も2年前もそうよ。見下すから、隙ができる。相手のことを対等に見ないとね」
「…君の親の名は？」
少年は探るように聞く。
「あんたの名前を教えてくれたら言ってもいいよ。そういえば聞いていなかったよね」
「…フェイト。フェイト・アーウェルンクスだ」
「あたしの親父の名は…悪魔伯爵。そして、あたしはその娘…悪魔令嬢よ」

「…長谷川です。昨日報告できなかったので…はい」
早朝5時。千雨は一人、露天風呂の脱衣場で影山と電話していた。
この時刻に起きている生徒はめったにいない。また、露天風呂は早

朝は開いていないので、誰かに盗み聞きされる危険性も少ない。電話にはもってこいの場所だろう。
「報告があってね。君が倒した新種インベーダー。あれのコアを調べてみたんだが…通常のコアの数十倍のエネルギー濃度があった」
「あ、それについてなんですけど…」
千雨は昨日のことを全て話した。インベーダーが同じ仲間を殺し、吸収したこと。そのインベーダーが異様に強化されていたこと。
「…新種か。おそらくは君が昨夜倒した奴も同じだろうな。…化け物を喰らう化け物か。厄介だな」
「ですね。『疾風』を使っても傷一つなかったですから。『爆熱』の疑似ゲート４つを体内にセットしてやっと倒せたんですよ」
影山は千雨の報告を聞いてしばらく黙る。
「…となると。装備の強化が必要だな。京都には…あいつがいたか。長谷川君、今日か明日、奈良公園にある『盾神喫茶』という店に行けないか？前に君に渡したパスカードを見せれば通してくれる。疑似ゲートを忘れずに持っていってくれよ」
「うーん、今日は無理ですね。うちの班は金閣寺行く予定なんですよ、だから明日の自由時間の時になんとか…」
「…そうか。じゃあまた」
ピッと通話が切れる。まあ、班行動だししょうがない…と諦めていたが数時間後、事態は思わぬ方向へと向かうことになる。

「ネギ先生！よ、よろしければ今日の自由行動…一緒に回りませんかー！？」
「「「「えっ！？」」」」
しばしの沈黙の後…。
「わかりました宮崎さん！今日は僕、宮崎さんの５班と回ることにします！」

自由行動の2日目、ネギ先生争奪戦を制したのは…なんといつもはオドオドしている宮崎のどか率いる5班だった。
そして我らがショタコン委員長は…涙を滝のように流しながら膝を床につけ、地面に拳を叩きつけていた。そして数分後何を思ったのか…。
「…きますわ」
「え？」
あやかがぼそりと何か言ったのを夏美は聞き逃さなかった。
「私達も…奈良公園に行きますわ！」
「えー！金閣寺行くんじゃないの！？」
「関係ありませんわー！」
どうやらあやかの何かに炎がついてしまったようだ。しかし千雨にとっては都合のいい展開になり始めていく。
そして色々もめたがまあ、そこはノリと勢いに定評がある3－Aだ。あっさりで金閣寺から奈良公園行きのスケジュールに切り替わってしまったのだ。
千雨はこの世に神なんていないと思っているが、この出来事はこの世に神と言うものが確かに存在すると確信してしまう瞬間であった。

「来ましたわ奈良公園！
この雪広あやか、今行きますわネギ先生ー！！」
着いた途端にショタバカ委員長は勝手にどこかへ飛んで行ってしまった。
「…とりあえずどこで待ち合わせする？」
朝倉の乾いたつぶやきが流れた。
そして待ち合わせ場所が決まった後、一同は解散した。

千雨は早速、「盾神喫茶」

を探し始めた。辺りの人に聞いてみたところ、地元でも有名な店らしいのですぐに見つかった。

「ここがね…」

見た目は、どこにでもある店だ。中にはお土産がずっしりあり、外には飲食できるスペースがある。

（まあ、中に入ってみるか…）

意を決して千雨は中に入った。中には自分と同じ修学旅行生でごった返している。

「いらっしゃいでやんす！只今修学旅行セール実施中でやんすよ！生徒手帳を見せれば最大二割引きでやんす！」

まるで某野球ゲームのメガネ君みたいに「やんす」をつけて話す店員。歳は四十後半くらいだろうか？メガネをかけており、少し痩せている。…よし。

「あのー、生徒手帳でいいんですよね」

「おっ。どれどれ…」

店員は生徒手帳を覗きこんで、一瞬だが顔色を変えた。なぜなら…千雨は生徒手帳の間にイージスのパスカードを見えるように挟んでおいたのだ。これなら周りに気づかれずにさりげなく正体をばらせることができる。

「…八つ橋の試食は奥でやんすよ！ついてくるでやんす！」

店員は千雨の意図が分かったのか、店員の立場を上手く利用し、店の奥に案内する。わずか数秒の出来事だったが…店内は何も変わった様子はなかった。

「こっちでやんすよ」

店の奥に通された千雨は店員と一緒に歩いていた。そして、突き当たりにある棚の本を動かすと。

ゴゴー！

棚が横に動き、隠し部屋が現れる。二人は中に入り、あるスイッチ

を押すとその棚は元の位置へと戻っていった。その部屋にはパソコン、機械の配線やなんやらが置いてあるところだった。
「…ふう、ここでなら何を話してもいいでやんす。あっ、オイラの名前は目黒兼武。メガネって呼んでくれでやんす」
「あっ、どうも。メガネさん。私は長谷川千雨です。あの…」
「何でやんすか？」
「あなたはもしかして…旧イージスにいた…」
「ストップ」
メガネが千雨の発言を止める。
「それをどこで知ったんでやんす？今じゃ関係者以外知る人なんていないと思っていたでやんすよ…」
「…北条雪乃からです。友達なんですよ、あいつと。彼女は旧イージスの面子を昔の友達って言って、詳しく紹介してくれましたよ。ただなんか悲しそうにしていましたけど…」
懐かしい名前が千雨の口から語られ、メガネの頬が緩む。
「…懐かしいでやんす。オイラは高校生の時に会ったきりでやんすよ。オイラが大人になってから急に姿を現さなくなってしまったんでやんす。あれから約３０年…月日は早いもんでやんすね」
メガネは悲しそうに顔を伏せた。そんな中、千雨は雪乃がどうしてメガネの前に姿を現さなくなったか、なんとなく分かっていた。
あらゆるものを凍らせる『氷結』のゲートの持ち主である北条雪乃はあまりにも強すぎる力が故に自分の『時間』そのものを凍らせてしまったのだ。
現に彼女は平安時代に生まれた人間だが老いもしない体になってしまい、現代になっても姿は昔と変わらぬまま。
雪乃がメガネに会わない理由はおそらく自分の時が止まっている中、周りの友人が成長していくのを見るのが辛いからなのだろう。
「…メガネさん。かつてあなたは旧イージスのチーフメカニック担当の技術者でしたよね？なら…１９７０年、あのクーデターの後に何があったか分かるんじゃありませんか？北条もその話になるとは

ぐらかすばかりで…。あなたが何で京都にいるのか。そのクーデターの主犯で人間を憎んでいた影山さんが何故イージスにいるのか…。教えてください！」

千雨は頭を深々と下げた。

しかし…。

「ダメでやんす」

悩むことなくバッサリ切り捨てるメガネ。

「…どうしてですか！？」

千雨の叫び声は部屋中に響き渡った。それをメガネは冷ややかな目で見ていた…。

第１２話　過去を知る者（前編）（後書き）

悪魔令嬢のイメージは仮面ライダーオーズ／ＯＯＯの敵キャラ、カザリから。

彼らは現代に復活し、他の敵キャラは人間とあまり接点を持たないのですがカザリは更なる力を求めて人間と接触をはかり、現代社会に馴染んでいきます。

そんなキャラがインベーダー側にいてもいいのでは…？と思って作りました。

さて、次回は後編。何故メガネは全てを話さないのか？それは次回をお楽しみに！

第１３話　過去を知る者（後編）（前書き）

後編です。どーぞ！

第１３話　過去を知る者（後編）

「何故…でやんすか」
メガネは考えこむように顎に手を乗せる。
「…この話はまだ早いからでやんすよ。話を聞いたって、今の千雨ちゃんにできることは何もないでやんすから。ただショックを受けるだけ…それでも聞くでやんすか？」
「…いえ」
千雨は悔しいが引くことにした。自分には資格がない…それを痛感したからだ。
「…まあ、一つだけ言うと…影山はある人物に頼まれたからイージスを継いだんでやんす。そのある人物とは…今、千雨ちゃんが使っている木刀の本当の持ち主でやんすよ」
「ー！」
メガネははぐらかして言ったつもりらしいが、千雨ははっきりその人物が誰だか分かってしまった。
「…まあ、この辺で。装備強化をするでやんすよ、疑似ゲートは用意してきたでやんすか？」
「は、はい」
千雨は背負ってたリュックから１０個ほどの疑似ゲートを取り出し、パソコンデスクにそれを置いた。
「とりあえず、疑似ゲートのバージョンアップや新装備の調整に時間がかかるんでやんす。まあ…１時間くらいでやんすかねえ？それまで好きな所回っていいでやんすよ」
「…はい」
千雨は落ち込みながら部屋を出ていった。

公園内のベンチに座った千雨は一人落ち込んでいた。
（…やっぱり私ってまだまだダメなのか？…覚悟があるだけじゃダメってことかなのかな）
千雨は自分が思い上がっていたことに少し反省し、考えるのをやめた。
これ以上考えた所で何か分かる訳でもない。また期間を開けて美羽などに聞けばいいや、と明るい思考へと無理矢理持って行く。
と、ここで…。
「ちょっといいですかい？姐さん」
茂みの中から白くて細長いナマモノ…オコジョ妖精のカモミール、通称カモが飛び出してこちらにやって来た。
「誰だ、お前？…喋るオコジョか。超なんかに渡したら高く売れそうだな」
「ひ、ひでぇ！」
千雨は恐ろしいことをサラッと言ったのでカモは慌てだす。と、ここで千雨は何かに気づく。
「…お前、あれか？先生が前に言っていたカモ君って」
「おお！知っているんすね！いやー、オレっちも有名になったもんだ」
前に相談を受けた時にネギから「オコジョ妖精がいる」と聞いていた。
何故オコジョ？と思ったが、親友の雪乃もオコジョのヒサメを飼っているから意外とポピュラーな動物なのかもしれない。
「いやー、姐さんの実力に見込んで、折り入って相談がありやしてね…」
そしてカモは昨日、京都駅で起きたことを全て話した。
そしてネギが特使になったことや関東、関西が仲が悪いことなど…カモが知っていることを全部話した。
「ふーん、同じ種族同士で何やっているんだが。こちとら人間守っ

ているのに人間同士で戦っているなんてのん気だな」
千雨は関東関西の仲の悪さに呆れている間にカモは会話を続ける。
「…それでだ。正直兄貴達だけじゃキツい。だからだ、ここは長谷川の姐さんが助っ人に入ってくれやせんか？」
「無理だな」
「へへへ、そりゃ…えっ！？」
まさか断られるとは思っていなかったカモは千雨の返答に驚く。
「な、なんでっスか！？姐さんほどの実力者なら…」
「実力うんぬんの話じゃない。ちゃんとした理由はもちろんある。まずはお前らに付きっきりになると万が一インベーダーが出た時に対処できないから。…一般生徒にインベーダー倒せると思うか？」
「う…」
「更に私が助っ人に入って先生や桜咲が納得するかな。あいつら学園長直々に頼まれたんだろう？私が出ていって事件を解決しても、あいつらはいい気しないだろうな。あいつら結構プライド高いから」
確かに昨夜の作戦会議でもアスナやカモが賛成派でネギや刹那は否定派だった。理由は「生徒を巻き込みたくない」「長谷川さんには長谷川さんの仕事があるから」とそれぞれ違ったが、カモはそうは思わない。
使える人はとことん使う。なぜなら人の命がかかっているのだから、プライドや誇りなど構っている暇などないからだ。
ここでカモは少々強引な手段に持っていくことにした。
「なるほど…つまりは、でしゃばらない関係になればＯＫって訳か。姐さん、ここは仮契約を兄貴としてしまいましょうぜ！」
「…なんだそりゃ？」
カモの説明によれば、この仮契約とは魔法使いと契約を交わして、その魔法使いのパートナーになる行為のことらしい。仮契約を交わし、従者となった人物には、主となった魔法使いから魔力を供給されてパワーアップできる。更にアーティファクトと呼ばれるその従者にふさわしいアイテムが与えられるという話だ。他にも色々機能

があるらしいが、カモは長くなるからと話を打ち切る。
つまりは「僕と契約をして魔法少女になってよ！」ということらしい、多分。
「兄貴のパートナーとなれば、合法的に兄貴と行動できる。更に姐さんにもアーティファクトが与えられ、お互い良いこと尽くし！さあ、ここは…」
しかしカモが最後まで言い終わる前に千雨はカモの尻尾をつまみ上げ、自分の目の高さまで上げた。
「そういう問題じゃねえんだよ。仮契約がどうだじゃない、私は関われないんだ。インベーダー倒せるのは私だけなんだからな」
「じゃ、じゃあ俺達もインベーダー退治を…」
「邪魔だ！お前らがいるくらいなら私一人でやった方が早い！」
そう吐き捨てると千雨はカモを草むらに投げ捨てた。カモは二転三転と転がりながらどこか遠くに逃げていった。しかしその顔色は諦めた顔ではなく、何かを企む顔であった。
（ちっ。現時点でパートナー候補に一番近いのは長谷川の姐さんだったのに、あれだけガードが堅いと無理か…。そうなると近衛の姐さんと宮崎の姐さんが候補だな…グヘヘ）
カモがここまで仮契約に執着する理由。もちろんネギの為でもあるが、本命の理由がある。それはオコジョ妖精は仮契約をすれば報酬金が貰えるのだ。これ狙いでのどかとこのかを一度ずつはめたことがある（どちらも失敗したが）。
心のガードが緩くなりがちな修学旅行を利用して、一気に仮契約をして一儲けしようとカモは考えていたのだ。
（それには協力者が必要なんだよな、せめて一人。…まあ、先は長いんだゆっくりと考えるか）

「…ここにいたのか」

ここはとあるホテルのロビー。先ほど、明日実行する作戦の会議を終えたフェイトは携帯をいじくっている悪魔令嬢を目撃した。
「あっ、おかえりフェイト。ねえ、この携帯電話ってスゴいんだね！こんなちっちゃいのに沢山機能がついてるんだね！」
またか。フェイトは頭を抱えた。まるで赤ん坊のように何でも興味を示すのだ悪魔令嬢は。昨日泊まった時も部屋にあるあらゆるものを聞いてきたし。
「目立つことは何もしなかっただろうね？」
「大丈夫だよ。ずっと携帯いじってただけ。…しかしなぁ」
「どうしたんだい？」
フェイトは珍しく戸惑っている悪魔令嬢を見て、首を傾げる。
「ううん。ただ…あたし達インベーダーがいなくても人間達は勝手に滅ぶんじゃないかなーて」
「…へえ」
珍しいことを言うもんだ。人間を見下さなかった彼女が初めて人間をバカにすることを発言するなんて。
「あたしさ、携帯のニュースを見ていたんだ。出てくるのは誰かを殺しただの、内乱だのそんなのばっかり。便利な道具は進化しても肝心の心が退化しているんじゃ意味がないよね」
「まあね。魔法世界だってそこは変わらないよ。いや…魔法が使える分、こっちよりもたちが悪いね。今も内乱やらなんやらで孤児や奴隷が増えるばかりさ」
フェイトはそう言うと自分をとても慕っている、5人の少女を思い出す。彼女達もまた、戦乱が原因で家族や居場所をなくしていた。
「へえ、昔と随分違うんだね。あたしがまだ人間だった頃は戦乱なんてなかったよ」
「人間…君は元人間なのかい！？」
フェイトは素直に驚いていた。悪魔令嬢はニヤリと笑った。
「そうだよ。サンジェルマンって知ってる？」
「サンジェルマン…確か魔法世界出身の犯罪者。千年ほど前、怪し

げな思想を広めようとして、魔法世界を追放された人物だっけ?教科書にも載っている人物だね。君の父親のことだと思うけど」
「ピンポーン、大正解!まあ、あたしはそんな思想なんて興味なかったんだけど、親父と一緒に追放されてね。そん時に見つけたオリジナルコアに適合して二人ともオリジナルインベーダーに。親父はスッゴい喜んでいたけど、あたしはどうでもよかったからなぁ。むしろ死ねなくなったからスッゴい不便」
「ふうん…」
「あたしはその間、暇だから魔法を習ったりして時間潰したの。その時親父は魔法世界に侵攻するとか言い始めたんだよ。その前座に旧世界に侵攻したんだけど、『疾風』のゲートキーパーに殺されてね」
だんだんと彼女の過去が明らかになってきた。
「親父が2回も死んだ時に魔法を持たない人間達に興味持ってね。それであんたに出会ったって訳」
なるほど、それが彼女の過去という訳か…。暗い過去を持っていた彼女をフェイトは驚愕していると…。
「んー、お腹すいてきたね!ご飯食べにいこ!あたしはラーメンってやつが食べたいな」
「はいはい…」
どうやら心配はいらないらしい。

場所は戻って奈良公園の盾神喫茶。
「おお、待ってたでやんす。新装備でやんすよ」
やって来た千雨にメガネが嬉しそうに言う。
「まずは新型疑似ゲート。従来品よりも発動時間、威力共に強化されたでやんす。更に新たなゲートである、あらゆる物を凍らせる『氷結』と全てを砕く『粉砕』を追加したでやんすよ。とりあえずオ

イラのと千雨ちゃんの合わせて、全部で２０個でやんす」
「そんなに!?」
「まだ若いのに遠慮してはダメでやんすよ。貰えるものは貰っておかないと。千雨ちゃんがオリジナルゲートを持っているからのサービスでやんすよ。全部で３つもあるのに、いちいち驚いては困るでやんす…」
３つ!?
「さて、次はオイラからのプレゼントでやんすよ」
そう言って持ってきたのは全長５０ｃｍほどの銃だった。
「ゲートガン…とでも言うべきでやんすかねぇ。疑似ゲートと接続することで各ゲートの特性を持つ弾丸を発射することが可能でやんす。銃を媒体にしているので、同じ疑似ゲートで弾丸を複数作っても壊れないようにしたからゲートの節約にいいでやんす。あらかじめ数個接続もできるので戦闘で一回一回接続し直さなくても大丈夫でやんすよ。更に威力調節も可能でやんす」
銃か。確かに減りやすい疑似ゲートを節約できるし、かさばるゲートを一つに持ち運べるのは魅力的だ。しかし千雨は自分には武器の木刀があるからあまり使い道はないかもな、と思いつつ受け取る。
「さて、最後は美羽ちゃんからのプレゼントでやんす」
…ん?美羽さんから?
「なんか千雨ちゃんがバイクを欲しがっていると聞いたんでやんすから…」
（まさか…あの人、何考えているんだ!?）
それには布を被せているのでメガネがバサッと布を取ると、そこにあったものは…。
「ＵＰ－９３でやんす。ゲートエンジンは積んでいるでやんすが、スピードを重視したＵＰ－５５とは対象的にこちらはパワー重視のバイクでやんすね」
黒で塗装されたバイクが置いてあった。しかもサイドカー付きの。
「はい、マニュアルと偽造免許証。…ああ、警察の心配はしなくて

もOKでやんすよ。影山は警察上層部にパイプを持っているからいくらでもごまかせるでやんす。インベーダー絡みの事件が隠蔽されるのも、それのおかげでやんすよ？」

（犯罪の片棒を担いでいる気分になった…）

できればバイクだけは使いたくはないなと思いつつ、偽造免許証を財布にしまう。

「ＵＰ－９３は何が違うかというと…なんとバイクモードからゲートエンジンモードに変形するのでやんす！ＵＰ－５５はスピードを重視するあまり、ゲートエンジン本来の役割であるはずの「ゲートエネルギーを増幅して外部への放出」ができないのでやんすよ。しかしＵＰ－９３はスピードを市販バイク並みに下げることでそれを実現したのでやんす！」

つまりは、ゲートエンジンモードを使用すればゲートの威力を数十倍に引き上げて攻撃することが可能らしい。

「ただし！ゲートエンジンモードは使用回数に制限がかかっているでやんす。今はまだ試作型なので…２回がギリギリでやんすねぇ」

「…それでも十分だと思いますけど」

メガネの解説はまだまだ続く。

「いいや、欠点もあるのでやんす。ゲートエンジンモードでは従来のゲートエンジン共通の弱点である移動ができない点は解消されていないのでやんす…」

元々ゲートエンジンはいわゆる固定砲台みたいな役割なのだ。それ故に急に設置できない、すばやい敵には対処しにくいという旧イージスが頭を悩ませていた問題点があるのだ。

「まあ、ＵＰ－９３は千雨ちゃんが泊まっているホテルに置いておくでやんす。一度だけでもいいからマニュアルはきちんと読んでおいてくれでやんす」

「はい。あの…本当にありがとうございました」

千雨は最後にきちんと挨拶をして、店から出ていった。

大勢の修学旅行生が帰り、辺りが静かになった盾神喫茶。
ようやくメガネは一休みをするために椅子に座ることができた。
「うーん…オイラも歳でやんすね。毎年このシーズンになるといつも体がついていかないでやんす」
バキバキと体を鳴らすメガネ。すると一人の従業員がお茶を入れて持ってきてくれた。
「どうぞ、店長」
「おっ、済まないでやんす」
そして辺りにお茶を啜る音が響き渡る。
「…いい子じゃないですか、あの子。うちの娘も千雨ちゃんみたいに礼儀正しければなあ」
「そうでやんすね」
「…店長。何故あの時全てを教えなかったのですか？」
途端にメガネは悲しそうな顔をする。
「…あんな思いするのオイラ達だけで充分でやんすよ。あの子には知らせるべきじゃない。あの時だって「店長！」」
バン！と従業員は机を叩く。
「…あなたのおかげで私達は生きているんです！そんなこと言わないで下さい！あの日…イージスが滅んだ日、あなたは生き残った隊員を集めて遠い親戚がいる京都に匿ってくれた！あなたがこの店を開いて俺達を働かせてくれたから、俺達は飯に困ることはなかった！あなたがいなきゃ俺は家族を得ることもなかった！だから…！」
「…すまなかったでやんす」
メガネは泣きそうなのをこらえていた。その従業員も泣きそうだった。
そして泣いた。屋根が割れるのではないかというくらい泣いた。
その男二人の泣き声は京都の夕闇に溶けて消えていった。

第１３話　過去を知る者（後編）（後書き）

ＵＰ－９３のイメージは仮面ライダー５５５のバイク『サイドバッシャー』。あんな感じで。

さて、千雨の装備が何やら凄いことになってしまいました。どうしよう…。

さて、次回は朝倉の所です。あそこ、動かす人数多いんですよね。うまく書けるかな？お楽しみに！

用語説明（前書き）

６万ＰＶ突破！
ということで今回は『ネギまは知っているけどゲートキーパーの設定は知らない！』
『あれって、どういうこと？』
といった用語説明会にします。

用語説明

ゲートキーパー
異空間からエネルギーを引き出し、それを操ることができる存在。
ぶっちゃけ言えば超能力者のこと。
使用者ごとにゲートの種類は違っており（ただし、例外もあるが）
漢字２文字を当てて「〇〇」のゲートと呼ばれる。ゲート発動時には、２重の光のリングが出現する。
ゲートキーパーがどれくらい強いかというと、真帆良の魔法先生の平均実力を３００とするとゲートキーパーの実力は４００くらい。
『ネギま!』を知っていて『ゲートキーパーズ』を知らない人は、これでゲートを持つゲートキーパーがどれだけ強力な存在かが分かったと思います。

疑似ゲート
正式名称はイミテーションゲート。電子回路とエネルギー転送装置によって人口的に作り出したゲート。携帯電話の形をしており、ゲート能力を持っていない普通の人間にも使用できる。
更に複数同時に使うことでその効力を強化することも可能。一回使ったら壊れてしまう使い捨てタイプ。

インベーダー
人類共通の敵であり、侵略者。
その正体は人間の負の感情から生み出される疑似生命体で、人間の負の感情の化身と呼べる存在。人間に感染して増殖する。

ザコクラスでもバリアを張ることができ、並大抵の攻撃を防いでしまう。倒すにはゲートを使うか、『雷の斧』や『雷の暴風』のような中の上クラスの呪文を使わなければならない。
幹部クラスのインベーダーの事を「オリジナルインベーダー」といい、明確な意志を持っている。その強さもザコとは別格。

ＩＰＷ
通称『怪電波』。インベーダーが発する特殊な電波のこと。基本的に強大なＩＰＷほど、そのインベーダーが強いということになる。

イージス
人類がインベーダーに対抗するために発足した組織。元は国際組織であったが今は民間組織と化している。

ゲートエンジン
ゲートを使う際に発生するエネルギーを物理的な力で変換、増幅させることができるツール。
これを使ってゲートを使用すると、通常より数十倍の効果を叩き出すことが可能に。
ちなみに旧イージスが使っていた初代ゲートエンジンは１０トントラック並みの大きさで移動や設置に時間がかかる、使用中は回避運動ができないといった欠点があった。

ゲートの種類（第１３話まで使ったゲートのみ紹介）

疾風　風を操るゲート。攻撃型ゲートの中では最強クラス。

生命　治癒能力を持つゲート。

迫撃　身体能力を強化するゲート。

鉄壁　並大抵のことでは壊れない盾を張ることができるゲート。

赤熱　灼熱の炎を操ることができるゲート。

寸断　大小様々な刃物を出現させることができるゲート。ブーメランや大剣、ナイフに巨大な斬艦刀をも作り出すことも可能。

風雷　風と雷を操ることができるゲート。一つで二つの能力を持つという希少なゲート。

爆熱　強力な爆発を引き起こすことができるゲート。

用語説明（後書き）

またこんなコーナーを作るかも…。
それじゃ！

第１４話　疑う者と動く者（前書き）

ほぼ原作通り。
ひねりがないです…。

第１４話　疑う者と動く者

ホテルに戻った千雨はなにやら大騒ぎしているいいんちょの姿を目撃した。
その理由を盗み聞きすると驚きの理由が明らかに。
なんとあの宮崎のどかがネギに告白したのだ。
前からのどかがネギに好意を抱いていたのは誰の目から見ても明らかだったが、まさか告白するとは。いつもビクビクしている普段の様子からは想像もできない行動だ。なるほど、だからネギ先生は顔が真っ赤にアホみたいな顔していたのか。
（…ま、人間は告白のことになると吹っ切れるらしいしな。暑苦しい格闘家しかり、勇者王しかり、ゲームキングしかり…）
ま、自分には関係ないか。
千雨は部屋中に響くいいんちょの高い声から逃れるため、旅行カバンからＭＤプレイヤーを取り出し、ヘッドフォンを耳につけた。そして大音量で音楽を聞きながら、部屋を抜け出した。

「あー、うるさかった」
部屋を抜け出した後、千雨はロビーのイスに座って、そう呟いた。
プレイヤーの停止ボタンを押し、ヘッドホンを首に下げた。すると…。
「長谷川さん、少しよろしいですか」
意外なお客、刹那がやって来た。
「ん？どうしたんだ桜咲？」
「…カモさんが長谷川さんに迷惑をおかけしてしまったらしく、誠に申し訳ございません」
「…はい？」

なんと刹那はいきなり千雨に向かって頭を下げたのだ。
「私や先生はいいと言ったのに、勝手にカモさんが話を進めてしまったらしく…。挙げ句の果てには仮契約など…」
…仮契約ね。
「あー、桜咲。とりあえず頭を上げてくれ。なあ、何があった？詳しく説明してくれ」
「…はい」
刹那は真剣な顔になった。
「昨夜の話になります。私達は、このちゃん…いやお嬢様を守るためのチームを作ったんです。ですが、そのメンバーにカモさんが長谷川さんも入れろと言ってきたのです」
「ああ、それはカモに聞いたぞ。…当然、蹴ったけどな」
「…そして仮契約。あれは本来、むやみやたらにやるものじゃないんです。お互いの同意の元でやらないと」
「…なんでだ？」
千雨は疑問に思った。仮契約はあくまでも仮だから大丈夫なのでは…？
「それが問題が大ありなんです。仮契約というのは魔法使いのパートナーになる行為のことです。当然、魔法という秘密にされている物に関わることになります。魔法に関わるということは全てが危険という訳ではありませんが、戦闘に関しては危険すぎます。なんせ、魔法学校で教えられる初歩的な攻撃呪文でも充分に殺傷能力がありますからね。…もし、そんな中に何も知らない一般人が仮契約をしてしまったら？戦いに巻き込まれたら？」
「…死ぬな、間違いなく」
千雨はようやく刹那が言いたいことが分かった。仮だからとかそういう問題じゃないのだ。
「ええ。だから千雨さんにはこちら側に来てほしくないんです。あなたはやらなければならないことがあるはずです。だから私達はあなたの足枷になりたくはないんです」

刹那は悲痛な顔をしていた。
「…なんでやらなければならないことなんて分かるんだ?私、桜咲に話したっけ?」
「勘、ですよ。女の勘」
そしてしばらくしたのち…ネギが泣きながら千雨と刹那の元にやってきた。
「朝倉さんに僕の正体がバレちゃいました～!!」
…一瞬の静寂の後。
「「はあ!?」」
この日一番の大声がホテルに響き渡った。

「えー!ま、魔法がバレた!?しかも、あああの朝倉に!?」
一旦、メンバー全員を集め、緊急会議を開く。アスナはとんでもない事態に驚愕した。
ネギの正体がバレたのだ。しかもバレた相手がよりによって早乙女ハルナと並ぶ、最要注意人物である朝倉和美にだ。
朝倉和美、通称「真帆良のパパラッチ」。彼女に秘密を知られたら最後、どのような情報網を使っているのか知らないが、僅か数時間で真帆良学園中にその秘密をバラすことができる人物。
そのことから彼女を恐れる人物や嫌う人物も多い。千雨も後者であり、変人揃いの3-Aでも関わりたくない人物ランキング、ベスト3に入っている人物である。
「あー、もうダメよ。朝倉にバレるってことは世界にバレるってことなのよ。あんた、もう先生なんかできないわよ」
「え、世界!?」
「マジでやりかねえぞ、あいつなら」
千雨は冷や汗を流しながら唸る。と、ここで刹那が提案をする。
「それなら早く、記憶の抹消をしたほうが…」

「で、でも記憶抹消は難しくて…」
「そうらしいのよ。しかも前に、私の記憶を消そうとして、私のパンツを消したくらい難しいんだもんね！」
「…神楽坂、訴えたら多分勝てるぞ」
アスナは歯を食いしばりながら、鬼の形相でネギを睨みつけた。ネギはますます怖がって、大粒の涙を流していた。
とここで、ロビーに通じている階段から噂の朝倉和美が下りてきた。しかも肩にカモを乗っけて。
「朝倉さん！？」
「ちょっと朝倉！ネギをいじめんじゃないわよ！」
「イジメ？何言っているのよ」
「そうそう、ブンヤの姉さんは味方なんだぜ」
聞けば、朝倉はネギの秘密を守るエージェントとして協力してくれるらしい。
その証拠に朝倉が取った写真を返してくれるとのこと。ネギは喜んでその証拠写真を受け取ろうとしてー。
「ストップだ、先生」
千雨がネギの腕を掴んで、止めさせた。
「朝倉、お前のデジカメに入っているデータを渡してくれ。それか目の前で消すか」
突然の発言に驚く一同。朝倉は千雨の行動に焦っていた。
「ちょ、ちょっと千雨ちゃん！私の言ってること信用できない！？」
「ああ、できない。これはバレたらマジでヤバいんだ。だから情報漏れは防がなきゃならない。報道部の一員ならバックアップデータくらいは取っているだろ？もし消したのならばその証拠を見せてくれ」
朝倉は渋々デジカメを千雨に渡す。そして千雨はデジカメのデータと証拠写真を一つ一つ比べる。
「…消したんだな。素直なことで」
「…信じてよね、私は人を傷つける記事なんて書かないよ」

「どうだかな」
真剣な表情をして答える朝倉。もっとも、千雨は朝倉の普段の行動を見ているだけあって信じられないが。千雨は証拠写真をクシャクシャに丸め、ポケットに入れた。
「さてと…お前ら…何考えてやがる？」
千雨はドスの効いた声で、２人を脅す。
「い、いや別に何も…。オレっちは朝倉の姐さんを精一杯説得しただけっスよ」
「そ、そうだよ。疑りぶかいなあ、千雨ちゃん」
…見え見えの嘘つきやがって。
「まあいいや、私の思い違いみたいだったし。ただよ…朝倉、一つ忠告しておくよ。魔法に中途半端に関わっていると…火傷じゃすまされねえぞ？」
その時、夕食の時間になったので他の生徒がゾロゾロとロビーにやってきた。
その流れで会議はお開きになった。

「…長谷川さん、もっとやる気を出してくれませんこと！？」
（やる気があるのはあんただけだよ、ショタバカ委員長！しかもあの糞パパラッチ！カモとこのこと企んでいたのか！？）
時刻は２３時。主催、朝倉和美による一大イベントが始まったのだ。
『修学旅行特別企画！くちびる争奪！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦！！』
朝倉はトイレの個室に　ノートパソコンと機材を持ち込み、実況していた。パソコンの画面には監視カメラが映している映像が出ている。
「カモっち、作戦は上手くいった？」
「バッチリ。アスナと刹那の姐さんには、無味無臭の睡眠薬入りハ

ーブティーを飲んで今頃夢の中ッスよ」
「いやー、こんなお楽しみイベント潰されちゃたまんないからね！」
朝倉とカモはグヘヘと笑っていた。実は今、このホテル全てを包み込む形で仮契約用魔法陣が展開している。仮契約の条件は魔法使いとパートナーとのキスで成立する。そしてこのイベント。
…そう、このイベントはネギのパートナー増やしという真の目的があったのだ。仮契約が成立すればカモには報酬が、朝倉は観戦している生徒とトトカルチョをしているため、賭け金としての食券が飛びかう。
お互いいいこと尽くしであるため、笑いが止まらなかった。
「さて、メンバー紹介は…」
1班…鳴滝風香、鳴滝史伽
2班…古菲、長瀬楓
3班…雪広あやか、長谷川千雨
4班…明石裕奈、佐々木まき絵
5班…綾瀬夕映、宮崎のどか
「それじゃあ、ゲームスタート！」
今、疑惑のイベントが始まった。

第１４話　疑う者と動く者（後書き）

さて、キスイベントスタート。
仮契約は何人だすか…。
多分、朝倉の辺りはアンチ的な内容になってしまうかも。

第１５話　接吻大戦（前書き）

今日、文化祭の準備がありました。そこでふと思ったことが。
真帆良祭ってすげえ規模なんだなって。

第１５話　接吻大戦

誰もいない廊下を意気揚々と歩くあやかとは対称的にダラダラと歩く千雨。
（…どうしてこうなった）
ことのいきさつはこうだ。就寝時刻が近くなり、ＵＰ－９３のマニュアルを読むのを止めた千雨は寝る準備をしようとしたのだが、どこかから帰ってきたあやかがかなり危ない目をしながら、千雨の手を握ってこう叫んだ。
「ネギ先生の唇のために協力してくれませんか！？」
「…とうとう頭おかしくなったか？」
「申し訳ありません。…こういうことなんです」
そしてあやかから朝倉が企画したイベントの全貌が明らかになった。このゲームは鬼の新田の監視をくぐり、ネギ先生の唇にキスすること。相手は枕を使って妨害可能。上位入賞者には豪華商品をプレゼント。新田に見つかれば朝まで正座。
勿論そんなくだらないイベントに参加する気などサラサラない千雨は断るが、このイベントはペアでなければ参加できないとのこと。結局、あやかに引きずられながら無理矢理ゲームに参加することに…。
とりあえず、今の千雨の目的はこのゲームから抜け出すこと。
（まあ、適当にやって退かせてもらいますか）
いつ敵に会うかわからないので、枕を両腕に持ちながら歩く。そして曲がり角にさしかかった所…。
「っ！」
ちょうど反対側から来た、明石裕奈と佐々木まき絵のペアと遭遇。
「いいんちょ、覚悟ー！」
「ごめんね、千雨ちゃん！」
すぐさま、まき絵があやかに、裕奈が千雨へと襲いかかるが…。

「甘いですわ！」
「おせぇよ」
あやかはまき絵の脇腹に枕を叩き込み、千雨は自分に向かって走り出してきた裕奈の足を引っかけ、壁に激突させる。
あやかは合気道を、千雨は我流の剣術といった武術経験者相手では、いくら運動神経が良い2人でも分が悪すぎた。
現に2人共、攻撃の痛みでうずくまっている。
「バカ正直過ぎますわ、2人共。…それにしてもやりますわね千雨さん。何か武術でもやっていたのですか？」
「…通信教育の剣術を少しな。いいんちょは？」
「私は合気道ですわ」
さすがに真実は言えないので、当たり障りのないことを言ってごまかす。あやかは納得したのかそれ以上は何も聞いてこなかった。
「そろそろ行きましょう。早くしないと新田先生が来てしまいますわ。別に私達はまき絵さん達を倒さなくてもいいのですからね」
「分かっているよ。私だって朝まで正座は勘弁したいしな」
2人は急いでこの場から離れた。そして2人が離れたすぐ後。
「明石、佐々木ー！何をやっている！！」
「「ひぃ～！」」
新田の怒鳴り声と2人の悲鳴が響き渡った。
明石裕奈、佐々木まき絵。両者共にゲームリタイア…。

『おおっと、トトカルチョでも上位に食い込んでいた両者が早くもリタイア！しかも意外とチームワークが取れている3班！こいつは大穴かー！？』
トイレで監視カメラの映像を見ながら熱い実況をする朝倉。カモはオコジョサイズのノートパソコンを操作しながら賭け金の計算をしていた。

「2人に賭けられた食券は…全部で36枚ッスね。2人ともたった今リタイアしたから、食券の取り分は全部朝倉の姐さんに！オレっちとしては人数は減って欲しくないんスけどね」
「まあまあ！この手口ならいくらでも稼げるし、何ならまた明日やろっか？メンバー変えたら面白いことになりそう」
朝倉はカモとめぐり会えたことに感謝していた。はっきり言ってつまらない日常に、突如舞い込んだ非日常。それはたまらないほど爽快で快感だった。
「カモっちはこのゲーム、誰が勝つと思う？」
「まずは宮崎の姐さんだろ。ペアの綾瀬の姐さんは完全にサポートに回っているし、強敵だな。後は…かなり大穴になるが長谷川の姐さんかな？」
「千雨ちゃん？いいんちょじゃなくて？」
朝倉はすっとんきょんな声を上げた。
「雪広の姐さんは張り切り過ぎて空回りするタイプだ。ネギの兄貴は宮崎の姐さんより長谷川の姐さんに好意を抱いているし。まっ、この場合は恋愛感情より憧れみたいな好意だがな。だがな、それが上手くいけば…」
「大穴もあり得る…か。そういえば千雨ちゃんも魔法使いなの？ネギ先生の正体知っていたってことは」
「いや、ゲートキーパーっていう超能力者らしいッスよ。オレっちとしてはインベーダーなんかよりも兄貴に協力してほしいんスけどね」
画面には鳴滝姉妹が新田にしょっぴかれる映像が流れ、また朝倉は実況を再開する。
2人共、千雨の警告などすっかり忘れてしまっていた。

（だあー！どうする！？）

千雨は予定が狂ってしまったことに焦っていた。
当初の計画はこうだ。まずは適当にあやかを援護し、ある程度たったらそのままこっそり部屋に帰還。
…だったのだが、あやかは自分達の部屋からどんどん遠ざかって部屋から反対側の地点にいる。これはマズい、部屋から反対側のこの地点からは監視の目をかいくぐって移動していると、どうしてもタイムロスができてしまい、こっそり帰還できない。
（とりあえずは…向こうに行くまでは我慢か。…！？）
とりあえずは自分を無理矢理納得させ、落ち着かせるが…。「伏せろ、いいんちょ！」
バッ！とあやかの頭を押さえつけた。すると次の瞬間、枕がブーメランのごとく向かってきてあやかの頭を掠め、壁に陥没した。
こんな人間離れした現象を起こせるのはあいつらしかいない。
「アイヤー、ごめんアル」
「しかし、あの一撃に気づくとは…実力は本物でござるな、千雨殿」
階段の踊り場には武道四天王である古菲、長瀬楓が立っていた。
「てめえ…素人相手に本気出して楽しいのかよ」
「ニンニン。刹那殿と互角以上の戦いを繰り広げた人物を素人など呼ばないでござるよ」
睨みつける千雨と涼しい顔をする楓。ここで古も乱入する。
「そんなことどうでもいいアル！千雨、今すぐ私と戦うアルよ！」
「嫌だ！って言うかお前ら、その噂どこで…」
「真名からでござるが？」
「あ、あのガングロ野郎ー！」
楓の返答に千雨の叫び声が廊下に響き渡る。そしてその隙に古が瞬動を使い、一気に接近する。
「問答無用アル、ホアチャー！」
「うわったった…！」
中国武術研究会の部長である古は、次々と中国拳法を繰り出していく。一方、素手の戦いは苦手な千雨は反射神経のみで古の攻撃を交

わしたり防いだりしていた。バトルマニアである古はまるで、この世の春が来たと言わんばかりの表情で千雨に猛攻を仕掛ける。
そして残されたあやかは枕を両手に持つ二刀流戦法で楓となかなかのバトルを繰り広げていた。
「おーほっほっほっほっ！ネギ先生の唇は…私がいただきますわー！」
「むう…ものすごい気配でござる」
本来、一般人であるあやかと甲賀忍者である楓の実力差は歴然としている。
しかしネギ先生のキスがかかっているこの勝負、あやかはまるでニンジンを目の前にした馬のごとき迫力と力で楓と戦っていた。よく目を凝らせば彼女は何やらまがまがしい気を纏っていた。
「舐めんじゃ…ねえっ！」
千雨は懐に閉まっていた木刀に手を伸ばし、刃部分を一気に伸ばして古の腕めがけて振り上げた。
「！」
しかし古は当たるギリギリのところで後ろに下がって、浴衣の袖が破れただけで直撃にはいたらない。
「…今のかわすのかよ」
「枕以外の武器を使っているアル…」
「うるせ。いいからさっさと…！？」
千雨は古と話している最中に何かに気づいてしまった。それは二階にいる新田が階段を降りながらこちらに向かってくる光景が下の窓ガラスから見えてしまったのだ。
しかしこのことを千雨以外知らないので、戦いが止まることはない。
（ヤバい…このままじゃ全員捕まる！）
千雨は戦うフリをしながらこちら側を移している監視カメラの死角に上手く古を追い込む。
（こんなしょうもないことに疑似ゲート使うのもあれだが…部屋に残してあった旧型だし、平和活用だからＯＫか！？ゲートは『幻惑』

、視覚から入るように設定！）
千雨は左手を懐に入れたまま、ものすごい速さで疑似ゲートのキーを叩いてプログラムを入力する。
「おい、古！私の左手を見ろ！」
「うん？」
古は左手を突っ込んでいる千雨を好機とみて、トドメをさそうとした。しかし千雨の突然の発言に驚き、一瞬だが視線を千雨が疑似ゲートを持っている左手に逸らしてしまう。
そしてその瞬間、『幻惑』のゲートが開かれた。

『幻惑』は相手に強力な幻覚を見せることができるゲートだ。視覚からはもちろん、音を利用して、聴覚から攻めることも可能だ。そして視覚から強力な暗示にかかった古は…。
「アイヤー、超！は、発明品の実験台は勘弁アルー！」
脱兎のごとく古は新田が降りてくる階段を猛スピードで駆け上がった。
そして…。
「ネ、ネギ先生！？私のことが大嫌い…ですか？そんな…ブクブク…」
「カエル…カエルは勘弁でござる…！」
…どうやらこの2人も幻覚にかかってしまったようだ。口から泡を出して気絶しているあやかと顔面蒼白の楓。
「…なんかごめんな」
『幻惑』のゲートのあまりの効力の強さに萎縮しながら、千雨はそそくさと逃げていった。
そして新田は…。
「…今日は、厄日か？」
幻覚に苦しみ泣き叫ぶ古を抱えながら、廊下に倒れているあやかと楓を見て、新田はポツリとそう呟いた。

古菲、長瀬楓、雪広あやか。ゲームリタイア…。

「やっとくだらないゲームから抜け出せる…」
千雨は自室へと戻りながら、そう呟いた。自室まであと１０メートルもないだろう。気をつけなければならないのは正座されているメンバーが集まっているロビーを通ることだが、笑いながら通ってやろうか…そう思っていたが。
「ああ…すいませんー！」
のどかのかん高い謝罪の声がロビーに響き渡った。
何事か、と千雨が顔を出すと…。
顔を真っ赤にして突っ立っているネギとそれを観戦している夕映の姿が。
「お、おい。何があった、先生？…先生？」
事情を聞こうとネギに話しかけるが、全く耳に入っていないらしい。
「朝倉！貴様が元凶かー！！」
「ひい～！」
遠くの方で新田の怒鳴り声が聞こえる。本能的にヤバいと感じた千雨はボーっとしているネギを抱え、猛ダッシュでその場から逃走した。
「…ハッ！待つですのどか～！」
夕映も恥ずかしさのあまり、逃走した友人を追いかけた。

「…なるほどな」
ネギが寝泊まりしている部屋へと入った千雨はネギから事情を聞いた。
告白されたのどかへ恋人ではなく友達から始めようと返答をしたネ

ギ。しかしうっかりのどかがバランスを崩してしまい、そのままネギの唇にキスをしてしまった、ということらしい。
「あ～、先生！事故なんだよ、事故！」
生真面目なネギを説得するには数十分を用いた。
「…もういいか？いいなら、私帰って寝るぞ？」
「は、はい」
千雨は弟を持った気分になりつつも席を立つ。そして靴を履いたところで…。
「あっ！千雨さん、木刀…忘れてますよ！」
「えっ！？…ああ、すまん！」
自分がずっと持ち歩いていた木刀をネギが抱えて持ってきた。千雨は靴を脱いで手を伸ばした。と、ここで…。
ツルンっ！
「うおっ！？」
靴下のままで歩いた千雨はうっかり足を滑らせた。そしてそのままネギともみくちゃになって…。
チュッ！
ネギとキスをしてしまった。

「大丈夫ですか、ネギ先生！」
「ネギ！大丈夫…？って、千雨ちゃん、なんでここに？」
ガチャっと入り口が開いた瞬間、なだれ込んだ刹那とアスナ。
「…朝倉のゲームに巻き込まれてな。巻き込まれた先生を送っていたんだ」
「ほ、本当ですよ」
一応ネギもフォローする。ここでアスナが本題を思い出す。
「そうだ！ネギ、あのバカカモと朝倉知らない！？」
「えっ、カモ君？…そういえば姿が…」
…何か、2人に用でもあるのだろうか？
「あいつら…正気なの！？千雨ちゃんの警告も無視して！」

「…！なんか知ってんのか神楽坂？」
千雨の疑問に刹那が答える。
「…ホテルを囲う形で仮契約用魔法陣が展開しているんです！そしてこのゲーム…！こんなこと考えたり、実行するのはあの２人しかいません！」
…ん？千雨は思考を巡らした。
仮契約…キス…魔法陣…カモ…。
ー！その瞬間恐ろしい答えが浮かんだ。
そして一つの疑問も。
「なあ…仮契約ってキスで成立すんのか？」
「？は、はい。いくつか方法はありますが、手っ取り早いのは接吻…つまりキスですね。…千雨さん？」
刹那は様子がおかしい千雨に首を傾げる。
「それって相手に好意がないと発動しないのか？」
「いえ…まさか、千雨さん！」
刹那は気づいたが鈍いアスナは気づいていない。
「私さ、さっき先生と偶然キスしちゃったんだよな…！仮契約…しちまった…！」
部屋の時が止まった。そして刹那が一番早く意識を回復させて。
「…何やっているんですか、千雨さん！」
開口一番そう叫んだ。

第１５話　接吻大戦（後書き）

さて、次回は千雨の忠告を無視した朝倉達に天罰が下ります。
次回もお楽しみに！

第１６話　千雨、怒る（前書き）

かなーりアンチな内容です。
ご注意を…そして短い。

第16話　千雨、怒る

朝倉が主催したキスゲームから一夜明けた修学旅行3日目の朝。
ロビーには多くの生徒が群がっており、昨日ネギにキスをしたのどかが豪華商品である手のひらくらいのカードを手にしていた。
「へー、これが豪華商品か」
「本屋の絵が書いてある」
「キレー、私達も欲しーい！」
実はこれ、ネギと仮契約した証である仮契約カードのコピーであり、のどかは知らないうちにネギの2番目の従者になってしまったことを意味するのだが…。
そんなことを知るはずがない生徒達は、ただキレイなカード、のどかにとっては勇気を出してネギに告白した証だ。のどかはそれを大切そうに持っていた。
そんな中、ロビーの端にはニヤニヤしている朝倉を睨みつけながら、キレる寸前のアスナがいた。
と、ここで朝倉はアスナに気づいたのかヘラヘラしながらこっちへ近づいてくる。
「昨日はごめんねアスナ！でもネギ君の戦力も強化できたし「黙って」」
全く悪気がない朝倉をピシャリと黙らせながら、アスナは怒りを通りこして呆れてしまっていた。
昨夜、カモが仕込んだ罠の眠りから覚めたアスナと刹那はホテルの周囲に陣があることに気づき、酷く慌てた。
もしかして敵の襲来！？
しかし連中の目的であるこのかは無事であり、自分の目の前で寝ていた。刹那が式紙がどうか疑って調べたが、間違いなくこのか本人だった。
とりあえず、どんな状況か…。それは刹那が外に出て、どんな種類

の陣か確認したこととテレビから漏れてくる音声から判明した。
このホテルに展開している陣は仮契約用魔法陣。そして朝倉が実況しているキスゲーム。
…間違いない。彼女達は千雨の忠告をまるっきり無視して、無理矢理パートナー作りをしているのだった。しかもネギにはこのことを喋らずに、生徒達にはゲームと騙して参加させて。
刹那は怒り狂い、このことと夕刻千雨に裏側世界の危険性をアスナに説明したところ、アスナも同様にキレた。
そしてネギの部屋に駆けつけた所…ネギを部屋に送った千雨も偶然キスをしてしまい、仮契約が成立。
そして全ての事情を知ったネギと千雨は、カモと朝倉に裏切られたことに酷く怒り、悲しんでいた。
刹那やアスナは『朝倉達をシメる』と宣言したが、ネギは必死に説得。結果、『朝倉達が本当に反省しているなら、厳重注意だけで許す』といった結論になった。
しかし本気でネギがアスナ達を説得し、助けようとした相手がこのザマだ。全く悪気を感じさせない態度、仮契約カードをせがむ生徒達に「今日の夜もまたやるから」などふざけたことをほざいている。
まるで心配していたネギがバカみたいではないか。
「私達にしたことやあんたらがやらかしたこと…ここじゃ目がつくから、ホテルの裏路地に行くわよ」
話し合いはそこで中断、アスナを先頭にロビーを後にした。

裏路地についたアスナ達を迎えたのは、下を俯いているネギと腕を組んで目を瞑っている千雨の姿だった。
「ネギ君、おはよー！」
「兄貴、おはようッス！」
朝倉と胸ポケットに入っていたカモがネギに挨拶するが、ネギは何も答えない。千雨はただ、ため息を一つ吐いた。

「…ねえ、あんたら。なによ、これ」
アスナがポケットから取り出したのは2枚の仮契約カード。
そこには数冊の本に囲まれているのどかの姿と両手にグローブを装備している千雨の姿が描かれていた。
「カモ君…どういうことなの、これ？朝倉さんとは話し合いで解決したんじゃないの！？」
「い、いや…これは…」
「ち、違うってネギ君！私達はネギ君の為に…」
ヒステリックに叫ぶネギとネギの為だと主張する朝倉達。しかしアスナはさらに口を開く。
「巨大魔法陣の時点で真っ当な理由なんかじゃないでしょ。それにバカカモ、確かオコジョ妖精は仮契約するたびにお金が入るんでしょ？朝倉のトトカルチョもネギの為だって言うの？どう考えてもお金のためよね」
「ち、違うって！アスナ信じてよ～」
朝倉達はこの期に及んで言い訳をして逃れようとしているのが見え見えだった。半笑いで口から出てくるのはネギの為だからという言葉ばかり。そんなんで事態が解決するのならここまでアスナやネギは怒ってはいない。
と、ここで今まで黙っていた千雨が口を開いた。
「朝倉…私の忠告は聞かなかったのか？」
「え？あ…忠告ね、も、もちろん」
朝倉は上手くごまかしたつもりらしいが千雨は朝倉が全く忠告を聞いていなかったことを一発で見抜いた。
（…反省しているんならまだ可愛げがあったんだがな。こいつらは前に私をいじめていた奴らと同じ思考してやがる。自分の利益しか考えてないクソムシ野郎が…！）
いろんなトラブルを引き起こす3－Aだが、今回ばかりは遊びで片付けられる問題ではない。分かってもらえないでは済まない。だから、どんなことをしても止めなければならない。

そう、どんなことをしてもだ。
（悪いな北条。お前との約束…今だけ破るぞ）
千雨はゆっくりと歩き、朝倉の正面に立った。そして右手を思いっきり伸ばし、手のひらを朝倉の腹部辺りで止める。
「…真空ミサイル」
千雨がポツリと言った瞬間、風が千雨の手のひらに集まり、水風船くらいの大きさに。そして風の弾丸は朝倉の腹部に当たる。次の瞬間、朝倉は体が「く」の字に折れ曲がってそのままつきあたりの壁にぶっ飛ばされた。
千雨が『風雷』のゲートを手に入れてから6年間。どんなことがあっても決してゲートを一般人に向かって使ったことがなかった。何故ならその強大すぎる力を…そして傷つく痛みを知っていたからだ。しかし千雨は親友の北条雪乃との約束を自らの手で破った。それほど止めたいことなのだ。

ぶっ飛ばされた朝倉は何がなんだか分からなかった。
（何…？今の…空気の塊みたいなものが…）
腹部を押さえて必死に呼吸する朝倉。
「…千雨さん！どうして！」
ネギはまさか手を出すとは思っておらず、千雨に怒鳴る。
「ヒィ！」
カモはぶっ飛ばされた朝倉を見て、慌てて逃走するが…。
「逃げないで下さい」
ギィン！カモの胴体を踏んで、目の前に愛刀、夕凪を突き刺す。
「ナイス、桜咲」
千雨はポツリと呟く。
「や…やりすぎですよ！」
「先生、ダメなんだ。私達がどんな世界で戦っているか分からせな

いと」
「ええ。カモさんと朝倉さんの今回の件は遊びで片付けることはできません。また、繰り返す可能性があるから…こちら側の片鱗でも分かってもらわないと」
千雨も刹那も裏の世界の危険さは十分に理解している。だからこその警告なのだ。
「カモさん、仮契約カードを持つということは…自分が裏の人間だということを表す証明書みたいなものだということは分かっていますよね。それを一般人に渡すなど…！」
「…」
「バカカモ！あんたはね…自分の利益の為に私達を裏切ったのよ！」
「そしてよ、朝倉。私が一番腹立つことはよ！なんで私が…ゲートキーパーが必死で人間を守ろうと戦っているのに！なんで人間が…同じ仲間同士の人間が！他人の心を平気で踏みにじる！？裏切る！？それじゃあ、私達がやっていることが…バカみたいじゃないかよ！！」
千雨は朝倉の胸ぐらを掴んで叫んだ。朝倉は顔がグチャグチャになって泣いていた。
「なあ…兄貴なら…兄貴なら分かるだろう」
カモは最後の味方であるネギに助け舟をだした。しかし…。
「そんな手段で従者なんて…増やしたくない」
ネギはキッパリと断った。
「…カモ。一つ教えてやるよ、お前が舐めているインベーダーの秘密をよ。インベーダーはな感染するんだ、お前らみたいな自分勝手な人間は、みんなインベーダーになる可能性があるんだ…！私だって一昨日、元人間だったかもしれないインベーダーを殺した。分かるか？次はお前らを私が殺すかもしれないんだぜ」
「！！」
千雨は付き合ってられないと感じて、朝倉を離した。
「私が言いたいのはそれだけだ。だからよ…もうこんなことすんな

！他人を巻き込むな！」
「は、い」
千雨がカモを睨みつけて、カモが慌ててそう言う。
「先生、私と契約破棄してくれ。こんな無理矢理されて納得いかないんだ」
「は、はい…でも時間がかかりますよ」
「いいよ、別に。宮崎のもな」
千雨はそれだけ言うと、裏路地を出た。そこには朝倉の鳴き声だけが響き渡っていた。

のどかは途中でアスナに呼び出されて、いなくなってしまった朝倉を探していた。何故、アスナはあんなに怒っていたんだろう？
気になってしまったのどかはこっそり後をつけてしまった。いつものどかなら絶対にしないような行動なのだが、ネギに告白したり、カードを手に入れたりしたので浮き足立っていたのかもしれない。
一同は裏路地に入っていった。のどかはその場から少し離れた場所で彼女達が何をしているのか盗み聞きをした。
何かの怒鳴り声や泣き声が聞こえて、上手くのどかは聞き取ることができなかったが数個の単語だけは聞き取れた。
（仮契約…カード…ゲートキーパー…インベーダー…）
ただし、これが何の意味なのか…のどかはさっぱり分からなかったが。
そして裏路地から千雨がかなり不機嫌そうな顔で出てきた。慌ててのどかは物陰にサッと隠れる。千雨はのどかに気づくことなくホテルに戻っていった。
そして千雨が去ってから数分後、ネギ達一同がぞろぞろと出てきた。
しかし何故か一同の空気は重く、朝倉は泣いている。
「カモ、これどうすんの？」
「来たれ…」

カモが弱々しくいった。
物陰から見ていたのどかは白い動物が喋っていることにも驚いたが一番驚いたことはアスナが何か呟くと持っていたカードからハリセンへと姿を変えたことだ。
（アスナさんのカード、私と同じ…？）
この時、ネギ達はのどかに自分達の正体に気づかれないように気をつけていたのだが、のどかの前で仮契約カードを使ってしまうというミスを冒してしまった。
「え、と。確か…来たれ」
アスナがやっていたように呟くと、のどかの手からカードが消えて、そこから一冊の本が出てきた。
「本？すごい…まるで…魔法みたい」
のどかはポツリとそう呟いた。

第１６話　千雨、怒る（後書き）

千雨のグローブは瞬のグローブみたいな感じです。
次回更新はかなり遅れます。ご注意を。

第17話　原種襲来（前書き）

久しぶりの更新です！

第17話　原種襲来

綾瀬夕映が尊敬していた祖父をなくしたのは中等部への入学前後の時だった。
それからだろうか…彼女は世界への興味を一気になくした。以前、あれほど集めていた本もガラクタにしか夕映は見えなくなってしまっていた。
そんな冷めた気分で始まった中等部での学園生活。
既に入学式から3日経ち、それぞれ仲のいいメンバーでグループが構成される中、夕映は誰とも親しくならずに孤立していた。
（アホばっかりです。中学生にもなってあれほどのバカ騒ぎなど）
冷めた目線から周りの生徒を見ながら、視線を動かすと…自分の隣の席の人物も同じような視線をしていた。
（たしか…長谷川千雨さん）
夕映は数時間前の国語の時間に行った自己紹介の記憶から千雨のことを思いだした。夕映から見た千雨は周りの生徒と必要以上関わろうとはしないタイプの人間だ。いわゆる自分と同じ孤立状態というのだろう。
そしてお互い孤立している人間同士だからなのか、気がついていたら2人で喋っていた。
「あー、お前も？」
「…バカ騒ぎは苦手ですから」
「私も。なんかあいつらテンション高いよな」
…そうして綾瀬夕映と長谷川千雨、2人は奇妙な仲になった。特に親しいという訳ではないが、なんか意気投合する。千雨と夕映の関係はそんな物だった。
それは学年が上がっても続き、そして今日も続いている。

「…」

夕映は自分達の部屋で目を覚ました。彼女は朝食の後、再度眠気が襲ってきたので、少し部屋で眠ることにした。幸いにも出発時刻まで、まだ十分すぎるほどあるのでそれまでに起きれば問題ないだろう。

夕映は眠い目をこすりながら壁の時計を見る。

（8時半…出発まで後、30分ですか。そろそろ準備をしなくては）

夕映は布団をたたみ、着替えた。

そして、部屋を出て廊下を歩く。

すると、手に一冊の本を開き、何か変な動きをとっている親友の姿を目撃した。

「のどか、何しているですか？」

「！ゆ、夕映…」

のどかはビクッとして、夕映を見る。そして本のページをジッと見つめて…いきなりのどかはバンとその本を閉じた。

「…？」

なにやら怪しく思った夕映はのどかを突き詰めることに。

「のどか、どうしたんですか？…ラテン語ですか、珍しい本ですね」

「あ、あう…なんでもないのー！」

夕映は本のカバーの文字を言っただけなのに、何故かのどかは酷く慌ててどこかに走っていった。

「？？」

何かのどかに悪いことでもしてしまったのだろうか？夕映は訳がわからないまま、廊下に突っ立っていた。

（な、何なの～この本！？）

のどかは走りながら持っている本に視線を落とす。

カードから出てきたこの本は不思議だ。先ほど、この本を開いたら真っ白なページに自分の心の中が絵日記のように描かれた。
そして夕映の名前を言ったところ、今度は夕映の心の中が描かれた。いろんな本を見てきたのどかでもこんな本は見たことがない。
（これって…とってもマズい本なんじゃ…）
のどかは1人、とんでもない物を手に入れてしまったのでは、と焦っていた。

修学旅行3日目は完全自由行動日。
千雨達3班はシネマ村へとやってきたのだが…どこか空気が険悪だった。
千雨はイライラしっぱなしだし、朝倉は酷く落ち込んでいた。
「ねぇ…何があったの千雨ちゃん？」
「知らね」
「じゃ、じゃあ朝倉…何があったの？」
「…」
夏美がなんとか場の空気を盛り上げようとするが、ますます場の空気を険悪にしてしまい、逆効果に。
「じゃあな、私はこっちに行くわ」
千雨は他のメンバーにそれだけ告げると一人、別のルートに。
「ちょ、ちょっと千雨さん！？」
そんな千雨の勝手な行動にあやかが声をあげる。
千雨はそれを無視してズンズン進んでいった。

一人になった千雨はただボーっとしながら歩いていた。
すると、遠くの方で刹那とこのかが仲良くしている姿を見かけた。

しかし刹那は何故か新撰組の格好をしており、妙に似合っていた。
と、刹那が千雨に気づいたのか、こちらに近づいてきた。
「あっ、千雨さん。少し…お話があるんですが…」
挨拶を交わし、千雨に相談する刹那。そんな刹那を見て、このかは何かを感じとったのか…。
「千雨ちゃん、うちらと一緒に回らへん?」
どうやらこのかは刹那が千雨と一緒に回りたいのだ、と受け取ったらしい。無論、特に断る理由もない千雨は…。
「いいぜ。でも私なんて入っていいのか?」
「かまへんよ」
このかは千雨の手をギュッと握って、千雨を引っ張る。
そして数分後、千雨達は小さなお土産屋で休憩をとっていた。このかは刹那の目が届く範囲でお土産をいろいろ見ていた。
千雨と刹那は壁に寄りかかって、今朝の会話の続きをする。
「それで…千雨さんの仮契約は破棄しました。しかし、宮崎さんのが…できない状況なんです」
「なんでだ?」
「カモさんがコピーの仮契約カードを渡してしまったんですよ。契約破棄すれば、ネギ先生が持っているマスターカードとコピーカードは消えるんですが、コピーカードを宮崎さんは持ち歩いているんです。もしも宮崎さんがカードを鑑賞している時に目の前でカードが消える瞬間を目撃されたら…今度こそ言い訳ができません。だから…」
「うかつに消すことができない…って訳か」
千雨はそう言うと、刹那は頷いた。
…あのカモは余計なことを。
「…となると、宮崎が目を離している隙に契約破棄するという訳か」
「そうですね。食事や睡眠時にやってしまうのが一番良いかと。あと…」
ppppp!

刹那と千雨の会話は千雨の携帯からの着信で中断する。
「悪ぃな」
千雨は刹那に一言言うと携帯を取り出す。画面には『イージス（A．E．G．I．S）』の文字が。
「はい、長谷川です」
「長谷川君か、シネマ村の…東方面に膨大なＩＰＷが発現した。至急向かってくれ」
「…はい」
パチンと携帯を閉じる。
「…何かあったんですか？」
刹那は裏に関わっているので、千雨の気配が変わったことに真っ先に気づいた。
「お仕事だよ」
「…！インベーダー…ですか？」
「ああ、うちの班のメンバーに会ったら適当にごまかしてくれ」
そう言うと千雨は入り口で貰った地図をポケットから取り出し、それを見ながら東方面へ走っていった。
「千雨さん…」
「どうしたん、せっちゃん？…あれ、千雨ちゃんは？」
「え？あ、あのですね…」
刹那はこのかにいなくなった千雨のことを言い訳しつつ、どこか胸騒ぎを感じていた。
そして、刹那達から少し離れた地点にいる綾瀬夕映も困った事態に陥っていた。
（も…もるです。調子にのって京都限定ジュースを飲みすぎてしまったです…）
風変わりな飲料を好む夕映は京都限定ジュースを調子にのって４杯も飲んでしまったのがまずかったらしい。おかげで夕映は今、失禁の危機に陥っている。
（い、一番近いトイレは…東地点の…）

手元にある地図を確認しながら、一番近いトイレ目指して、彼女は駆け出した。そこで何が待っているのかを知らずに…。

（…？人が…いない）

千雨はＩＰＷが発現した東地点にたどり着いたが…そこには人一人存在しない奇妙な地点だった。

（…なんだこの感じ？前にどっかで…！？）

千雨は分かった。この違和感は以前、刹那と戦った時に感じた現象と同じだ。そして、千雨から数十メートル離れたベンチに座っていた女性が立ち上がって…こちらを向いた。

「人払いの結界を超えて、あたしの気配を察知するってことは…あんた、ゲートキーパーでしょ？あたしは悪魔令嬢。少しでも、もたせてよね！」

その女性はニコッと笑った。

最悪の相手…オリジナルインベーダー、悪魔令嬢が千雨と出会ってしまった。

一方、東京にある影山宅では…あまりの強大なＩＰＷに思わず声をあげた。

「…！なんだ、この異常なＩＰＷは！？新種か！？いや…違う…まさか！？オリジナルインベーダーか！！」

影山はここで初めて自分の失態に気づいた。

オリジナルインベーダーは強さに差はあるが、ザコインベーダーの実力を遥かに上回る奴らばかりだ。そんな奴ら相手に千雨一人で戦って勝てるか？

…答えはＮＯだ。

2年前に出現したオリジナルインベーダー、幽霊少女も影山一人で立ち向かうことができないほど強大な相手だった。
そんな奴ら相手に千雨一人で挑むなど…自殺行為に等しい行動だ。
急いで影山は京都に最も近い助っ人に連絡する。
「もしもし…影山だ。今、時間はあるか?」
「影山さん…どうしたんだ?時間なら、有り余っているけどよ…」
電話先の女性は、砕けた口調で影山と会話をする。
「時間がない、要点だけ話す。京都に…オリジナルインベーダーが出現した。これ以上…犠牲が増える前に叩いてくれ!」
「オリジナルインベーダー!?…分かったよ。ただし、交通費はそっち持ちな!」
黒髪に前髪のみ赤いメッシュをかけた大学生くらいの女性は、ニヤリと笑って携帯の通話を切る。
「さーて、久々の仕事か…!この『寸断』のゲートキーパー、太刀川里香!京都に出陣!」

第17話　原種襲来（後書き）

太刀川里香が助っ人として参戦決定！
そして次回は…千雨ＶＳ悪魔令嬢です。
次回もお楽しみに！

第１８話　新たなる門（前書き）

急展開です、ご注意を。

第18話　新たなる門

悪魔令嬢が千雨と遭遇する数十分前。
悪魔令嬢はフェイトと共に茶屋で休憩していた。
「じゃあフェイトはこれから仕事なの？」
「まあね。お嬢様を誘拐して…何をするのやら」
フェイトはため息をつきながら串団子を一つ口に入れる。悪魔令嬢はお茶を啜りながらどうやら苦労しているらしいフェイトの話を聞く。
「まあ、あのババアは基本的に人の上に立つにはダメなタイプよね。思いやりがないもん。…で私は？」
「作戦には参加するな…だってさ。まあ、君は嫌われているしね。彼女の嫌いな西洋魔法を使うし、初日の依頼で彼女の機嫌を損ねているし」
途端に悪魔令嬢はつまらなそうな顔をした。
（あー！つまんない…）
フェイトと共に行動して数ヶ月。その間、彼女は思いっきり暴れたことがないので退屈で死にそうだった。
…まあ、オリジナルインベーダーである彼女が思いっきり暴れたらかなりヤバいことになるのだが。
悪魔令嬢はしばらく黙ったまま、団子を食べていたが…しばらくすると何か面白いことを思いついたのかニヤニヤし始めた。
「ねー、フェイト。その間はあたしは好きに動いていいんでしょ？」
「…？まあ…そういうことになるね」
「みんなに迷惑かけなければ何やってもいいんでしょ？」
「…何する気だい？」
フェイトは悪魔令嬢が何かろくでもないことを考えついたのがはっきり分かった。
「むふふ…面白いこと！じゃあね～！」

それだけ言うと悪魔令嬢は立ち上がり、東地点へ向かっていった。
そして彼女は東地点一帯に人払いの結界を張る。
「ん…と。あたしがこの間、呼び出したタイプの力は…このくらいかな？」
ベンチに座った悪魔令嬢はわざと力を漏らして自分がここにいることをアピールする。
「これでゲートキーパーが来れば…楽しめるんだけどな」
数分後、悪魔令嬢の企みは成功する。
結界を超えて、一人の少女がやって来たのだ。
（…来た！あの感じは…ゲートを持っているね）
悪魔令嬢はほくそ笑んだ。彼女が考えた面白いこと。千草に迷惑がかからなければ良いのだ。だから本来の自分の敵であるゲートキーパーと戦うことを彼女は考えついたのだ。

（…なんだ、この感じ）
悪魔令嬢と対峙した千雨は底知れぬ不安を感じた。
（…喋るインベーダー？悪魔令嬢…？）
悪魔令嬢なる人物を目の前にして、千雨は彼女を不気味に感じた。
こいつと戦ってはダメだ。千雨の勘が激しく警告していた。
なんとかしなくては…。
千雨は木刀を展開して、構える。
悪魔令嬢はようやくその気になった千雨を見て、ニヤリと笑った。
「やっとその気になったの？」
「…ああ。これしか道がないんだろ？私が生き残る道はよ」
「まあね」
…一瞬の静寂の後。
ギィン！
千雨の攻撃と悪魔令嬢の攻撃が空中でぶつかり合った。

今、戦いのゴングが切って落とされた。

最初に手を出したのは千雨だった。
足に『風』を纏い、一気に相手の懐に踏み込む。そして木刀で一撃を喰らわせるために振り下ろすが…。
「風楯」
千雨の一撃は風の障壁に阻まれる。攻撃が防がれたことに千雨は舌打ちする。
「戦いの歌！」
お返しと言わんばかりに、身体強化魔法『戦いの歌』を使って千雨の急所を狙って拳を振るう。
「甘え！」
千雨は慌てずに『迫撃』を使い、悪魔令嬢の一撃を腕で止める。そして千草は悪魔令嬢が突き出した右腕を掴み、こちら側に引き寄せる。
「…！風楯！」
悪魔令嬢は障壁を張るが、千雨は障壁に防がれるような攻撃はしない。
『迫撃』によって威力が強化された拳に、自身の『雷』のゲートを使って更に威力を増大させる。疑似ゲートを手に入れてから考えていた戦術を千雨はぶっつけ本番で実行した。
「衝雷拳！」
千雨の放った一撃は障壁を貫通し、悪魔令嬢の顔面に直撃する。その一撃を喰らった悪魔令嬢はぶっ飛ばされ、壁に叩きつけられる。
千雨はこれで終わってほしいと思いながら、疑似ゲートを持ち、木刀を構える。
しかし千雨の願いも虚しく、ぶっ飛ばされた悪魔令嬢はゆっくりと立ち上がった。しかも顔面を殴られたのにピンピンしている。
一方、悪魔令嬢は少し千雨を舐めていたことを後悔していた。

（やっぱ、無詠唱だけで戦うなんてバカな真似しなきゃよかった。…にしても、あの子なかなか強いわね。魔法世界で拳闘士なんてやったら良い線いくかも…）

また、千雨もかなり相手の強さに動揺していた。

（あれ…魔法だよな。ヤバいな…話だけしか聞いてないから対策の使用がないな…）

一応、疑似ゲートをいつでも使えるように、構える。

そして、先に動きがあったのは悪魔令嬢だった。

「イシス・グロス・グレセント！火の精霊１００柱！集い来たりて敵を射て！魔法の射手　連弾　火の１００矢！」

悪魔令嬢の腕先から火の矢が１００本飛び出る。それが一斉に千雨に向かってきた。

「いいっ！？ゲ、ゲートオープン！真空カマイタチ！」

千雨の手からカマイタチが吹き出し、火の矢を叩き落とす。…が、全ての矢を叩き落とせず、残りの矢は疑似ゲートの『鉄壁』で防ぐ。

「よそ見している暇なんてあるの？氷神の戦鎚！魔法の射手！　闇の１１矢！」

更に猛攻を仕掛ける悪魔令嬢。千雨の頭上に巨大な氷塊が出現、重力に引かれて落ちる。

千雨は慌てて『粉砕』を使って氷塊を粉々にし、闇の矢を、風を纏わせた木刀で叩き落とす。

「へえ、やるわね。じゃあ…！魔法の射手！　火の１１矢！」

悪魔令嬢は火の矢を放つが…全くのデタラメな方向に打った。制御ミスかと思ったが１００本の火の矢を操る彼女が制御を誤るだろうか？近くの建物に当たった矢は爆発し、その場に誰かの悲鳴が響いた。

千雨は目を見開いた。そこにいたのは、クラスでかなり背が小さい部類に入る身長、紫色の長い髪。

綾瀬夕映がそこにいた。

「あ…綾瀬」

（な、何がおこっているのですか！？）
東地点のトイレで用を足した夕映はどこか違和感を感じていた。
まず、この東地点は人が圧倒的に少ないのだ。
少なくとも観光シーズンの京都は国内だけでなく、外国からも多くの観光客が訪れる。
それ故、このシネマ村も多くの客が訪れており、人でごった返していた。
しかし、この東地点だけは人一人すらいない。トイレに行った夕映は少し怖くなった。
まるで世界中の人間が自分だけを残して消えてしまった…そんな感じがした。
そんな状況だったので、人を求めて、物音がする方向に進んで行くのも無理なかった。
しかし目線の先には見知った顔の千雨と見知らぬ女性がマンガのような戦いを繰り広げていた。
（なんなんですか…あれは！まるで…魔法…！？）
女性は夕映に気づいたのか、夕映に向かって魔法を放った。
「ひっ！」
夕映の頭上で魔法は爆発。あまりの怖さに夕映は尻餅をついてしまった。
一方、千雨はあまりの衝撃に思考が上手く働かないでいた。
（なんで綾瀬が！？人払いの結界は一般人は入れないんじゃないのか！？）
また、悪魔令嬢は千雨とは違うベクトルで思考を巡らせていた。
（人払いの結界が効かないから…増援？にしては、迫力が…。演技かなんか？でなければ説明がつかない。もしかしたらあたしを油断させる作戦なのかも）

悪魔令嬢は夕映が千雨の仲間だと、勘違いしてしまった。
「ま、いいや。魔法の射手！　火の１１矢！」
夕映を倒すために無詠唱魔法を放つ悪魔令嬢。
千雨は夕映に向かって叫ぶ。
「綾瀬、逃げろ！綾瀬！」
しかし恐怖のあまり、固まってしまった夕映は千雨の声など、耳に入らない。
「…クソっ！」
千雨は急いで夕映の元に走る。
（疑似ゲート使ってる暇はない…！やっぱりこれしか！）
千雨は夕映を抱きかかえて、自身が盾になることで夕映を魔法の射手から守る。
ドスドス！
「があああああ！！」
夕映は傷一つないが、千雨はそうはいかない。
直撃した背中からは、痛々しくヤケドの後と焼けた血の匂いが。
「…千雨さん！？千雨さん！千雨さん！」
意識がもうろうとしている千雨は夕映の声がかろうじて耳に入る。
「あ…綾瀬」
悪魔令嬢は全くの予想外な展開についていけなくなってきた。
「…どうなってんの？ああー、面倒くさい！一気に片付ける！イシス・グロス・グレセント！ものみな焼き尽くす　浄北の炎　破壊の王にして　再生の徴よ　我が手に宿りて　敵を喰らえ　紅き焔！！」
ほとばしる爆炎が千雨と夕映を襲う。唯一、この攻撃を防げる千雨は痛む体を鞭打って疑似ゲートに手を伸ばす。
…しかしパスワードを入力する時間などなく。
ドッカーン！！
辺りは爆炎に包まれた。

「…終わりか。あーあ、面倒くさい！やっぱり、魔法世界でも行って…！？」
そこで悪魔令嬢は何かに気がついた。爆炎に包まれた辺りに何かいる。
「あのチビっ子…まさか。そういうことか」
そこには千雨の前に立ち、腕を突き出している夕映の姿が。
しかも傷一つなく、彼女の腕の先には半径2メートルほどの透明な盾が。
悪魔令嬢は笑いが止まらなかった。まさか、巡り会えるとは。
「新しい…ゲートキーパー！」

「くっ…」
千雨は『生命』のゲートを使って、背中のヤケドを回復。なんとか、立ち上がることができた。
「ち、千雨さん！大丈夫…ですか！？それとこの力は…！」
「ストップ。あいつから逃げてからだな…ゲートオープン！」
木刀を構え、『風』を開く千雨。
「ウルトラァァァ！旋風ゥ！突きィィィ！！！」
木刀に風を纏わせ、一気に懐に入り、悪魔令嬢を腹部を突く。風を纏わせた強烈な突きは悪魔令嬢の障壁をブチ破った。
「うあああー！ゲートオープン！」
更に『雷』も使い、突きの威力が激増する。
「ぐっ…！がああああ！」
とうとう風と雷の衝撃に耐えられなくなった悪魔令嬢は建物の壁を突き破って、どんどん奥へとぶっ飛ばされた。
「…やったですか？」
「そのセリフは死亡フラグだからやめろ。とっとと逃げるぞ」

千雨は夕映の手を引っ張って、その場から逃げた。
ぶっ飛ばされた悪魔令嬢は…。
「…フフッ！やっぱり人間って…面白い！」
一人、狂気の笑みを浮かべていた…。

「…はい、こちら京都のシネマ村です！シネマ村東側でガス爆発が発生し、壊滅的な被害が…」
シネマ村入り口にて、テレビ局のアナウンサーが大声で叫んでいた。
太刀川里香は入り口でその話を聞きながら、影山と通話していた。
「…後輩の行方がわかんないのか」
「ああ、オリジナルインベーダーが生きているのか死んでいるのか…それすらわからん」
「じゃあ、私は後輩のホテルに向かって確認してみる。ジャーナリストとか身分を偽れば通してくれたり確認したりできるかもしれないしな」
「わかった」
通話を終えて、里香はため息を一つ。
「…たっく。しばらくは休めると思ったのになんでまた…。これもゲートの副作用なのかね」
里香の呟きは消防車のサイレンでかき消された。

第１８話　新たなる門（後書き）

この小説では里香は高校卒業後、就職し、ゲートキーパーの活動をしばらく休んでいた…そんな設定で。
次回は秘密の暴露と本山です。お楽しみに！

第１９話　力と覚悟（前書き）

１０万ＰＶ＆２万ユニーク突破！
人気…あるのか？

第１９話　力と覚悟

シネマ村で千草の魔の手からなんとか逃れることに成功したネギ達は、関西呪術協会総本山へ向かった。
…何故か一般人である早乙女ハルナ、宮崎のどか、朝倉和美が混じってはいるが。
「…で、なんであんたらがここにいるのよ！」
「いやー、つい面白そうで！」
アスナは全く悪気がないハルナに怒鳴る。
「おっ！入り口発見！レッツゴー！」
「ちょ、そこは敵の本拠地ー！」
危険を全く感じず進むハルナ。すると…。
「「「「お帰りなさいませ、このかお嬢様！」」」」
大勢の巫女がネギ達を迎える。あまりの突然さに呆れていると、刹那から説明が。
「黙っていて申し訳ございません、実は関西呪術協会の総本山はお嬢様のご実家なのです」
…一瞬の沈黙の後。一番先にアスナが口を開き、叫んだ。
「えー！聞いてないわよー！」
そんな声を聞いてこのかは少し恥ずかしそうにしていた。

シネマ村のゴタゴタの後、時間はかかったがなんとか千雨と夕映はホテルに戻ってこれた。
ロビーに向かう途中、ちらりと駐車場を見ると、メガネが届けてくれたのか、奥の方に黒いバイク…ＵＰ－９３が停めてあった。
「…どうしたですか？」
「いや、何でもない。それで話なんだが、お前の班の部屋で話した

い。いいか？」
コクン、と夕映は頷くと二人は早速部屋に向かった。
「…それで質問です、千雨さん。あなたは…魔法使いですね？」
「正確に言えば違うんだけどな。私はゲートキーパーっていう超能力者だ。…お前もな」
「…！」
なんとなく予想していたのか、夕映はグッと顔をこわばらせた。
千雨は以前アスナやネギにしたようにゲートやその敵インベーダーについて説明する。ある程度説明し終えると、夕映はおもむろに口を開いた。
「…信じられないです。人類の敵などそんなB級映画みたいな話」
「悪いけど事実なんだ。お前がありえないなんて思っている魔法やゲートを…身を持って体験しただろ？」
「…！」
「それで次はお前が持っているゲートの話だ。まさか私以外にゲートキーパーがいるとはな…」
千雨はようやく合点がいった。夕映は自覚はしていなかったが潜在的なゲートキーパーだったため、無意識に結界をくぐり抜けられたのだ。
「ま、説明するよりやってみたほうがいいな。ゲートオープンって言って、さっきの力を引き出してみな」
「ゲ、ゲート…なんか恥ずかしいですね」
「口で言ったほうが力を引き出しやすいんだよ。恥ずかしいのは我慢しろ」
恥ずかしさのあまり、もじもじする夕映を一括。実際、千雨もゲートを使い始めた頃は恥ずかしい思いをしたことがある。
「ゲートオープン！」
その言葉を言った瞬間、夕映の手から小さいがゲートが出現。
そしてゲートから集まったエネルギーは、半径1メートル大の盾となった。

「盾？これが私のゲート…ですか」
「うーん、私が使っている『鉄壁』とは違うらしいな」
千雨が防御手段として愛用している『鉄壁』は、ネギ達魔法使いが使う障壁のようにバリア状に展開されるゲートだ。
それに対して夕映のゲートは、同じ防御型ゲートだが範囲は小さく、盾のように展開する。
「あっ、動かせるです」
夕映は腕を動かすと盾もその腕にくっついたように同じ動きをする。障壁を展開する『鉄壁』とは違い、夕映のゲートは自由に向きを変えられるという利点があった。
「盾のゲート…か。名付けるなら…『防壁』のゲートってとこか？」
千雨が夕映が使うゲートを命名する。夕映もその名前が気にいったのか特に反論してこなかった。
「…んで、こっからが本題だ。綾瀬…お前もう私に関わるな」
「…！？」
突然の千雨の発言に夕映は驚いた。

場所は変わって、総本山。
ネギは、このかの父であり関西呪術協会の長である近衛詠春に、学園長から預かった親書を渡すことに成功した。
しかし時刻は既に遅く、今から山を降りると日がくれてしまう。それでネギ達一同はここに一晩泊まることになった。ホテルには詠春が作った身代わりの式紙を飛ばしてくれるとのことだった。
そして現在、ネギ達は歓迎の宴に参加していた。目の前には豪勢な和食が並び、ドンチャン騒ぎになっていた。
「いやー、京都に来てこんな豪勢な料理を食べられるとは！やっぱ持つべきは友だね～！」
ハルナはそう騒ぎながら天ぷらをがっつく。そんなハルナにのどか

や朝倉は呆れかえっていた。
「でも、ゆえっちは?あの後無事に帰れたのかな…シネマ村でガス爆発があったらしいし」
「途中ではぐれちゃたし…」
朝倉が携帯のニュース欄を見て心配そうに呟く。のどかは自分の親友が事件に巻き込まれていないか心配で仕方なかった。
「な~に大丈夫っしょ!夕映は私達よりしっかりしてんだし!」
「ハ…ハルナ」
ハルナは心配していないような様子でいた。

「関わるな…どういうことですか?」
夕映は千雨に反論していた。
「お前とは気が合うからな、なんとなく分かるんだ。お前は日常に退屈している。だからこの事を話せば四十八九、私に関わりたいと言うだろうな」
「…」
図星なのか、黙ってしまう夕映。
「だがな、一度こっちに来れば…バカみたいな日常にはもう戻れなくなる。いつ死んでもおかしくない。今ならまだ間に合う、後悔したくなかったら引くべきだぜ?」
「しかし!」
「綾瀬、お前は今、人生で最大の決断をしなきゃならない。進むか引くか。引けば平和に過ごせる。だが進めば戦いの道。…お前がどっちの住民かなんて一目瞭然だろうが。それによ…覚悟はあるか?自分の命を賭ける覚悟が」
「…それは」
千雨は以前、雪乃に言われたことをそのまま夕映に言う。
「まあ、今すぐに決めろとは言わない。ゆっくり考えろ」

それだけ言うと、千雨は部屋を出た。

「オリジナルインベーダー!?あいつが!?」
影山との連絡で千雨は初めて自分が戦った敵がオリジナルインベーダーであることを知った。
「ああ、信じられないが…事実だ。そいつは魔法を使うらしいが間違いない。オリジナルインベーダー、悪魔令嬢だ」
衝撃の事実に驚いていたが、それよりも驚いたことが。
「影山さん、魔法知っているんですか!?」
「ん?…ああ。知り合いに魔法使いがいてな」
…この人の交友関係がわからない。千雨はそう思った。
「それでだ。恐らく悪魔令嬢がまた襲ってくる可能性も否定できない。だから、そっちにベテランのゲートキーパーを派遣することにした。まあ、君はそのサポートをするのが今後の方向性だな」
自分が信頼されてないのが悔しいがとりあえず聞いておく。
「まあ、話は以上だ。では」
そう言うと影山は通話を切る。
「…」
何かとんでもない事態になるのでは…そんな予感がした。

夕食を食べ終えた千雨は一人、UP-93の座席に座りながら夜風に当たっていた。と、ここで。
「あー!いたいた!」
大声にビクッと体を震わせて、辺りを見渡すと…千雨の数メートル先に前髪の一部を赤く染めている、一人の女性の姿が。

「あの…どちら様で？」
「…話は聞いているだろ？あんたの助っ人だよ。あたしは『寸断』のゲートキーパー、太刀川里香だ。よろしくな！」
「よ…よろしくお願いします」
挨拶を交わしながら、千雨は里香を観察する。…確かに強そうだ。
彼女からは多くの戦いをくぐり抜けてきた勇士が見える。
「ま、今日は確認と挨拶に来ただけだからな。特にこれといって…！？」
ビービー！
突然、ＵＰ－９３のタッチパネルから警告音と地図が出現した。
「な、なんだ！？」
里香は訳も分からず喚くが、マニュアルを読んでいた千雨はこれが何を意味するのかはっきり分かった。
「インベーダー出現！？場所は…」
とりあえず地図を縮小していって場所を確認。一緒になって覗きこんでいた里香はこの場所がどこなのか分かったらしく、思わず声をあげた。
「マジかよ！？しかもこのＩＰＷ…なんで…よりによって総本山にオリジナルインベーダーが！？」

千雨はオリジナルインベーダー悪魔令嬢を倒すために総本山に行く準備をする。部屋に戻って、ゲートキーパー用の装備を整える。部屋には誰もいなく、他のメンバーに言い訳する手間が省けた。
旅行カバンから装備を取り出すが…そこで一つの新装備を目にする。
「ゲートガンか…」
メガネが作ってくれた新装備。自分のスタイルに合わずに使う機会がない武器だったが。
「…」

しばらくそれを見つめて…それを疑似ゲートが入っているリュックにしまう。使う機会はないかもしれないが持っていて損はないだろう。

「何が起こるか分からないからな…」

そう呟き、部屋を出ると…。

「千雨さん、待って下さいです」

綾瀬夕映が部屋の前に立っていた。その顔は何か決心した顔だった。

「…何だ？」

「先ほどこっそり千雨さん達の話を聞きました。総本山にシネマ村の女性が現れた、と」

「ああ」

聞いていたのか、もっと周りに注意すべきだったな。

「総本山にはのどかやハルナがいるです。インベーダーに巻き込まれる可能性も高いです」

「だから助けに行きたい…か。覚悟はできたのか？」

「はい。親友を見捨てる訳にはいきませんから」

千雨はもう一度夕映を見た。

彼女の目からは迷いが消え去っていた。

「行くぜ、綾瀬」

「はいです」

この日、新たなる戦士『防壁』のゲートキーパーが誕生した。

第１９話　力と覚悟（後書き）

次回、京都本山で戦います。
お楽しみに！

第２０話　総本山ＳＯＳ（前書き）

今回は夕映が頑張ります。

第２０話　総本山ＳＯＳ

本山に行くことになった夕映は里香に自己紹介をした後、早速出発しようとしたが…。
「…それで、千雨さん。これは何です？」
「バイク」
「それはわかるです！私が言いたいのはどうして千雨さんがバイクにまたがってハンドルを握っているのかを聞きたいんです！」
夕映はＵＰ－９３のサイドカー部分に座りながら叫んだ。夕映はてっきり里香がハンドルを握ると思ったのだろうか、まさか自分と同学年の千雨が動かすとは思っていなかったらしい。
「なんでって…私がこのバイクの持ち主だからだよ。ほら、偽造免許証」
千雨の口からとんでもない単語が飛び出した。千雨は夕映にちらちらと免許証を見せる。
「まあ、確かにあたしが動かすほうがいいかもしれないがよ…後輩が貰った物を先輩のあたしが使うのは筋じゃねえだろうが」
千雨の後ろで座りながら里香が言った。不良みたいな雰囲気だな、そう夕映は思った。
「んじゃ、行きますか」
ブルルン！ゲートエンジンがうねりをあげ…ＵＰ－９３は総本山に向けて発進した。

「チッ、本山に入られてしもうたか…これでは手を出せんわ」
千草は本山が見える木の上からそうごねた。
「そう？私だったらイケるよー？」
「あんたは手をだすな…化け物が」

千草は冗談半分で言ったらしいが悪魔令嬢の逆鱗に触れるには充分すぎた。
ビッ！
千草の眼球に爪を突き立てた。
「生意気なこと言わないで…小物野郎。目玉をえぐるよ？」
千草は腰を抜かしてしまい、悪魔令嬢は千草をゴミのように見つめて、元の位置に戻っていった。
「そ、そこの新入り…フェイトやったか？あんたはどや？」
「…僕に任せて下さい、すぐに済ませますよ」
フェイトと呼ばれた白髪の少年は、そう言うと水を用いた転移呪文で姿を消した。悪魔令嬢も同じく指をパチンと鳴らすと姿を消した。

「さっきのはやりすぎだ…気をつけてくれ」
「はーい」
本山の結界を上手く突破した2人は山道を歩いていた。
フェイト達の作戦はこうだ。まずはフェイトと悪魔令嬢が本山に侵入。そこにいるであろう巫女や兵士、護衛をフェイトの得意魔法の『石の息吹』で石化させ、戦力を大幅にダウンさせる…といったものだ。後は膨大な魔力を持つこのかを誘拐して、千草の元に。
こういった感じだ。
「ねえフェイト。あの2人のゲートキーパーは本山にいるかな？」
「まあ…その可能性は高いね。どちらも魔法使いやその従者とかなり親しいらしいし」
「じゃあ…あの2人を見つけたら石化させちゃダメだよ？」
悪魔令嬢はフェイトにそう言って、自分の爪をちらつかせた。
「はいはい…ただし向こうが手を出してきたら反撃はさせてはもらうよ。…にしてもそこまでゲートキーパーにこだわるのは君達インベーダーの敵だからかい？」

「まあね。…おっ、灯りが見えた！あそこが目的地か」
悪魔令嬢の眼下には灯りの灯った建物が。ここまで１人の見張りにも会わずにあっさり来れてしまった。
総本山の結界を過信しているのか、建物周辺にも見張りが１人もいなかった。
「バカだね～、見張りがいないよ。これじゃ襲ってくれって言っているもんじゃん！じゃあ私があいつらをあぶり出すから石化頼むね～」
「了解」
「魔法の射手　風の３矢！んでもって…魔法の射手　火の３矢！」
その瞬間、風の矢と火の矢が悪魔令嬢の手から飛び出した。
そして、２種類の矢は空中でぶつかり合い…バーンと爆発する。
爆発の数秒後、すかさずフェイトが廊下に立ち、石化呪文の詠唱を開始する。
「ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲイト　小さき王　八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ　時を奪う　毒の吐息を」
爆発音に気づいたのか、わらわらと巫女が飛び出して来た。
「石の息吹」
詠唱が完了した途端、灰色の霧が廊下を埋め尽くす。
そして、その霧が晴れ、その場に残ったのは…石像になった巫女達が冷たく立ち尽くしていた。

京都市街の道路を突っ走る黒いバイクが一台。
「おい、このバイクもっとスピード出ないのか！？間に合わないかもしれねえんだぞ！」
「仕方ないんですよ里香さん！このバイクは市販のバイクとスピードが変わんないんです！美羽さんのバイクとは訳が違うんです！」
里香が後ろで千雨を怒鳴りつける。千雨はＵＰ－９３を運転するの

に必死で、里香の返答にも怒鳴り気味になってしまう。
「た、太刀川さん！もう少しで本山に着くですよ！」
ここで夕映がパネルのナビを指差し、なんとか気をそらせる。
「お…そうか。それじゃあ、まずはお前らの戦力が知りたい！お前らが使うゲートの種類を教えてくれ」
突然、おちゃらけた空気からシリアスな空気になった。
「…！私は風と雷を操るゲート『風雷』ですけど…」
「わ、私は盾を操る『防壁』です」
突然の変わりようにビックリしながら、2人は慌ててゲートを説明する。
里香はゲートの特性を聞くと、何かブツブツと呟き始めた。
「となると綾瀬は後方…長谷川は中間か…あたしが前方で…ブツブツ」
バイクは山道に入ってさらに加速させる。
と、ここで…。
「グルル…！」
「…ん？」
里香は何かの声を聞こえた気がした。
しかし、周りには何もない夜道。野犬か何かか？
「ガルァ！」
そしてそれは高台から勢いよく飛び降りた。
「！」
里香はそれの正体に気づき、慌てて千雨が握るハンドルを引ったくり進路を変える。
「ガアア！」
ドシン！アスファルトの道路を陥没させ、千雨達の後ろに全長7メートルほどのティラノザウルス型インベーダーが姿を現した。
もし里香が気づかないでそのまま進んでいたら、今頃三人とも潰されてミンチになっていただろう。
「な…何なんです！？あんなサイズのインベーダーなんて…」

「ありゃ新型か？どんだけの仲間を喰ったんだか…しっかしヤバいなこの状況」

夕映は初めて、しかも巨大なインベーダーを見てビックリしていた。

一方の里香はバイクに乗っているこの状況をヤバいと感じていた。

三人は今、バイクに乗っている。接近戦主体の千雨と里香、防御型ゲートの夕映ではバイクに乗ったまま戦うのはあまりにも武が悪い。

しかも時間が押してる中、降りて戦う訳にもいかない。

「ちっ…ゲートオープン！」

里香は数少ない遠距離主体武器であるブーメランを『寸断』のゲートで作り出す。

「おらぁ！」

ブン！思いっきりブーメランを振りかぶってブン投げるが…。

ガキィン！多くの同士を喰って防御力が上がったからなのか、インベーダーはブーメランを自分の体であっさり弾き返した。

「ウソだろ！？あたしの『寸断』をくらって無傷だなんて…」

戻ってきたブーメランをキャッチして里香はボヤく。その時、千雨は自分のリュックに入れたある装備を思い出した。

「里香さん、私のリュックから銃を！」

「銃？んなもん使ったって…」

「疑似ゲート銃です、新装備の！」

「…！それを早く言え！」

千雨が背負っているリュックからゲートガンと疑似ゲートを一つ取り出す。

「それを綾瀬に！手が空いているのはあいつしかいない！」

「わ、私ですか！？」

里香から投げられたゲートガンと疑似ゲートを受け取り、驚く夕映。

「綾瀬！あたしはあいつの口ん中にブーメランを投げる。だからお前も弾丸を打ち込め！」

「…しかし！」

夕映は戸惑っていた。自分がこんな大役をしてもいいのか?そんなことを考えている間にもインベーダーは走りながら千雨達を追いかけてくる。

「お前しかできないんだよ!あたし達はゲートキーパーなんだ!あいつらを倒せる数少ない人間だ!ウジウジしたってインベーダーに殺されるだけだ!」

里香が夕映に向かって激励を飛ばす。

「…分かったです!外してもしらないですよ!千雨さん、これの使い方は!?」

「まず、ゲートを選択してゲートガンに接続するんだ」

「どのゲートをですか?」

…そういえば夕映に詳しいゲートの説明をしていなかった。いきなり他のゲートのことを言われても分かるはずがないだろう。

「赤熱だ、疑似ゲートの赤熱の欄を選択しろ!」

里香が今必要なゲートを夕映に指示を出す。夕映は急いで『赤熱』を選択して、ゲートガンに送信した。

「そして里香さん、威力は?」

「んなもん決まってる!最大出力!」

ガチャン!出力ゲージを最大に選択して、構える。

「よし!千雨、あたしが止めろと言ったらブレーキを踏んで、一気にスピードを落とせ!」

「はい!」

そして…。

「今だ!」

ギャルルル!千雨は一気にブレーキを踏み、スピードを落とす。

「ガルァアア!」

その瞬間を待っていたのか、インベーダーは一気に距離を詰め、口を大きく開けて襲いかかった。

「かかったですね!」

夕映はインベーダーの口に狙いを定めて引き金を引く。

ドウン！ゲートガンから火炎弾がインベーダーの口に打ち込まれ、インベーダーは後ろに吹っ飛んで、ダメージを与える。やはり体は固くても体内は弱いらしい。

「おりゃあああ！！」

お返しだ、と言わんばかりに里香はブーメランを口に投げ入れ…それは激しく回転しながら夕映が打ち込んだ炎を纏っていく。

そして、ブーメランは打ち込んだ炎を纏いながら、インベーダーを体内から真っ二つに切り裂いた。

「太刀川流奥義…火炎風車！…なーんてな」

手元に戻ってきたブーメランをパシッとキャッチして里香はニヤリと笑った。

「待て！お嬢様を返せ！」

フェイトが多くの巫女を石化させた後、更に詠春をも石化させてしまう。

なんとか無事だったネギ、アスナ、刹那はフェイトと戦うが、返り討ちに。結果、このかが敵の手に陥ってしまう最悪の展開に。

「アンタ達、そこまでよ！」

「このかさんを離して下さい！」

ネギ達は千草を追いついた。

「チッ、うるさいのがまた増えよった…まぁええわ、あんたらにお嬢様の力の一端を見せたるわ」

そう言うと、千草はこのかに呪符を貼り付ける。

「オンキリキリヴァジャラウーンハッタ…鬼達よ、そこのガキ共を殺るんや！」

千草が呪文を唱えると、周囲から鬼などの様々なバケモノが次々と召喚されていった。千草はこのかの強大な魔力を利用して鬼達を無理矢理召還したのだ。

「こんなのアリ！？」
「せいぜい死なんように頑張りや、ほなさいなら～アハハハ！」
この場を鬼達に任せると千草達はそのままこのかを抱えて、去っていった。
「フンッ、相手はガキかいな」
「悪いな嬢ちゃん達、よばれたからには手加減はナシや…怨まんといてや」
「ほな、ぼちぼち行くで！」
鬼達がやる気満々でいると…。
「ハイハイ！ストップストップ！」
一人の女性…悪魔令嬢がパンパンと手を叩いて、のん気な声を出しながら、鬼とネギの間に割り込んでくる。
「…なんや、女？今ええとこなんや！」
「分かってるって！だから…」
そう言うと、悪魔令嬢の腕や足、体の至る所からボコボコと数十体のインベーダーが出現する。
「みんな死んじゃって？」
グサグサッ！数十体のインベーダーは自分の体から触手を出し、鬼達を補食していく。
「ギャアアアア！！」
それは地獄絵図に等しい光景だった。百体以上はいたであろう鬼がインベーダーに補食されていく。中には一体の鬼を多数のインベーダーが奪い合うのもあり、辺りに阿鼻叫喚の声が轟く。それを聞いても何も感じないインベーダー達は補食の手を止めない。
アスナやネギは込み上げてくる吐き気を口に手を当てて必死で押さえていた。裏稼業を営む刹那すらそれは例外ではなかった。
そして刹那は瞬時に理解する。あれは…自分達が手を出していい者じゃあない、と。
「やっぱ、インベーダー同士じゃないと効率悪いなぁ…。ま、いいか！」

そう言って女性はニッコリ笑いながらこちらを振り向いた。
「ねえ…正直に答えてね？」
ゴキゴキッ！数十体のインベーダーは腹部から重火器を取り出し、一斉にこちらを向ける。
「ゲートキーパーの…メガネとデコチビの女、知らない？」
今、３－Ａ防衛隊の長すぎる夜が始まった…。

第２０話　総本山ＳＯＳ（後書き）

悪魔令嬢をヤバげに書いて見ました。気分悪くした方、申し訳ございません。
さて、次回から死闘が始まります。
お楽しみに！

第２１話　異星人の力（前書き）

今回はインベーダーと戦います。
今作のインベーダーの強さがどれくらいか分かるかも…。

第２１話　異星人の力

「…ねぇ、聞いてる？」
悪魔令嬢の声はこの状況に呆然としているネギ達には届かない。
辺りには、数十体のインベーダーが腹部から重火器を出して、それをネギ達に向けている。更に奴らは千草が呼び出した百体ばかりの鬼達をあっという間に補食し、その力を吸収した。
そのグロテスクな光景をまともに見てしまったのだから、呆然とするのは無理もなかった。
「兄貴、兄貴！」
「…！ラ、ラス・テル　マ・スキル　マギステル！逆巻け春の嵐我らに風の加護を！」
メンバーの中で、真っ先に意識を取り戻したカモが慌ててネギに向かって叫ぶ。
それに気づいたネギは、この状況で最も有効な防御呪文の詠唱を開始する。
「ふーん、作戦会議をするのね。ま、いいけど…」
悪魔令嬢は詠唱段階で、ネギが使おうとしている呪文とその目的を見抜き、ポツリと声を漏らす。
「風花旋風　風障壁！！」
詠唱が完了した途端にネギ達を包み込むように竜巻の障壁が作り出される。
「この障壁は2、3分しか保ちません！今の内に作戦を！」
「作戦て言っても…あいつらとどうやって…。ねえ、メガネとチビデコって？」
「ゲートキーパーでメガネは…長谷川さんですね。チビデコと言ったら…もしかしたら綾瀬さん？」
アスナと刹那は、悪魔令嬢が言った言葉を思い出し合っていた。千雨がゲートキーパーなのは分かるが、何故そこに夕映の名前が出て

くるのだろう？疑問は尽きない。
「問題はまだあるぜ。オレ達はインベーダーの倒し方が全く分からないんだ。これじゃあどうしようも…」
カモは悔しそうに唸った。こんなことになるんだったらインベーダーを舐めないで、ゲートキーパーである千雨にでもインベーダーのことを詳しく聞いておくべきだった。
ネギの機転でなんとか時間は稼げた。…が、結局それは目の前にある絶望をほんの数分だけ先伸ばししただけにしかすぎなかった。

「…本山のＩＰＷが増えた！？」
恐竜インベーダーを退け、本山まで後１キロ弱まで迫った千雨達。しかしＵＰＩ９３のタッチパネルから警告音が出たかと思うと、本山のＩＰＷ反応が一体から数十体に増加していた。
「ヤバいぜ、こりゃあ。オリジナルの奴、仲間を呼んだんだ」
里香は後ろからパネルを覗きこんで、焦るように言った。それを聞いた夕映は親友の行方がとても心配になる。
「そ、それじゃあ…のどかやハルナも…」
「分からん。ただ、最悪な事態になる覚悟はしておいてくれよ」
里香の非情な発言に夕映は泣き出しそうになる。
（もし生きているなら、攻撃とか余計な事をするなよ…！）
運転している千雨もネギ達を心配する。彼女達が戦場に介入するまで後もう少し…。

風の障壁がネギ達を包み込んでから２分近くが立った。悪魔令嬢は腕を組みながらじっと風の障壁を見つめていた。
（風花旋風　風障壁はそれほど長くは持たない呪文。多分出てくる

ならそろそろ…）

そう考えた途端、風力が弱まり、中からネギ達の姿が。

「雷の暴風！！」

障壁の中で詠唱を完了していたネギは自分が今使える最大呪文をインベーダーに向かって叩きこむ。雷を纏った竜巻は一直線に放たれて、数々のインベーダーを吹き飛ばす。

「先生、今です！」

「はい！」

ネギは杖にまたがって低空飛行を開始。このかが連れ去られた地点まで飛んでいこうとするが…。

「ふーん、結構悩んだのにくだらない作戦を思いついたのね」

ドカッ！悪魔令嬢はネギの首を吹き飛ばすようにラリアットをぶちかまし、ネギは空中で何回転もして地面に落ちる。

「ネギー！」

アスナの悲鳴が辺りに響き渡る。しかもアスナを更に絶望に叩き落とす出来事が…。

「そんな…」

『雷の暴風』はネギの使える攻撃呪文の中でも最強の呪文だ。あのエヴァンジェリンの『闇の吹雪』にも打ち勝った呪文をインベーダーはまともにくらった。無事では済まないはずだ。…それなのに、インベーダーはバリアを展開してネギの攻撃を防いでいた。倒せたり吹き飛ばせたのは前方の数体のみだった。

（あいつが考えた作戦が…）

ネギが立てた作戦はこうだ。まずは自身が使える最大攻撃呪文『雷の暴風』で多数のインベーダーを吹き飛ばす。そしてその攻撃で突破口ができた瞬間、ネギが千草のいる所まで杖で飛んで行く。そして先ほど仮契約した刹那とアスナを仮契約カードの召還機能で呼び出し、一気に千草を叩く。

何もインベーダーを倒さなくても良い…突破口さえ開けば…。

しかし現実は非情だった。ネギの呪文はその突破口すら開かなかっ

たのだから…。
「…にしても今の攻撃は凄いわね。ガキがやる攻撃じゃないわよ、あれ。まあ、あたしの子を何体か倒せたのは誉めてあげるわ」
パチパチと拍手しながら悪魔令嬢は笑った。ネギは吹き飛ばされても意識だけは失わず、この状況を打破するために思考を巡らす。
（あの人は女性だ。乱暴はいけない…だけど！このかさんをさらう奴の仲間なら…！）
ガシッと杖を掴んで、自分自身に魔力を送り込む。
「契約執行１０秒間！ネギ・スプリングフィールド！！」
魔力を込めた拳で悪魔令嬢の脇腹を狙うが…。
「甘いわね…女だからって手を抜くなんて」
悪魔令嬢はあっさりそれをかわして、ネギの胸に手を当てる。
「ねえ、僕？今、私を気絶させようと思ったでしょ？でもね、この世界に入るんなら…女だろうと殺すつもりで本気でかかってきなさい。でないと…」
ドンッ！胸に当てた手から無詠唱で魔法の射手　雷の一矢をネギに叩き込む。
「ゴフッ！」
零距離でをくらってネギは口から血を吐き出す。
ガクッと地面に崩れ落ちたネギの頭を悪魔令嬢は思いっきり踏みつけた。
「死ぬわよ」
「…！」
その冷たい声はネギやアスナ、そして刹那を恐怖に落としいれる。
「「あ…うあああああ！！」」
その恐怖を振り払うようにアスナと刹那は悪魔令嬢に攻撃する。せめて一太刀…とでも言うのだろうか。冷静に考えれば今のアスナ達には悪魔令嬢になど適いっこないのだが、ネギがやられた焦りや恐怖が彼女達から冷静な思考を奪ってしまった。
「あああああ！」

アスナは自分のアーティファクト『ハマノツルギ』を思いっきり振り下ろした。
「戦いの歌」
悪魔令嬢は身体強化呪文でアスナの攻撃をあっさり素手で止め…。
「ふんっ！」
ハリセンモードのハマノツルギを真っ二つにへし折った。自分の武器をへし折られて呆然とするアスナを悪魔令嬢は足蹴してぶっ飛ばす。
「神鳴流奥義！斬岩剣！！」
刹那は自分の得意技で悪魔令嬢に斬りかかるが…。
ガキィン！悪魔令嬢は刹那の剣を指一本で防ぐ。
「あんたが一番強いと思ったんだけど…剣士が冷静さを失っちゃったらおしまいだよ」
そして刹那の剣『夕凪』をがっしり掴んで、そこから魔力で作った高出力の電流を流す。
「…うわあああ！」
ガクッと崩れ落ちた刹那と踏んでいたネギをアスナと同じように足蹴して、アスナが倒れている地点にぶっ飛ばされた。
「おい、兄貴！兄貴！」
最後に残されたカモが気絶しているネギに必死に呼びかける。
「や、やいテメェ！一体何の為に兄貴の邪魔するんだ！？」
「面白いから」
「…！」
カモは勇気を振り絞って悪魔令嬢に質問するが、あっさりと返される。
そのあまりの行動理由にカモは愕然とせざるを得なかった。
「ま、私としてはあんたらの事情なんかどうでもいいの。なーんかもう飽きちゃったし…ここで死んで？」
そう言うと悪魔令嬢は、手に巨大な炎を集め、それをネギ達に向けて放った。

（オレっちは何も出来なくて…いっつも兄貴や姐さんの迷惑ばっかりかけて…）
ぐんぐん近づいてくる炎を目の前にして、カモは驚くほど冷静だった。
（まあ…ここで終わりか）
カモはゆっくりと目を閉じてそこに立った。そしてもうすぐ当たるといったところで…一つの奇跡が起きた。

「ゲート…オープン！！」
その言葉の後、カモの目の前に巨大な円形の盾が出現。
そしてカモ達に当たるはずだった炎をあっさり防いでしまった。
と、その場に近づいてくる人影が三人ほどいた。
「ギリギリでしたね…私の『防壁』が距離が離れていても張ることができて良かったです」
「インベーダーがぞろぞろいるな、おい」
「綾瀬、倒れている面子に『生命』のゲートを」
そう、彼女達は門の守護者。異次元から膨大なエネルギーを操ることが出来る存在。魔法使いでも陰陽士でもない存在。
悪魔令嬢はようやく待ち望んでいた人物に会えて、本当に嬉しそうに顔をニタリと歪ませた。
「そう…やっと現れたわね…ゲートキーパー！！」
人はその門を守る守護者をこう呼ぶ。
『ゲートキーパー』と。
『防壁』のゲートキーパー、綾瀬夕映。
『寸断』のゲートキーパー、太刀川里香。
そして『風雷』のゲートキーパー、長谷川千雨。
この絶望を振り払うことが出来る三人の少女達が、本山の戦いに参戦したのだった。

第２１話　異星人の力（後書き）

遂にインベーダーを倒せる存在、ゲートキーパーが参戦。
次回はＶＳインベーダー戦です。お楽しみに！

第２２話　疾走する力（前書き）

今週のマガジンは、千雨がメインのお話でした。…満足！！

第２２話　疾走する力

千雨達は悪魔令嬢に１０メートルの距離まで近寄って、ピタリと歩を止めた。
里香もいつでもゲートを開けるようにして、夕映は千雨と里香から貰った疑似ゲートの『生命』を使ってネギ達を治療していた。
「カモ、状況説明！」
千雨は木刀の刀身を伸ばして、ちらりとカモを見る。カモは何を言われたのかを理解するまで、少し時間がかかった。
「あ…ああ！このかの姐さんが敵にさらわれちまって…」
「他のメンバーは？」
「み、みんな石化しちまった…」
「…死んではいないんだな？」
とりあえず千雨は現状確認を完了した。
石化はされたものの死人は出てはいないのは、不幸中の幸いだった。
と、ここで…。
「ん…ゆ、夕映ちゃん？」
「あ、アスナさん駄目です！まだアスナさんの治癒は済んでいないのですよ！」
悪魔令嬢にぶっ飛ばされた時に出来た傷が痛むのか、アスナは開口一番に「うっ」と呻いた。
すかさず夕映は『生命』をアスナに使う。
パアアッと温かい光が降り注いで、アスナの傷をみるみるうちに塞いでいく。
「…あれ？痛みが軽く…」
「私達が使うゲートにも色々な種類があるです。今、私が使ったのはあらゆる者を癒やす『生命』のゲートです」
そしてアスナに続き、ネギや刹那も意識を取り戻す。
「ん…くっ…」

「…はっ！綾瀬さん！？」
気がついた刹那はガバッと立ち上がり、足元に落ちていた夕凪を手にする。
「おいおい…落ち着けよ。さっきまで倒れていた奴がする行動じゃねえぞ。ま、それどころじゃないんだろうが…」
里香は立ち上がった刹那を見ながら呆れるようにため息をつく。
「早く…このかさんの所に…」
ネギも杖を持って、ヨロヨロと立つ。
「まあ、待ってろ。あたし達が突破口を開いてやっから」
そう言うと里香はニヤリと笑って、無言で足元にゲートを開く。足元のゲートから2本の刀を作り出し、それを握りしめた。
「危険です！僕らも…」
「だったら、そこで見ていろ！あたしらを誰だと思っている？あたしらはゲートキーパーだぜ？」
こんな時まで他人を心配するネギをちらりと見て、里香は笑う。
夕映も両手でゲートガンをしっかり構え、千雨も木刀と疑似ゲートを構えた。
「…準備満タンってとこね。んじゃ、やりましょ！」
悪魔令嬢の命令を受けて、静止していたインベーダーは千雨達を倒すために、動き始めた。
「行くぜ、後輩！」
里香の声が辺りに響いた。今、戦いが始まる。

里香は両手の刀を握りしめて、インベーダーめがけて一気に突っ込んでいった。インベーダーはそんな里香を狙い撃つため、一斉に腹部の重火器を放つ。
だがあろうことか、里香は逆に光弾を避けながらインベーダーに接近していく。

インベーダーは一発も当たらないことに焦りを感じたのか、更に多くの光弾を放つ。が、それでも里香には当たらない。
「甘い！」
そして里香は光弾の弾幕を抜け、インベーダーに取り付くと瞬く間に両手の刀で斬りつけ、４体のインベーダーを撃破する。
「ぬるいんだよ！」
接近してしまえばこちらのもの。次々とインベーダーを切り刻む。
バラバラになったインベーダーはコアを残して消え去ってしまう。
（コア残すってことはやっぱ、普通のインベーダーと変わんないのか…。ま、当然か…！？）
「後輩！そっちに何体か向かっているぞ！」
既に半数以上を倒した里香を殺すのは無理と判断したのか、残りのインベーダーは千雨と夕映に向かって走っていた。
「ヒィィ！き、来たぁ！」
カモは接近して来たインベーダーに脅えながら、ネギの肩に登る。
夕映はそんなカモ達の前に立ち、『鉄壁』を使ってネギ達に攻撃が当たらないようにする。そしてもう一つ疑似ゲートを発動する。
「…千雨さん、約５秒後にインベーダーが接近して、攻撃を仕掛けるです！」
夕映は千雨に向かって叫ぶ。
夕映が今使ったのは『知覚』のゲートだ。
『知覚』は数秒後に相手や周りが何が起こるかを予測することができるゲートであるが…このゲート単体では予測している最中にどうしても隙ができてしまい、インベーダーに攻撃されやすくなってしまう。
そのため、一人ではかなり使いにくい部類に入るゲートなのだが…
千雨は後方支援をしている夕映に、これを使わせることによって、この弱点をカバーしていた。
「サンキュー、綾瀬！」
クルクルと疑似ゲートを弄び、千雨は夕映にお礼を言う。

千雨は疑似ゲートに新たに追加された『氷結』を選択した。
「疑似とはいえ…北条のゲートは強えぞ！」
千雨はインベーダーに疑似ゲートを投げつけると、すぐさまゲートが発動し、インベーダーをあっという間に凍らせて撃破する。
「真空ミサイル！」
そして、その『氷結』の攻撃を逃れたインベーダーを千雨は見逃さずに撃ち抜く。
「ふーん、やるじゃん」
悪魔令嬢は一人、岩場に座りながらゴネる。
（まずはあの前衛の赤メッシュが突っ込む。んで、メガネが中間役…臨機応変に対応できるポジションね。チビデコは後方支援役か。シンプルな戦術だけどそれ故に隙が少ない…）
この戦術は移動中に里香が提案した物だ。実践初の夕映に小難しいことなどできるはずがない、と単純明快な戦術を提案したのだが…夕映はすぐにＯＫを出した。
そして、ものの2、3分でザコインベーダーは全滅。里香は刀を地面に突き刺し、ネギ達に向かって叫んだ。
「今だ、チビメガネ達！行け！」
「は、はい！」
ネギとアスナは急いで杖にまたがり、飛行を開始。刹那は杖にはまたがらずに走りだした。
「…」
悪魔令嬢は既にネギ達への興味を失ったのか、特に何をする訳でもなくネギ達を　見送った。
そしてそれが遠くに行ったのを確認して、悪魔令嬢は岩場から降りた。
「よお、オリジナルインベーダー…いや、悪魔令嬢」
里香は地面に刺していた刀を抜いて、悪魔令嬢に突きつける。
悪魔令嬢はようやく満足する相手とめぐり合えたためか、ニンマリと満面の笑みを浮かべていた。

「よろしくね、赤メッシュ」
「太刀川里香だ、クソ野郎」
お互い涼しい顔をしながらも、内心はどう思っているのだろうか…
あまり考えたくはない光景だ。
それから里香はちらりと千雨と夕映を見る。
「後輩達…ここはあたしに任せて、チビメガネを助けに行きな。ここら全体、ヤバいことになりそうだからな…。悪魔令嬢、いいだろ？」
悪魔令嬢は「うーん」と、しばらく悩んで結論を出す。
「いいわよー。沢山いるより1対1のほうが燃えるしね」
「と、いう訳だ。お前らバイクに乗ってさっさと行け。お前らがいるんじゃ戦いにくいし」
それを聞いた夕映は里香に反論する。
「里香さん！私だって…」
「ストップ」
里香が言いたいことが分からない夕映の肩を千雨は掴む。
「綾瀬、行くぞ。里香さんはあたしらがここにいたんじゃ邪魔だって言いたいんだ。実際、私達は弱いしな。そんな奴がいたって足手まといになるだけだ」
「…！分かったです…」
まだ戦いに詳しくない夕映には分からないだろうが、普通に戦うのと庇いながら戦うのでは桁違いに難易度が違う。
自分も里香を助けたいのに、自分達の弱さが里香を足を引っ張ってしまう…自分の非力さに夕映は悔しそうに歯を噛んだ。
「じゃあ里香さん…死なないで下さいね」
「お互いにな」
里香はニッ、と笑った。千雨も同じく笑う。
それだけ言うと、千雨と夕映はＵＰ－９３を停車させた位置まで走りながら引き返す。
「それじゃ、初めましょ？本当の殺し合いをね！」

「ハッ、そうだな！」

ネギとアスナはこのかを助けるため、千草が何かをしている祭壇を目指して飛んでいたが、突然杖から叩き落とされてしまう。
そこで昼間、ネギ達と戦った少年、犬神小太郎が再度立ちはだかったのだ。
「ちょっと、早くどいて！私達急いでいるんだから！」
「ハッ！そっちの都合なんて知るかいや！ここを通りたかったら俺を倒してから行きぃ！！」
小太郎はアスナの言葉に聞く耳を持たずにネギも向かって、気弾攻撃を仕掛ける。
「へっ、痛い目見たくなかったら…っていない！？ぐうっ！」
煙が晴れるとネギ達の姿が消えており、突如小太郎は現れた謎の人影に吹き飛ばされた。
…そこには同じ顔をした長身の女性、クラスメイトの長瀬楓が何故か3人立っていた。
…実は小太郎に攻撃したのは本体で、それ以外の2人は分身なのだが。楓の分身体はそれぞれネギとアスナを小太郎の攻撃から助けるために抱えていた。
「助けてくれてありがとうございます…楓さん」
「ん？困った時はお互い様でござるよ、ネギ先生、アスナ殿」
ひょいひょいと地面に降ろされるネギとアスナ。とりあえずはお礼を言うネギ。
「あ、ありがとうございます…でも何で楓さんがここに？」
「夕映殿から不安だから助っ人として来て欲しいと頼まれたのでござるよ」
「夕映さんから？」
と、ここで今まで空気だった小太郎がネギ達に横槍を入れる。

「なんやなんや！そこのでっかい姉ちゃん、戦いの邪魔すんなや！！」
小太郎の発言を聞いて、楓はじっと考える。
「ふむ…その言い分も一理あるやも知れぬが…親友のピンチならば、助っ人も辞さないでござる…さあ、ここは拙者に任せて速く行くでござるよ！」
「ありがとう、楓ちゃん！」
ネギとアスナは杖にまたがって、飛び去って行った。
「さて…甲賀忍者中忍、長瀬楓！参る！」
「さっさと…そこをどくんや！」
女忍者と狗族少年の戦いが始まった。

そして、祭壇に走っていた刹那も途中で行く手を阻まれる。
「うふふ、先輩♪」
「月詠！？くそ…こんな時に…！」
修学旅行初日に戦ってから何故か刹那に強い執着心を持つ剣士、月詠が三度立ちはだかる。
「それじゃ、やりましょ～！にとーれんげきーざんてつせーん！」
「くそ！月詠、そこをどけぇ！」
仕方なく刹那も夕凪を抜き、月詠の剣を受け止める。
（お嬢様…！）
刹那が望まないまま、戦いが始まってしまう…。

（もう少し…もう少しや！もう少しで封印されている鬼神をうちのもんに…）
祭壇には口を塞がれたこのかと鬼神を呼び出す為の儀式を行ってい

る。
彼女は２０年前の大戦で両親を亡くしている。そのため、その原因となった西洋魔術師を憎んでいるのだ。
そして千草は復讐に必要な鍵を手に入れた。
鬼神を呼び出すには、それ相応の魔力や気が必要だ。
残念ながら、千草自身にはその力はなかったが…このかがいるのなら話は別。要は初めに百体以上の鬼を召還したやり方と同じだ。このかの強大な魔力を利用して、鬼神の完全制御を可能にする。
「もう少しで忌々しい西洋魔術師達を…ぐうっ！」
ズキッ！その瞬間、千草の胸が鈍く痛んだ。
（またや…よう分からん発作が…また…）
この肝心な時に千草を悩ませる原因不明の発作が始まってしまった。
他人を憎むたびに…恨むたびに、この痛みはどんどん強くなっていくのだ。
千草は苦しそうに胸を押さえた。
「待てー！」
すると、遠くからあの忌々しい子供西洋魔術師の声が聞こえた。ちらりと見ると、杖にまたがったネギとアスナが最大スピードでこっちに近づいてくるのが見える。
「ふふ…一足遅かったようですなあ。儀式はたった今終わりましたえ！」
千草は胸の痛みを悟らないようにそう言い終えた瞬間、凄まじい地響きがあたりを支配し、湖の水が荒々しく波立つ。
そして轟音があたりに響き、祭壇に全長何十メートルもの光輝く鬼神が復活した。
「二面四手の巨躯の大鬼、『リョウメンスクナノカミ』！京都に堂々復活や！！」

第２２話　疾走する力（後書き）

とりあえず、スクナ復活まで。千草に嫌なフラグを立てるか否かかなーり迷いましたが立てちゃいました。
次回もお楽しみに！

第２３話　鬼神復活（前書き）

修学旅行ももうじき終わり…か？

第２３話　鬼神復活

千雨と夕映はＵＰ－９３に乗って、ネギ達が向かっていった祭壇まで目指して突っ走っていた。
その間、千雨と夕映は一言も言葉を交わす事もなく、道中はとても静かだった。
「…千雨さん」
「ん？」
そしてその長い沈黙を破ったのは夕映だった。
「私は…強くなりたいです。のどかやハルナ、このかを守れるくらいに強く…！」
夕映は悔しかった。自分の親友を守れない自分の弱さが悔しかった。親友の２人は石化、１人は敵にさらわれてしまう。自分にもっと力があれば…そんなことにも巻き込まずにすむことが出来るかもしれない。
「ああ…そうだな」
千雨も悪魔令嬢の一件で、痛いほど夕映の気持ちが分かっている。自分ももっと強くならなければ…そう感じた時、急に地鳴りが響く。
「千雨さん、これは…？あ、あれは！？」
夕映がサイドカーから身を乗り出して祭壇を指さすと、そこには何十メートルもの巨大な鬼神が立っていた。
「ボスキャラってとこか？…早いとこ祭壇に向かわないとな…！」
千雨はハンドルを強く握りしめ、更にスピードを上げる。
京都最終決戦の時は近い。

ガキィンガキィン！！里香は悪魔令嬢の体に刀を使って斬りかかるが、流石はオリジナルインベーダー。なかなかくたばってはくれな

い。
「さっさと…くたばれ！」
「嫌だよーん！」
悪魔令嬢は無詠唱で『戦いの歌』を発動し、里香の刀をむんずと掴む。そして刀を握り潰そうと力を入れる。
「まだだ！ゲートオープン！！」
すかさず里香はゲートを悪魔令嬢の背後に展開。そこから剣山のごとく飛び出た大小様々な刃物で悪魔令嬢を斬りつける。
「やばっ！」
慌てて悪魔令嬢は横飛びでその刃物を回避するが…避けるタイミングが遅すぎたのか全ての刃物を避けるのは不可能だったらしく、体の何ヶ所かに刃物が突き刺さっていた。
「…やるわね、太刀川里香。オリジナルインベーダーの私に傷をつけるなんて。あーあ、この服結構気にいっていたのになあ…」
ブシュ！と腰に突き刺さった小振りのダガーナイフを抜き取る。自分の体より身につけている服の心配をするのも悪魔令嬢らしいといえば悪魔令嬢らしいのだが…。
そんな態度に里香はイライラする。悪魔令嬢は里香と戦っているというより、まるで遊んでいるといった感じなのだ。里香が胸糞悪くなるのも無理はない。
「お前…さっきから本気出してないだろ？魔法だって無詠唱魔法しか使っていないし。あたしを舐めてんのか？」
「いやいやー、違うよ。あんたが強すぎるから詠唱する暇がないんだよー」
「どうだか…ん？」
里香が怪しんでいると…突然、轟音が響き渡る。
悪魔令嬢はその轟音が何なのかを知っているのか、特に驚かない。
「あらら…あの女、あれ召還する為にね…ふーん」
「…おい、お前！何か知ってんのか！？」
里香が悪魔令嬢に向かって怒鳴るが…悪魔令嬢はニヤニヤするだけ

で何も答えてくれない。
「まあまあ…うちの雇い主がバカやっているだけよ。それじゃあ…初めましょ！」
悪魔令嬢は先ほど腰から抜き取ったダガーナイフを逆手に持ち、里香に向かって突っ込んで来た。
「チッ…めんどくせえ！」

「な、何あれ…」
杖に跨ったアスナは何十メートルものスクナを見上げて絶句した。
こんな物を自分達が倒せるのか？
「アスナさん…一気に接近します！」
「兄貴！？」
カモは逃げないで向かうというネギの判断に驚く。
「逃げる…？このかさんを置いて逃げられませんよ！」
「…そうよね！」
ネギは杖を加速させ、祭壇まで近づく。
しかし、祭壇には接近してくるネギを倒すためにフェイトが立ちふさがっていた。
「…ネギ！あいつがいる！！」
「分かっているよ、カモ君！あの少年を出し抜く策を思いついているから！」
「何？マジかよ兄貴！？」
カモは今日、何度目か分からないくらい驚いていた。まさか、こんな短時間で策を考えるなど…。
そして祭壇まで後、１０メートルを切った辺りからネギはその策を開始させた。
「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！吹け　一陣の風　風花風塵乱舞！」

呪文詠唱が完了した途端、強力な風が起こり、湖の水を巻き上げる。
（…目くらましか？）
フェイトは目を凝らしながらネギを探す。
「契約執行3秒間！ネギ・スプリングフィールド！」
ネギは自身に契約執行を行い、勢いをつけてフェイトに近づく。
「そこか」
ネギの声を聞き、フェイトは狙いをつけて、拳を放つ。しかし…。
「杖…？」
なんとフェイトが殴ったのはネギの杖だった。威嚇程度の威力で放った拳は杖を弾き、カランカランと軽い音を立てながら祭壇の床を転がる。
ネギは杖を囮にし、一気にフェイトの後ろに回り込む。そして魔力を込めた拳を放つが…フェイトは涼しい顔で障壁を張り、それを防いだ。
「バ、バカな！？あれだけの威力の魔力パンチをピクリとも動かず障壁だけで…！？」
「…つまらないね、明らかな実力差のある相手にわざわざ慣れない接近戦を選択したのかい？」
カモが絶句している中、フェイトはネギに冷たく言い放つ。
ネギは悔しそうに顔を歪めるが…突然ニヤリと笑った。
「引っかかったね？解放！！魔法の射手・戒めの風矢！」
フェイトの体に手を当ててそう言うと、ネギの手から風が鞭のように唸ってフェイトを捕縛する。
「…そうか、これは遅延呪文か」
「へっ…その通り！おまけに零距離射程なら強力な対魔法障壁でも効力は最小になるって寸法だぜ！！」
フェイトを出し抜いて満足したのか、カモは中指をビッと上げて「ざまあみろ白髪野郎！！」と吠えた。
ネギが今使った手段は遅延呪文と呼ばれる。あらかじめ使いたい魔法を溜めておいて、それを「解放」のキーワードで放出する技法で

ある。
しかし遅廷呪文は扱いが難しく、これを使う魔法使いは少ないのだが…ネギはぶっつけ本番でこれを物にしてしまった。流石は天才。
「ネギ！大丈夫！？」
杖と一緒に飛ばされたアスナは急いで近寄って来て、ネギに杖を渡す。
「はい！…ですが」
強敵フェイトの動きは封じた。
しかし、目的のこのかは千草が呼び出したスクナの肩に乗ってしまっている。
「あはは！ようやくやって来たか、西洋魔術師！あんたらにこのスクナを止めることは不可能や！」
千草は強大な力を手に入れたからなのか顔を歪ませて叫ぶ。
そんなことは分かっている。だが、ネギ達だって「はい、そうですか」と言って止まる訳にはいかない。
そうこうしているうちにスクナはその巨大な腕をネギ達めがけて振り下ろした。ネギはこれを退けるために攻撃呪文の詠唱を始める。
「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！来れ雷精　風の精！　雷を纏いて　吹きすさべ　南洋の嵐　雷の暴風！！」
ネギの手から雷の暴風が飛び出し、スクナの拳に向かうが…スクナはまるで蚊をはたき落とすがごとく、それを拳圧でかき消してしまう。
「ネギ！」
それを見て、慌ててアスナはネギを抱えて遠くへ走り出す。
ドッゴオオオン！！！
そしてネギが立っていた地点にスクナの拳が叩きこまれた。もしアスナが抱えて走り出していなかったら、ネギは今頃祭壇に血の花を咲かせていただろう。
「何よあれ…パンチ一つであの威力？」
千草はネギ達をもはや気にするほどのこともないと考えているのか、

スクナによる追撃はなかった。
と、ここで…。
「大丈夫か先生!?」
先ほどスクナの攻撃を見た千雨がＵＰ－９３を通路の半ばで停めて叫んでいた。
「千雨ちゃん!」
アスナは安心したのか、ネギを抱えて千雨達の下に走る。
「なんとか、ね。でもあれにこのかが…」
アスナはそう言うとスクナを見上げる。
「どうするんだよ…兄貴の最大攻撃呪文をパンチ一発でかき消したんだぞ…オレっち達に勝ち目なんか…」
みんなの気持ちを代弁して、カモがそう呟いた。いくら千草自身が三流の呪術士とはいえ、このかの魔力を利用して召還したスクナはあまりにも強力すぎた。あんなのを倒せるのを倒せる奴なぞ…。
「ある」
「そうだよな…無理だよな…!?えっ!ある!?」
カモは千雨が呟いた一言を見逃さなかった。今、千雨ははっきりと「ある」と肯定を意味する単語を呟いたのだ。
「ホントっすか、千雨の姐さん!これが冗談だったら…」
「できる。こいつを使えば、な」
千雨はコンコン、とＵＰ－９３のボディを叩く。
「黒いバイク…?それがなんの役に…」
ＵＰ－９３を知らないネギがまたもみんなの気持ちを代弁して言った。
「時間がないから簡潔に説明するが…このバイクには私や綾瀬が使うゲート能力を数十倍に引き上げて放出する機能がある。それを上手く使えば…」
「「「「数十倍!?」」」」
千雨以外はゲートエンジンの存在を知らないので、そのとんでもない機能に驚き、叫び声をあげる。

「す、すげえ！大停電の時に千雨の姐さんの実力は見ているが、それの数十倍だと！？いける、いけるぜ！！」
「無論、近衛の奪回やゲートのコントロール、私の防御役など問題はあるが…これに賭けるしか方法はねえぞ」
確かに問題点は山積みだが…もはや頼みの綱はこれしか残っていない。
「それでも十分だ！」

「ふん…何をする気だい？」
一方、フェイトは自分の体にまとわりついていた風を取っ払う。
「僕は誰が死のうが知ったことないんだけど…これも依頼だからね」

「あはは！まずは総本山を火の海にでも…」
ズキッ！…また千草の胸が痛くなる。しかもさっきの痛みよりも強力な。
「…なんなんや、この妙な痛みは？」
この痛みを感じるようになったのは昨夜からだ。
（確か…うちはあの時倒れて…その時から…）
…すると、誰かの囁き声が聞こえた。いや、聞こえたというよりは頭に響いたという方が正しいか…。
（オマエモ来イ…我ラト共ニ…）
暗く冷たい声で、そうはっきりと。

第２３話　鬼神復活（後書き）

ゲートエンジン、始動。実はこれ作者がかなり書きたかったところなので、少し時間がかかるかも…。
それではお楽しみに！

第２４話　３０秒の攻防（前書き）

かなり原作をいじくっています。

第２４話　３０秒の攻防

（刹那さん、聞こえますか刹那さん！）
ネギは刹那の仮契約カードを使って、刹那と念話をとっていた。
（今からあなたを召還します！）
「召還！桜咲刹那！！」

そして祭壇から少し離れた地点で、刹那と月詠は激闘を繰り広げていたが…突然刹那の足元にポウッと魔法陣が出現した。
「？？？」
「悪いな月詠…勝負はまた今度だ」
そしてそれが一瞬輝いたと思うと、刹那はその場から姿を消した。
「あーん、逃げられてもうた」
その場には月詠の残念そうな声だけが響いていた。

通路の床に魔法陣が出現した。そしてそこから刹那が飛び出してくる。
「すいません、遅くなりました！…と、千雨さんどうしてここに？」
「大丈夫だ姐さん！なんせ千雨の姐さんはこの作戦の鍵なんだからな！」
そしてカモの口から簡単に説明される。
「分かりました…ですが問題点がありますね」
急ピッチで立てた作戦なのでムラがあるのは仕方ないのだが、やはり裏に関わっている刹那は気になるらしくそこを指摘する。
まず一つ。ゲートエンジン作動中は千雨が一切の身動きが取れない

ということ。ここをどう守るか、誰が守るかが作戦の正否を大きく分けることになる。
そして二つ目は…。
「近衛を誰が助けにいくか…だな」
千雨がポツリと呟く。
このかはスクナの肩の上に乗っかっている。数十メートルあるスクナの肩だ、誰でもホイホイと助けにいける位置ではない。そのため空を飛べる人材が適切になるだろう。
まあ、それはこの中で唯一空が飛べるネギに任せるつもりだが…すると、刹那が何かを決心したような表情をした。
「…お嬢様は私が救い出します」
「えっ!?」
「私ならあそこまでいけますから」
「でも、あんな高いところどうやって!?」
ネギはもっともな事を刹那に言う。刹那もネギと同じように、何か空を飛べる手段を持っているのだろうか?
「私はお嬢様に…みなさんにも秘密にしていたことがあるんです。でも今なら、あなたたちになら…」
刹那はそう言うと、背中から突然大きな白い翼を広げた。
「…!」
「これが私の正体…私も奴らと同じ…化け物です。でも誤解しないでください!!お嬢様を助けたいという気持ちは本当なんです!でも、私はこの醜い姿を知られて嫌われるのが怖かった!宮崎さんのような勇気ももてない情けない女なんです!!」
刹那は悲痛な声で訴える。そして刹那は固く目を閉じて、次に来るであろう拒絶の言葉をただ待つ。
「なーに言ってんのよ!!」
しかしアスナは拒絶するどころかいつものような勝気な調子で言う。
刹那はきょとんとして彼女のほうを見た。
「そんな翼があってかっこいいじゃない!!今までこのかをずっと

見てきたんでしょ！このかがそんなことであなたを嫌うと思う！？」
「アスナさん…」
「それに私やネギ、千雨ちゃんも夕映もそんなことであなたのことを嫌ったりしないわ！そうでしょ！？」
アスナは刹那への激励の言葉を期待して千雨や夕映を見る。千雨も夕映も答えは決まっているらしく、刹那に向かって言う。
「私はさ、翼の一つや二つで絶交なんて冷たい女じゃないぜ？」
「そうですね。私は少なくとも桜咲さんは化け物になんて見えません」
「…！皆さん…」
刹那は泣きそうになるのを必死でこらえていた。
鳥族のハーフとして生まれた刹那。自分が持つ白い翼は鳥族の間でタブーとされてしまったせいで里を追い出されてしまった過去がある。
そのせいで自分の翼が大嫌いだった。この翼は災いしかもたらさないから…。
しかしアスナ達はそんな自分の翼を見ても拒絶の言葉一つ吐かなかった。
（私はハーフだから…誰とも仲良くできないとずっと思っていた。でも…私を受け入れてくれる人がいる…）
「ふん…青春ドラマはそこまででいいかい？」
冷たい声が辺りに響く。慌てて振り向くと…そこにはネギが放った『戒めの風矢』を解除して、こちらに向かって歩いて来るフェイトの姿が…。
「くそ…せめてもう少し、もう少しだけもってくれていたら…」
よりによって、スクナより厄介な人物が復活してしまった。カモが作戦の修正を図ろうとするが…そこにネギとアスナが立ち上がる。
「ここは僕が行きます」
「違うわよネギ。僕達が、でしょ？」
ネギは杖をアスナはハマノツルギを構える。

「千雨ちゃん、何秒稼げばいいの？」
「…３０秒だ」
「ＯＫ！ネギ、私に契約執行を！」
「はい！契約執行３０秒間！ネギの従者　神楽坂明日菜！！そして…！」
ネギはアスナに契約執行をした後、自分自身にも契約執行を行おうとするが、グラっと倒れそうになるが何とか踏みとどまる。
この１日で数々の魔法を使って、もうネギの魔力は限界を迎えてしまっているはずだ。無理もない話だ。
（今だけ…３０秒だけでも！）
「契約執行３０秒間！ネギ・スプリングフィールド！！」
ネギは鞭を打って、残っている最後の魔力を自分自身に叩き込む。
「大丈夫なのかよ兄貴！もう限界なんじゃ…」
「…大丈夫だよカモ君！皆さん、最後の作戦頑張りましょう！！」
「「「「おう！」」」」
今、ネギ達の京都最大の決戦が始まる…。

千雨はタッチパネルを操作するとＵＰＩ９３が変形を始める。
ガチャンガチャン！僅か数秒の間でバイクから黒色のゲートエンジンに変形が完了する。
「ゲートオープン！！」
いつものようにゲートが出現、その放出するエネルギーをゲートエンジンが吸収し、どんどんエネルギーが増加していく。
そしてネギとアスナはフェイトに向かって突撃していく。
「やれやれ…君達は本当に学ばないね」
実力差がはっきりしているのに何度やっても接近戦をしかけるネギ達に呆れるしかないフェイト。
「くっ…」

そして数分前と同じようにフェイトはネギの拳をあっさり止める。
「スキだらけだよ」ドゴッ！そして拳をネギの懐に入れ、追い討ちをかける。
「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　小さき王　八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ」
「これは…やべえぞ兄貴！」
「その光　我が手に宿し　災いなる　眼差して射よ」
詠唱段階でこの呪文の危険性に気づいたカモが慌てて警告する。
「石化の邪眼」
その瞬間、フェイトの指から石化するビームを出す。
「きゃあああああ！」
通路一帯に放たれた光線がネギ達を襲う。
「彼女達が何を企んでいるのか知らないけど…」
フェイトは遠くでゲートエンジンを作動させている千雨と近くにいる夕映を見つめる。
「ま…止めさせて…」
ガシッ！その瞬間、フェイトの右腕をネギが掴む。
「行かせない…千雨さんの所には！行かせない！」
「そうよね…イタズラの過ぎるガキには…おしおきよっ！」
バシーン！ハマノツルギをフェイトに叩きつける。フェイトは障壁を張るが…ハマノツルギで障壁を叩き割る。
（障壁が！）
その隙を狙って、フェイトの顔面にネギは拳を入れる。
「…や、やった！！」
拳を入れられ、ぶっ飛ばされたフェイトはチラリとネギ達を見る。
（石化の邪眼は当たったはず…なのに彼女にはその痕跡がない。やはり魔力完全無効化能力か？）
「や…やったの？」
しかしフェイトはあっさり体制を立て直し、ネギを睨む。
「…身体に直接拳を入れられたのは…君が初めてだよネギ・スプリ

ングフィールド！」
そしてフェイトはネギに殴りかかる。
「！」
「ネギッ！」
ガキィン！アスナがネギとフェイトの間に割り込み、ハマノツルギを盾にしてフェイトの拳を防ぐ。
「変わった！？」
するとアスナは握りしめているハマノツルギがハリセンから鋼鉄の剣に変わっているのに気がつく。
どうして剣が変わったのか分からないがとりあえずはチャンス。クルンと剣を回転させ、フェイトに斬りかかる。
「！」
フェイトは石で剣を作り、ハマノツルギを受け止める。
「君も同じか…本当に君達は…」
「頭が悪いって？私はバカだから…」
ニヤッとアスナは笑ってハマノツルギに力を込める。
「学ばないのよ！！」
そしてフェイトの剣を粉々に砕き、フェイトの体を横一文字に斬り裂いた。
「…！」
フェイトは体から血が吹き出て、ガクンと倒れる。
「これ以上は厳しいか…離脱させてもらうよ」
フェイトは傷を押さえて、転送呪文で離脱する。
「ハアハア…ネギ、大丈夫！？」
なんとか強敵を退けることに成功したアスナはハマノツルギをカードに戻して、ネギを探す。
「ネギ…その腕…」
ネギはすぐに見つかった。しかし右腕が　…フェイトが放った『石化の邪眼』の影響で石化していたのだ。
「だ、大丈夫です。それより早くここから離れましょう」

翼を広げて、空に舞い上がった刹那は一気にスクナへと接近した。
「!?お前は!」
千草はようやく刹那に気づくが…もう遅い。
「天ヶ崎千草…!お嬢様を返してもらうぞ!」
バサッ!そして刹那はこのかをお姫様抱っこの体勢で助け出す。そして…。
「う…ん?あ…ああ…せっちゃん。へへ…やっぱり助けに来てくれたー」
「お嬢様…どこか痛いところは?」
刹那に抱えられたまま、このかを意識を取り戻した。刹那は千草に無理矢理力を使われたせいで、身体に影響が出ていないか心配した。
「え?あ…あーなんや、あの人の言うとおり気持ちええだけやったわ~」
「お…お嬢様…」
とりあえずは無事なようだ。念のためにあとでもう一度検査しよう…そう思ったときだった。
「…?せっちゃんその背中のは…」
「えっ…あっ…こ…これは…」
マズい…せっかく仲が良くなったのに、自分の羽のせいでまた…。しかしこのかは全くの予想外な言葉を出した。
「キレーな羽…なんや天使みたいやなー」
「…!」

「くう~!お嬢様が…スクナ!こうなったらあのチビを潰すんや!…スクナ?」

千草はイライラしながらも標的を残っている夕映達に向ける。…しかし、スクナはうんともすんとも言わなくなってしまった。
これは当然のことだ。スクナはこのかの魔力を利用して呼び出し、制御をしていた。そのこのかがついさっき奪われてしまった。すなわちそれが意味することとは…。
「グオオオオオン！！！！」
制御不能…暴走してしまうだけである。

「千雨さん！まだなのですか！？」
「もう少しだ！もう少しなんだ！」
夕映は暴走し始めたスクナを見て、慌て始める。千雨は今まで使ったことのないような集中力でゲートの力を押さえつける。
「２つ同時は…無茶だったか！？」
普段、千雨は『風雷』のゲートを、コントロールしやすい『風』と威力が高い『雷』の２つを必要に応じて使い分けている。
それは単純計算で２つ同時に使えば、倍々ゲームの要領でさらに強化されるが…それを可能にするにはかなりの集中力が必要になるのだ。
下手に威力を上げれば千雨自身が耐えきれずに暴発するし、手加減すればスクナを倒すことは不可能になるかもしれない。更にその威力を仮にコントロールすることができても、狙いがそれて当たらないなんてことも…。
「！マズいです…あのデカブツがこっちに…」
ズゥン…ズゥン…。既に千草の命令を聞き入れることなどできないスクナは、ただその力を暴れさせることしかできない。
「グゥ…ガア…」
そして千雨達めがけて口から巨大な光線を放った。
「マズいです…ゲートオープン！」

夕映は千雨を守るために『防壁』を使って、スクナの光線を防ぐ…が、僅か数秒で盾にヒビが入った。
「ぐ…まだです…まだ！」
夕映はポケットから疑似ゲートを2個を取り出す。そして片手で2つとも『鉄壁』に設定し、盾の前に投げる。強化された盾はスクナの光線にも耐えられる盾になる。強化された盾で何とか一撃を防いだ夕映。だが…。
「グゥ…」
スクナは更に強力な光線を放とうとし、その体勢になる。
「下がれ綾瀬！」
千雨が夕映に向かって叫ぶ。
「千雨さん！？ですが…」
「大丈夫だ…！これだけ近づいてくれれば外さない！！」
スクナと千雨の距離は１０メートルを切っている。これだけ近づいてくれればよほどのことがない限り、外しはしないだろう。
「はいです！」
そして夕映は急いで千雨の後ろに下がった。これで準備は整った。
「まとめて…ぶっ飛べえええ！！！」
そして千雨の腕からゲートエンジンによって何十倍に増幅された『風雷』が解き放たれる。
ドッゴオオン！！！
解き放たれたそれは、まるでネギの攻撃呪文『雷の暴風』のようだった。ただしその大きさも威力もネギのとは比べ物にならないくらい強大だが。
スクナも負けじと光線を放ち、空中で互いにぶつかり合う。そして勝ったのは…。
…千雨の方であった。光線をかき消し、一気に風と雷がスクナへとなだれ込む。
「ガアアアアアアア！」
最後のあがきとして出した障壁も突き破り、スクナの体は一直線に

貫かれた。
「ア…ア…」
そしてスクナは徐々にその姿を祭壇の中に吸い込まれていく。
「すごいです…」
夕映はスクナを破った威力を見て、千雨の強さを再認識した。そしてそれは離れた所から見ていた他のメンバーも同じだった。

「千雨さーん！」
ネギ達は千雨のいる通路に着地して、駆け寄る。
「近衛も無事か…この勝負、私達の勝ちだな」
ゲートエンジンに寄りかかっている千雨はネギ達に顔を向けてニヤリと笑った。
ネギも笑うが…ドサッと体ごと倒れた。
「ど、どどどうしたのネギ！？」
「ネギ先生…これは…」
「ひでぇ…右半身が石化を…」
ネギは先ほどフェイトに喰らった石化の邪眼の効果が進み、石化が右手から右半身に広がっていた。
「危険です！ネギ先生は魔法抵抗力が高すぎるため、石化の進行速度が普通よりも遅いんです！首部分まで石化した時点で呼吸ができずに窒息死してしまいます！」
刹那は事態が飲み込めない一同に向かって説明する。
「…そうだ！『生命』のゲート！千雨ちゃん、携帯電話出して！」
「無理だ！こんな範囲の怪我、1つや2つの量じゃ治せる訳ないだろ！私達の持っている疑似ゲートのストックじゃ不可能だ！」
「そんな…」
頼みの綱であった疑似ゲートにも頼れない。すると、このかが何か決心した顔になる。刹那はそれに気づく。

「お嬢様…」
「うん…アスナ…ウチ、ネギ君にチューしてもええ？」
「なっ、何言ってんのよこのか！」
「あわわ、ちゃうちゃう。ホラ…パ…パクテオーとかいうやつや」
こんな状況で何を言うのか？と思ったアスナだが、カモはどこか納得した表情をする。
「そうか、仮契約には対象の潜在力を引き出す力がある！このか姉さんがシネマ村でみせた治癒力なら…！」
「ネギ君、しっかり…」
カモが急いで仮契約用の魔法陣を展開する。そしてその中でネギとこのかの唇が合わさり…辺りに光がほとばしる。
「ん…このか…さん…？よかった…無事だったんですね。」
右半身の石化が解除されて、回復しているネギの姿が。
「良かった…兄貴の石化が解除されて…」
カモは事態が解決したからかホッと一息ついていた。ちなみに仮契約カードもきちんと持っていたが…。

場所は変わって真帆良学園の学園長室では…。
「おいジジイ！まだか！？」
バンバンと床を叩き、うがあと唸るエヴァ。
ネギから連絡を受け、この事態を解決できるのはエヴァンジェリンしかいない…と考えた学園長。
しかしナギがめちゃくちゃに呪いをかけてしまったせいで、呪いの精霊をごまかすのにも一苦労。そのせいでいつまでたっても京都へ飛べない。
「うーむ…無理かも…」
「ふざけるなー！」
エヴァの声が学園長室に響いた…。

第２４話　３０秒の攻防（後書き）

とりあえず、アスナのハマノツルギの剣モードの流れを捏造してしまいました。あれって原作ではいつのまにかあっさり使いこなしていたので、こんな流れでもいいんじゃ？と思って書いちゃいました。まだ修学旅行編は終わりじゃないぞよ。もうちびっとだけ続くんじゃ。

第２５話　本当の敵（前書き）

千草の過去を捏造してしまいました。

第２５話　本当の敵

転送魔法の行き先でフェイトはアスナにつけられた傷口に治療符を貼り付けていると、月詠がこちら側に近づいてきた。
「フェイトはん、大丈夫ですか～？」
「月詠か…まあね」
月詠はそれだけ言うと近くの木に寄りかかった。フェイトは次の治療符を貼り付けてポツリと言った。
「君も早めに切り上げていいのかい？まだ斬り足りないんじゃなかったんじゃないんじゃ？」
「ん～それも良かったんだけど、うちはもっと強く、可愛くなった先輩を斬りたいから…」
そう言うと月詠は顔を赤くして、自分の刀の刀身をペロリと舐めた。
彼女の妄想の中では、刹那は今かなりヤバげな展開になっているらしい。
「…ふう」
フェイトは治療符を傷口からはがして、空を見上げた。空は今夜の戦いが嘘のように綺麗だった。

千雨の一撃でぶっ飛ばされた千草は湖の波にユラユラ揺られていた。
（逃げよかな…）
計画の要だったスクナは倒されてしまった。計画は失敗…これ以上の続行は不可能だった。
（あ…あかん）
そして逃げるか続けるか迷っているうちに、段々と意識と薄れていってしまい、千草は湖に沈んでいった。

千草は湖に沈みながら、幼い頃の記憶が鮮明に蘇っていた。
（走馬灯…うちにお迎えが来たっちゅうことか）
千草のこれまでの人生を一言で表すならば、『復讐』の2文字が最適だろう。
「千草、今日からここがあなたのお家よ…」
幼い頃両親を失った千草は、顔も見たこともない叔父叔母夫婦に引き取られた。2人とも千草を歓迎してくれたが、千草はそれが本心から来るものではないと、幼心ながらはっきりと分かった。叔父叔母はイヤイヤ自分を引き取ったのだ。
数年後、千草は関西呪術協会の門を叩いた。理由は両親が使っていた陰陽術を習いたかったのもあるが、一番の理由は叔父叔母夫婦から離れられるからだ。
そして早速、彼女の実力はどの同年代の子より一目おかれた。
千草にあって他の人になかった物。彼女をそこまで動かした物は…
『憎しみ』だった。いつも千草の心には憎しみがうず巻いていた。
（憎い、黙れ、見てろ、見返してやる…）
他の子達が長期休業で一時帰宅する中、千草はただ1人残って呪術を学んだ。実戦訓練で同年代の生徒に重傷を負わせて大問題になったこともある。
当然、そんなことばかりする千草に友達ができる訳もなかったが千草はそんなことなど、どうでもよかった。自分の両親を殺した西洋魔術師を見返せる力を学べれば、それだけで千草は幸せだった。
更に数年後。千草はどうしようもない壁にぶち当たった。
それはどんな教えがうまい講師にもどうしようもできない問題…気の問題だった。
千草はその気の量が生まれつき少ない。他の生徒の6割程度しか持っていなかったのだ。
無論、気が少ないからといって戦えない訳ではない。剣士のスタイ

ルに切り替えれば千草も十分戦えるのだが…千草はそれを拒んだ。
自分は両親と同じように陰陽術師になりたい、だから戦闘スタイルは変えない…これが千草の決断だった。
しかし現実は残酷、そんな思い一つで渡っていけるほど甘くはない。
やはり気の少なさは大きなハンデとなり、千草はエリートから一気におちこぼれになる。
陰口を叩かれ、そこから這い上がろうと焦るが…それは苛立ちしか生まなかった。
千草は自分の過去を思いだし、フッと笑った。
（このままむざむざ捕まるくらいなら…沈んでいたほうがええかもな…）
このまま岸に上がってもどうせ捕まるだろう。そんな生き恥を晒すのだったらいっそ…。
（憎メ…）
ー！驚いた千草は口から泡を出して辺りを見渡す。しかし当然の如く、辺りには人っこ一人いない。
（我ラヲ受ケ入レロ…力ヲ受ケ入レロ…我ラハ…）

「速くここから避難しましょう」
刹那は凛とした表情でそう言った。
「そうだな…」
疲労困憊な千雨は自分の持っている残り二つの疑似ゲートのうち、一つを自分に向けて『生命』を使い、何とか立てるまで体力を回復させる。
もはやまともに戦うことも難しい面子でいつまでもウジウジ待機している訳にもいかない。しかし…。
「ー！」
刹那は何か殺気に気づいて、バッと振り向いた。そこには水でずぶ

濡れになって下を俯いている女性…天ヶ崎千草が立っていた。
「天ヶ崎千草！貴様まだ…」
刹那は夕凪を持って戦闘体勢に入るが…千草の様子がどこかおかしいことに気がつく。
千草の生気が感じられないのだ…攻撃をする訳でもなく何かをやろうとすることすら見えない。まるで千草が死んでいるみたいな雰囲気に刹那は嫌な予感がした。そしてその嫌な予感は当たることになる。その異変が起こったのは千草が口を開いた時に起こった。
「…除せよ、排除せヨ排除セヨ排除排除排除排除排除排除排除排除排除排除」
「ー！」
あまりの異常な事態に全員が立ち尽くすなか、千雨はただ一人それが何を意味するのかを理解した。
そしてそれは始まった。千草のインベーダー化が…。
「アア…ア…！」
顔の皮膚がボロボロと落ちて、感染段階の無機質な眼球が露わになる。
そして人間の関節では有り得ないほどの動きを手足共に数回したかと思うと、今度は頭部がばっくり割れ、その中から血ともオイルとも分からない謎の液体が大量に吹き出した。
「ひっ！」
このかはそれを見て、悲鳴をあげた。
千雨もそれを見て気分が悪くなる。インベーダーが変化するのは何回か見たが、人間が感染する瞬間は見たことはなかった。しかもさっきまで喋っていた人間が感染したのだ…気分が悪くなるのも無理はない。
そして体がグニャグニャと曲がると…そこには千草ではなく、一体のインベーダーが立っていた。
「排除…排除…」
「くそっ！」

千雨は最後の疑似ゲートを取り立して、パスコードを入力しようとするが…その腕をこのかに掴まれた。
「近衛!?離せ!」
「そ…そんなことしたら…」
あまりの事態に呂律が回らないこのか。
「こ…殺さんでもネギ君やうちの魔法で…」
…そんなことで事が終わるのならばとっくに美羽や里香がやっている。魔法だって奇跡ではない。それが使えるからといってそんなことまではできない。
自分がしっかりしなければいけない。千雨は泣き出しそうなこのかを見てそう思った。
「…無理だ。一度インベーダーになったら二度と人間には戻れない。そうなってしまった人間は…殺すしかないんだ」
千雨は俯きながらこのかに向かってそう言う。このかはずるずると力無く地面に座った。
千雨は疑似ゲートを『赤熱』に設定し、インベーダーに投げる。それは空中で起動し、インベーダーを炎に包む。
「アア…」
火だるまになったインベーダーは力無く床に倒れる。そしてその体は消え、コアだけが残った。
「イ、嫌ヤ…ウチハ…誰…」
そしてそのコアから千草の声が聞こえたかと思うと…コアは粉々に砕けちった。
「…千雨ちゃん…千雨ちゃんは…何と戦っているん?」
このかはそのコアの破片を持って、ポツリと呟く。そして千雨は口を開いた。
「…人間だよ」
泣き出しそうな声ではっきりと。

「ちっ…」
里香は悪魔令嬢に武器を与えてしまったことを後悔していた。悪魔令嬢は使い慣れてないはずのダガーナイフ一本で里香と互角以上の戦いを繰り広げていた。
「ほらほらー！」
ガキィン！ガキィン！里香は刀を使って悪魔令嬢を追いつめようとするが、身体強化した悪魔令嬢にはなかなか上手く当たらない。そして…。
ガキィン！ついに里香の刀が真っ二つに折れ、地面に突き刺さる。
「やばっ！ゲート…」
「甘い！」
この隙を逃さないとばかりに、悪魔令嬢は里香めがけて突進してくる。里香は急いでゲートを開いて対処しようとする。そして…。
ーグシャッ。その胸を貫かれたのは悪魔令嬢だった。
「刀だけがあたしの武器じゃない。全ての刃物は…全てあたしの武器だ」
「爪…か。ゴフッ！」
里香の腕には『寸断』で作り出した爪が装備されていた。
里香はとっさに爪を出して、悪魔令嬢を貫いたのだ。
「じゃあな」
里香は爪を引き抜いて、悪魔令嬢の頭にぶっ刺す。そして数秒後、悪魔令嬢の体は崩れ、ぐちゃぐちゃの物体と化した。
（……戦いは終わったはずだ。なのに…なんだこの違和感は？）
自分は勝ったのだ、もっと喜んでいいはずなのに心のモヤモヤは消えない。
（奴は何故…身体強化や初級魔法しか使わなかった？）
…その疑問はぐちゃぐちゃの物体から飛び出ている、ある物を見たことで更に膨らむ。
「腕…？」

何か嫌な予感がした。里香は腕が汚れることも気にせずに、ぐちゃぐちゃな物体を手で漁る。そしてポツリと呟いた。
「コアが…無い」
インベーダーを倒せば必ず出てくるコアがそこにはなかった。あるのは悪魔令嬢の腕らしき物だけ。
「まさか…まさか！」
途端に最悪の考えが浮かんだ。あいつの目的は…！

「はーい、ごきげんうるわしゅう」
千雨達の前には、里香が倒したはずの悪魔令嬢が手を振りながら立っていた。周りに悲鳴があがるが、なんとか夕映は勇気を振り絞って口を開く。
「…里香さんは！？」
「殺してないから怒んないでよ。今頃、私の分身と戦っているわ」
「分身…？」
悪魔令嬢は軽く答える。
「本山で会った時から分身を使っていたからね。気づかないのも無理ないわよ」
「貴様、何が目的だ！？」
刹那はこのかを庇って叫ぶ。
「お嬢様じゃないわ。私の目的は…」
そう言うと悪魔令嬢は指を千雨に向かって刺す。
「メガネ、あんたよ」

第２５話　本当の敵（後書き）

すり替えておいたのさ！
…さて次回は悪魔令嬢の目的を語る回です。
次回もお楽しみに！

第２６話　最強対最悪（前書き）

結構、独自解釈が多いです。ご注意を…。

第２６話　最強対最悪

「私？」
「そ。正確に言えばあんたが持っているゲートね」
悪魔令嬢は笑いながら千雨をじっと見る。千雨は嫌な予感がしながら木刀を構える。
「里香って子のゲートも厄介だったんだけど、あんたのゲートは一番危険なのよ」
そう言うと悪魔令嬢は自分の服をまくり上げ、胸元を見せる。
「…！」
そこには昼間、シネマ村で千雨が悪魔令嬢に決死の一撃を放った時に出来た傷が痛々しく残っていた。
「再生もこっち優先に回しているのに全然回復しない…つまりあんたのゲートがいかに強力かが分かるのよ。しかも風と雷の２つセット…ほうっておいたら厄介極まりないわ。だから…死んで！」
「！」
そして悪魔令嬢は瞬動を使って、一気に間合いを詰めて千雨の顔を引っ掻く。
（速っ！？）
千雨は条件反射で体をのけぞってかわすが、その際に生じた風で頬がぱっくり割れてしまう。
「何だ今の…瞬間移動か？」
「あんた…瞬動知らないの？呆れた、今までよく生き残れた…わね！」
ギュン！悪魔令嬢は再度瞬動を使い、千雨を襲う。千雨はそれを避けきれずに、右腕から血が飛び散る。
「私と同じ…高速移動って訳か」
千雨は苦痛に顔を歪ませながら、瞬動のカラクリを初見で見抜いた。
瞬動…足に気や魔力を込めて、一気に距離を詰める技術である。ち

なみに千雨もゲートを利用して瞬動まがいなこともできるが、実際他人が使うのを見るのとこの技術の名前を初めて知ったので良く分からなかったのだ。

「さっさと…死んで！」

悪魔令嬢は更にスピードを上げて、千雨の心臓を手刀で狙い撃つ。

千雨は反応できずにただ突っ立っているだけ。

（殺った！）

しかしその手刀が千雨に届かなかった。何故なら…目の前の自分の影から華奢な腕が悪魔令嬢の腕を掴んでいたからだ。

千雨の影から、その腕に続いて全身が現れた。その金髪の少女…エヴァンジェリンは黒いマントを纏っている。

「うちのバカ共が世話になったな…小娘」

エヴァンジェリンは悪魔令嬢の腹にドンッと拳をぶち込み、祭壇の段差までぶっ飛ばした。

「無様だな長谷川千雨。まあ…あの強さならお前でもキツいか」

エヴァンジェリンは開口一番、千雨を見て鼻で笑った。千雨はムッとしながらもそれをこらえる。

すると千雨の影から茶々丸が飛び出してきた。

「遅いぞ茶々丸」

「申し訳ございません、マスター」

「…お前ら勝手に人の影から出入りすんな！」

千雨のツッコミを華麗にスルーするエヴァンジェリンと茶々丸。

「エ、エヴァンジェリンさん！？」

「ちょっと待って！エヴァちゃんがなんでここに！？学園から出られないんじゃなかったの！？」

ネギが驚きの声を上げ、アスナが疑問に思っていることを口にする。

エヴァンジェリンは『登校地獄』の呪いで、真帆良学園から出れな

いのである。それが何故、遠く離れた京都にいることができるのだろうか？

「それですが…強力な呪いの精霊をだまし続けるために今現在複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが五秒に一回『エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押しづけています」

「今回の報酬として明日、私が京都観光を終えるまで、じじいにはハンコ地獄を続けてもらうのさ」

アスナの疑問を茶々丸が解説する。エヴァンジェリンの呪いを解除できないのなら、その呪いをごまかせばいい。

「五秒に一回…それって老人虐待じゃねえのか？」

千雨は修学旅行が終わったら、あのよぼよぼな学園長が死ぬんじゃないだろうか？とふと思うが、エヴァンジェリンはそれをあざ笑った。

「ふん！この事件のそもそもの原因はじじいの見通しの甘さにある！この程度の苦労は当然だ。登校地獄の呪いと学園結界から逃れた今の私の力はほぼ全盛期と同等。反則気味の最強状態というわけさ」

意地悪い顔をしながらエヴァンジェリンは笑う。

「まあ…スクナを倒すだけの退屈な依頼かと思ったが、なかなか面白い奴がいるな」

そう言うと、エヴァンジェリンは祭壇に目を向ける。その祭壇には悪魔令嬢が立ち上がろうとしていた。

（あの子…ちっちゃいけどもの凄い魔力を持ってる。フフフ！面白そう！！）

立ち上がった悪魔令嬢はエヴァンジェリンを見て、興味の対象を千雨からエヴァンジェリンに変えた。そしてスタスタと通路を渡って、ある程度近づいてからピタリと止まる。

「ねえ、あんた強いの？」
悪魔令嬢はその言うと、魔力とＩＰＷが混じった気味の悪いオーラを出す。エヴァンジェリンはそれで全てを確信した。こいつは強い、しかも今まで会った中でもとびっきりの強さだ。
「…ああ強いぞ。これでも賞金首６００万ドルだからな」
「ドル？…まあ要は強いってことか！じゃあ、あたしと戦って！！」
人間の通貨は円しか知らない悪魔令嬢だが、なんとなくエヴァンジェリンは強いんだろうな、ということだけは理解できた。
「…茶々丸、ぼーや達を連れて避難しろ。ここら一帯は地獄と化すぞ」
「分かりました」
エヴァンジェリンが淡々と述べると茶々丸は疲労で動けないにないネギを抱えるとスタスタと歩き出した。千雨もＵＰ－９３をゲートエンジンモードからバイクモードへと戻し、サイドカー部分に夕映を乗せて走り出す。
「エヴァちゃん…あいつに勝てるの？」
アスナは悪魔令嬢の強さを実感しているので、もしかしたらエヴァンジェリンが負けてしまうのでは？と嫌な考えが頭の上をよぎった。するとエヴァンジェリンはアスナを小馬鹿にした顔をしてこう言う。
「私を誰だと思っている？最強の魔法使いエヴァンジェリンだぞ？」
そう言うと、視線を悪魔令嬢に戻す。
悪魔令嬢はおもちゃを貰った子供みたいな顔で待っていた。
「じゃ、初めよっか！あたしは悪魔令嬢、こう見えてもオリジナルインベーダーよ」
そしてエヴァンジェリンは茶々丸達が遠くに行ったことを確認すると戦闘の構えをとる。同じように悪魔令嬢も構える。
そして両者共に、相手に向かって瞬動を使って接近。２人の拳が空中でぶつかり合った。ここに最強同士の戦いの幕が開いた。

数回拳を混じらせ、両者共相手から離れて、詠唱を始める。
「イシス・グロス・グレセント　火の精霊４００柱！　集い来たりて　敵を射て！」
「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　氷の精霊４００柱！　集い来たりて　敵を射て！」
「魔法の射手！　連弾・火の４００矢！！」
「魔法の射手！　連弾・氷の４００矢！！」
ドドドッ！！４００本の火と氷の矢は空中でぶつかり合い、激しく爆発する。湖に落ちた何本かは水しぶきをあげていた。
「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！　来れ　虚空の雷　薙ぎ払え！」
「っ！イシス・グロス・グレセント！　ものみな焼き尽くす　浄北の炎　破壊の王にして　再生の徴よ　我が手に宿りて　敵を喰らえ！」
魔法の射手同士の爆発の影響で出来た一瞬の隙をエヴァンジェリンは見逃さず、追加攻撃を放つ準備をする。悪魔令嬢も少し遅れて呪文詠唱を行う。
「雷の斧！！」
「紅き焔！！」
エヴァンジェリンの手からは雷が、悪魔令嬢の手からは炎が飛び出してぶつかり、四散する。
（…やるな。詠唱スピードが速い『雷の斧』の一撃を、詠唱スピードが遅い呪文『紅き炎』で防ぐとはな。しかも奴は『雷の斧』の威力が弱い部分を的確に見つけて、それを狙って潰した。観察力やスピード、パワー…どれをとっても凄まじい。…久しぶりだな、このような強者は！！）
辺りの木々はさっきのぶつかり合いで飛び散った火花が燃え広がって、何本か燃えていた。
悪魔令嬢はさっきのお返しと言わんばかりに無詠唱魔法を使って、

エヴァンジェリンを潰しにかかる。
「氷神の戦鎚！」
巨大な氷塊がエヴァンジェリンの頭上に現れるがエヴァンジェリンは無詠唱の魔法の射手を用いて、それを粉砕する。
（ま、こんなん通用しないよね）
最初から当てる気がなかった悪魔令嬢は、瞬動で一気に間合いを詰めながら追加呪文の詠唱をする。
「イシス・グロス・グレセント！影の地　統ぶる者　スカサハの我が手に授けん　三十の棘もつ　愛しき槍を　雷の投擲！」
そう言うと悪魔令嬢の手に、一振りの雷の槍が出来る。
それを思いっきり、エヴァンジェリンに向かってブン投げた。
雷の槍はエヴァンジェリンのいる地点に向かっていき…凄まじい爆発が起こる。その爆発のせいで湖の水の一部が蒸発し、辺りには水蒸気が漂っていた。
「あちゃー、やりすぎちゃったかな？」
悪魔令嬢はぼんやりとその場に立ち尽くしている。既に勝負が決まったと思っているのだろうか。
「バカが…」
無論、そんな攻撃でやられてしまうほどエヴァンジェリンは弱くない。エヴァンジェリンは悪魔令嬢の立ち尽くしている地点の数十メートル上空に浮かんで、詰めの甘さに呆れていた。
（ふん…奴の使用属性は見切った。奴が使った中の上級クラス呪文は『紅き焔』、『氷神の戦鎚』、『雷の投擲』。他にも属性はあるかもしれないが…少なくともそれらで強力な呪文は放てまい。即ち…奴の使用属性は『火』『氷』『雷』！！）
エヴァンジェリンは魔法使いと戦う時、最初に相手がメインに使う属性を必ず確認する。それは戦術や攻め方に大きく響くからだ。
基本的に一人が使える属性は2～3種類。エヴァンジェリンの属性は『氷』『闇』『雷』の3種類。ネギは『雷』『風』『光』だ。そして厄介なのがこの属性の法則は人間だろうと亜人だろうが逃れる

ことはできないことだ。つまりは一人で5つ、6つの属性を使いこなすことは不可能なのだ。
更に悪魔令嬢はエヴァンジェリン相手に強力な呪文をバンバン使用してしまったこともまずかった。
魔法を使う際に生じるもう一つの問題。それは属性との相性関係だ。一つの属性を『使える』ことと『使いこなす』ことではまるで訳が違う。その属性との相性が良ければ上級クラス呪文も使いこなせるが、逆に相性が悪ければ初級クラス呪文しか覚えることができない。中には『雷の暴風』のように複数の属性との相性が良くなければ使えない呪文もある。
現に600年近く生きているエヴァンジェリンでも『雷』属性との相性はあまり良くはなく、長年の修行で何とか『雷の斧』は習得出来たものの、それ以上の習得は不可能だった。
つまりは魔法使い同士の戦いではどれだけ自分の属性を隠すかが重要になってくる。しかし悪魔令嬢は相性が良い属性を早々とバラしてしまった。
(貰った…!)
エヴァンジェリンは一気に急降下し、自分の十八番の技『断罪の剣』を放つ体制を取る。
しかしエヴァンジェリンは完全に忘れていた。彼女はインベーダーという自分の想像を遥かに超える化け物だということを…。
悪魔令嬢は下を向いたままスッと右手だけをエヴァンジェリンに向け、それを放った。
「闇の吹雪!!」
その瞬間、右手から吹雪を纏った暗闇が放出し、断罪の剣を消し去る。
「何…だと!?」
どういうことだ?とエヴァンジェリンは思考を巡らす。自分の読みは当たったはずだ、少なくともこの読みは数百年変わらず当たっていたのに何故だ。

その隙を見逃さず、悪魔令嬢はエヴァンジェリンの真上まで跳ぶ。
「…雷の暴風!!」
そして追撃に放たれたそれは咄嗟に展開した障壁を突き破り、エヴァンジェリンを水面に叩き付けた。
「ぐっ…!」
エヴァンジェリンは水面に浮かびながら、ガクンと膝から倒れた。
悪魔令嬢は近づいて来て、こう言う。
「あはは、隙だらけだと思った?残念!隙はわざと作ったんだよ~ん!」
ケラケラ笑う悪魔令嬢に、精神を逆なでされるエヴァンジェリン。
彼女がここまでコケにされたのは何年ぶりかのことだった。
「何をした?」
「ん?」
「貴様は今何をした!?何故そんなに多数の属性を使いこなせる!?」
エヴァンジェリンは声を荒げて悪魔令嬢に怒鳴る。悪魔令嬢はきょとんとしたが、すぐに何かを考える仕草をする。
「ん~いいよ、教えてあげる!別にこれで何かが変わる訳でもないし。あたし達オリジナルインベーダーはそれぞれ一つずつ特殊能力があるの。例えば誰かに化けるとか強力な幻覚を見せたりとかね」
それを話している時に不意に自分の父親である悪魔伯爵のことが頭に浮かんだ。が、すぐにそれを取り消した。
「それであたしの能力は…侵触よ。それぞれの能力や特技を吸収し、それを自在に操る。あたしの生み出したインベーダーが他者を喰らうのもその名残ね」
エヴァンジェリンはそれを聞いて、最悪の答えを想像してしまう。
「お前まさか…喰ったのか?魔法使いを?」
悪魔令嬢はそれを聞き、ニヤリと歪んだ笑みを浮かべた。
「大正解!魔法世界に行った時に結構あたしを襲ってきたから…喰っちゃった。おかげであたしが使えない魔法がガンガン覚えられる

から良かったけどね」
（そいつらが使えた魔法や特技を全て吸収し使いこなせる…反則クラスの能力だな）
エヴァンジェリンは規格外の強さを持つ相手とは何人も戦ったことがあるが、間違いなくそれらを上回る強さを悪魔令嬢は持っている。
「このままだとあんたはあたしに勝つことはできないね。あたしはほぼ全ての魔法を覚えているし、そこにあたし自身の力も加算される…さてどうすんの？」
エヴァンジェリンはじっと考える。確かに今のままでは悪魔令嬢には勝てない…。だが勝つ方法はある。それはまだ自分が弱く、虫けらの様に這って生きていた時に使っていた手段であり、普段なら進んで使おうなど微塵も思わないのだが…今は手段など選んでいられなかった。
「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！　深淵の闇　燃え盛る大剣！　闇と影と憎悪と破壊　復讐の大焔！　我を焼け　彼を焼け　其はただ焼き尽くす者！　奈落の業火！！」
（もしかしてオリジナル呪文？）
見たことも聞いたこともない詠唱キーに悪魔令嬢は興味が沸く。
「固定！！」
その言葉と共に本来放出されるはずの呪文は魔力の塊となって掌の上で渦巻く。
「何してんの…失敗？それとも不発？」
エヴァンジェリンは悪魔令嬢の発言など気にせずに次の段階へ進める。
「掌握！！」
エヴァは掌の上にある魔力の塊を握りつぶし、その全てを自らの体内へと取り込んだ。
「術式兵装　『獄炎煉我』！！！」
全てを焼き尽くす呪文をその身に取り込んだエヴァンジェリンは全身の肌が褐色になり、その体には黒い魔力を纏っていた。

「覚悟しろ…この私に『闇の魔法』を使わせたんだからな！！」

第２６話　最強対最悪（後書き）

ネギが何時までたっても光系の上位呪文を覚えないのはこういう理由なのでは?と思ったので書いてみました。
さて次回は闇の魔法を使ったエヴァ対悪魔令嬢です。もうそろそろ修学旅行編を終わらせなくては…。
次回もお楽しみに！

第２７話　闇の魔法（前書き）

久々更新です

第27話　闇の魔法

エヴァンジェリンから放たれる禍々しい魔力は悪魔令嬢の手に汗を立たせた。
「気持ち悪い…何の魔法を使ったらこんな気持ち悪い魔力を出せるの？」
悪魔令嬢は先ほどの余裕から一変し、ヤバいと感じたのか拳を握る。しかし闇の魔法を使って、身体能力を大幅に強化したエヴァンジェリンの実力を悪魔令嬢は知らなかった。
「遅い」
そしてエヴァンジェリンの声が聞こえたかと思うと、気付いたときには悪魔令嬢は殴り飛ばされていた。
「ど、どこから!?戦いの歌　最大出力！」
悪魔令嬢は急いで体勢を直して身体強化呪文を使用する。そしてエヴァンジェリンを追撃する為に瞬動を使い、一気に接近するが…近づいた途端にそのエヴァンジェリンが目の前で姿を消した。
「嘘っ!?」
否、消えたのではない。消えるほどエヴァンジェリンが速く動いただけだ。それも悪魔令嬢が見失うほどのスピードで…。
そしてエヴァンジェリンは悪魔令嬢の正面に立ち、右腕を突き出す。
「右腕解放　白き雷！」
その言葉と共に白色の轟雷が悪魔令嬢の体を突き抜ける。
「があああああ！」
本来『白き雷』は威力も弱い初級の上ランク程度の呪文のはずなのだが…エヴァンジェリンが放ったそれは普通なら上位呪文クラスに匹敵するほどの威力だった。
（…ノーモーションで!?）
体に走る痛みに耐えながら悪魔令嬢は『闇の魔法』が何なのかを探っていた。何らかの強化呪文には間違いないのだが、それだとさっ

きの『白き雷』のくだりの説明がつかない。遅延呪文だったとしても『白き雷』の事前詠唱をした形跡はないからだ。

（…とりあえずやられっぱなしになる訳にはいかないか）

悪魔令嬢は負けじと強化した拳で攻撃するが、エヴァンジェリンはそれをあっさりと避け続ける。

（なんかの身体強化呪文だよね？じゃなきゃあたしを上回るスピードで動ける訳が…！？）

そしてまたしてもエヴァンジェリンは一瞬で姿を消した。

「どこに…！？」

エヴァンジェリンは更なる追撃をかけるべく、悪魔令嬢の背後に回りこんで、その背中に左手を当てる。

「左腕解放　闇の吹雪！」

今度は左腕から闇の吹雪が飛び出し、悪魔令嬢は零距離でそれをくらう。

「ぐがあああああ！」

そして先ほどのエヴァンジェリンがやられたように悪魔令嬢は水面に叩きつけられた。

（あ、あいつ…！）

水面に叩きつけられた悪魔令嬢は予想外の出来事に混乱していた。

さっきまで自分が優勢だったはずだ。現にあたしはあいつをあざ笑った。しかしこの様はなんだ？

そして気づけば悪魔令嬢は震えていた。

（何なのよ…何なのよ！）

今、彼女は生まれて初めて恐怖というものを感じていた。

そしてこの戦いを離れた所で観戦していたネギ達はそのあまりの次元の高さに度肝を抜かれた。まるで自分達がやっていたのは何だったんだ？と思わせるのに充分すぎた。

「あの野郎…私に全力の欠片も出していなかったのかよ」
「よく私達生きてられたですね…」
千雨と夕映は悪魔令嬢と戦ったので、その本来の強さに冷や汗をかいていた。一方のネギ達はエヴァンジェリンが使った謎の技術を探っていた。
「闇の魔法？聞いたことがありませんね…」
「僕も…学校の文献を見ましたけどあんな呪文なんか見たことがないです」
するとそんなネギ達を見かねたのか茶々丸が口を開いて説明を始める。
「あれは『闇の魔法』といいまして…マスターがまだ吸血鬼になりたてで弱かった頃に１０年の歳月を重ねて完成させたオリジナル技法です。そのポテンシャルは究極技法『咸卦法』に匹敵しますが…闇の眷族の膨大な魔力を前提とした技法のため、並の人間には扱えない技法です。適性がない人間が使えば命に関わりますし、故に禁呪と呼ばれています」
とは言っても茶々丸も触りの部分しか『闇の魔法』のことを知らない。茶々丸の姉であるチャチャゼロならもっと詳しく分かるかも知れないが彼女は真帆良のエヴァンジェリンの家で留守番中であるため、詳しくは聞けなかった。茶々丸の説明が終わった時、ガサガサと誰かが近づいてくる音が聞こえた。一同が構えると…どこかで聞いた声がした。
「あー、あたしだあたし。そんなに警戒すんな」
「…里香さん!?」
夕映がすっとんきょんな声を上げる。一同の目線の先には、あちこち傷だらけの里香が立っていた。とりあえずメンバーの中で行方が分からなかった人物なので、夕映はほっと胸をなでおろした。
里香は近くの木に寄りかかって、遠くで行われている戦闘を見ながら話を進める。
「やられたよ…完敗だ。あいつが最初から本気でかかってきていた

らあたしら全員死んでたな」
千雨は里香がそれを冗談抜きで話しているのに真っ先に気づいた。
多種多様な戦術を持つ魔法相手では一人一種類のゲートでは分が悪すぎるからだ。
「それとな…あいつらの戦いをきっちり見ておけ。あれが最強同士の戦いだ。あれを見て、何を感じるのか何を思うのか…その浮かんだことを忘れないようにしろよ」

「さっきまでの威勢の良さはどうした？」
自分がやられたことをそのままやり返すことに成功したエヴァンジェリンは意地の悪い顔を浮かべていた。そしてダメージを受けて、まだ立ち上がることが出来ない悪魔令嬢に言葉の暴力をぶつける。
「ふん、再び忌々しいこれを使う羽目になるとはな…。だが、使った途端にこの様だ。所詮は他人の猿真似しか出来ない二流では対応できんか」
「…！」
それを聞いた途端、悪魔令嬢の頭の中で何かが吹っ飛んだ。それは理性だったかもしれないし、はたまた冷静さだったかもしれない。ただ分かることは悪魔令嬢は今の発言で生涯二度とないくらいに、ブチキレたことだった。
ヨロヨロと力無く立ち上がって、エヴァンジェリンを睨み付けた。
「ふざけんな…あたしは強いんだ。全ての魔法を吸収して！数多の種族の特性を得て！！そんなあたしが…あんたなんかに負ける訳がないんだよ！！！」
そして悪魔令嬢の体がボコボコと唸り、変化が始まった。
オリジナルインベーダーもインベーダーと同様に巨大化が可能だ。
ただし悪魔令嬢は「ブサイクになるから」とためらっていたが、ブチキレた今となってはそんな物、意味をなさない。

可憐だった両足はケンタウロスのような４本足に、その体も１０メートルくらいに巨大になる。そして上半身は龍の様な化け物となり、悪魔令嬢の変化は完了する。

「あたしはオリジナルインベーダーなんだ…あんたなんかガキに…」

悪魔令嬢は両腕に魔力を圧縮して剣を作る。エヴァンジェリンはその発言に不機嫌になる。

「私はガキと呼ぶな…。右腕解放　陰闇の槍」

エヴァンジェリンが作り出したそれは悪魔令嬢の『雷の投擲』と同じような槍だった。ただし、それを上回る刃渡り何１０メートルもある巨大なもので、その刀身の密度もハンパないが。

エヴァンジェリンは悪魔令嬢の右肩を狙って槍を投げた。

「ガアアア！！」

黒い槍は悪魔令嬢の右肩どころか右半身を大きくえぐり、叫び声を上げながら崩れ落ちる。えぐれた部分はインベーダーの力ですぐに再生したが体力までは戻らないらしく、かなり苦しそうな様子だった。

「巨大化と言っても所詮は的が大きくなっただけだ。デカくなれば勝てると思ったか？」

「うる…さいっ！」

エヴァンジェリンを切り刻むために剣を振るうが、それをヒラリヒラリと避わしながらエヴァンジェリンは新たな呪文をその身に宿すための詠唱を始める。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック　契約に従い　我に従え　氷の女王　来れ　とこしえのやみ！　えいえんのひょうが！！！」

エヴァの詠唱した呪文『えいえんのひょうが』は広範囲完全凍結殲滅呪文と呼ばれ、周囲１５０フィート四方を絶対零度の冷気が襲い敵を殲滅させる呪文である。

「固定！掌握！」

それを手の上に固定し、魔力を全て体内に取り込んだ。

「術式兵装『氷刹凍土』！！」

その瞬間にエヴァンジェリンの姿が変わり、先ほどの褐色とは違い、肌や髪はまるで透き通るような白色になる。
「この…クソがあああ！」
悪魔令嬢は左腕の剣を思いっきりエヴァンジェリンめがけて振り下ろすが…。
ガキィン！なんとエヴァンジェリンは素手で剣を掴んで、剣を握り潰した。
「ふん…デカくなると頭もバカになるのか？今の私に…」
そしてエヴァンジェリンは勢いよく飛び上がり、悪魔令嬢の顔面に蹴りを入れる。
「お前如きが勝てる訳がない！！」
魔力を込められた蹴りを顔面にくらった瞬間、ゴキゴキと嫌な音がする。水面に着地すると、魔力を固めて作った氷の刀を両腕に装備する。
「両腕…解放！！」
その言葉と共に、体中の魔力の全てを2つの刀に集める。その際に溢れ出した魔力の影響で辺り一帯が凍ってしまう。
そしてそのまま一気に悪魔令嬢に接近し…体に十文字状の傷をつけた。
「…」
そのままエヴァンジェリンは悪魔令嬢に背中を向けて、スタスタと歩き出した。
「貰った…！」
悪魔令嬢は右腕を振り下ろそうと上げるが…その右腕が凍りつき、まるで砂人形の如く崩れ落ちた。
「何…！？」
そして右腕から胴体、足と氷は悪魔令嬢を包み込んでゆく。
そしてエヴァンジェリンは後ろを向きながら更なる呪文を唱える。
「全ての　命ある者に　等しき死を　其は安らぎ也」
「…！！させるかあああ！！！」

悪魔令嬢は最後の力を振り絞って左腕を必死に伸ばす。しかし時既に遅し。氷は体中に広がり、悪魔令嬢は氷付けになってしまった。

「…おわるせかい」

エヴァンジェリンがパチンと指を鳴らすと、悪魔令嬢は粉々に砕けちる。

そして彼女のコアがその中から飛び出し、凍った水面に落ちるとサラサラと消えてしまった。

「久々に大暴れできたよ…できればもう少し賢い貴様と戦いたかったがな…」

エヴァンジェリンはそうポツリと呟くと歩みを再開する。

この日オリジナルインベーダーの一角『悪魔令嬢』は倒されたのだった。

第２７話　闇の魔法（後書き）

とりあえず修学旅行編の戦いは終了です。
次回はエピローグです。

第２８話　戦い終わって

エヴァンジェリンが悪魔令嬢を倒し、ようやく全てが終わった時には既に日付が変わり、朝日が昇る時刻だった。
一同は山道を歩いていると、ここで里香が何かを思い出し、千雨と夕映に向かって話す。
「お前らそろそろホテルに戻ったらどうだ？報告ならあたしがやっておくからよ」
「え、どうしてですか？」
夕映は里香の発言の意味がよく分からず、返答を求める。しかし夕映と千雨は肝心なことを忘れてしまっているのに気づいていなかった。
「だってよ…お前ら何も身代わり作らないまま飛び出して来たんだろ？朝になって、お前らがいないってことがバレたら大騒ぎになるぞ」
「「…あ！」」
ここで二人ともその肝心なことにようやく気づいて、顔が青くなる。アスナや刹那達は詠春が作った替え玉の式紙があるからグズグズしていても大丈夫だが、千雨達の場合はそうもいかない。
あのバタバタで頭がいっぱいで、身代わりのことなど頭の中からすっかり消えていたのだ。
もしも起床時間になって千雨達がいないことがみんなに気づかれてしまうと大騒ぎになってしまうだろう。
千雨は急いでＵＰ－９３を停めてある所まで走る。それを見た夕映も慌ててそれについていく。
「すいません里香さん、お言葉に甘えさせて貰うです！」
「ああ、急いで行けよ！」
ブウウン！千雨はＵＰ－９３のエンジンを噴かし、一気にそこから離れていった。…とまあ、戦いの直後だというのになんとも間抜け

な出来事が起こってしまったのであった。

それから朝日がすっかり昇りきってしまった数十分後、千雨達は大急ぎでホテルに帰ってきた。

「とりあえずトイレの窓から行くぞ」

千雨達は従業員に見つかりやすい正面玄関からではなく、初日に抜け出した時に使用した女子トイレの換気扇脇の小窓を使うことにする。

すると意外なことに夕映が慣れた手つきでひょいと壁を登り、ガラガラと窓を開けて中へ入っていた。

「…やるじゃん」

「図書館探検部には朝飯前のことですよ。キス選手権でもこのような技を使わせてもらいましたしね」

「へえ…」

千雨は夕映がそんな技を持っていたことや部活の所属など初耳だった。これも友達が少ない所以か。

「それでは早く部屋に帰りましょうか」

「そうだな。新田に見つかったらこの前の正座どころじゃ済まされないもんな」

廊下に出る時や曲がり角にさしかかる時などにも、人がいないかどうか気をつけながら歩く。そして二人は誰にも見つかることなく部屋へとたどり着いた。

「それではお休みなさいです」

「お休みって言うかもうおはようの時間なんだけどな」

そんなやりとりをしながらそれぞれ部屋に入っていく。玄関で靴を脱いで短い廊下を渡りながら、千雨は他のメンバーに対する言い訳を考えつつ、ガラリと襖を開けた。そこには…。

「…あれ？」

なんと千雨の布団には、千雨と全く同じ姿をしている人物が寝ていたのだ。自分は身代わりを作ってはいないので必然的に第三者が行った行動に間違いないだろう。

こんなことをする人物を探っていると…ある一人の人物が候補に浮かんだ。そしてそれはもう一人の千雨を殴りつけ、式紙に戻した時に式神の紙と共に出てきたもう一枚の紙を見た時に確定した。千雨が手にとって見てみるとそこには「お疲れ様でござる、ニンニン」と書いてあった。こんなこと書く奴など一人しかいない。

「長瀬か…」

甲賀忍者のフォローに感謝しつつ、千雨は眠りについた。そしてものの数十秒で眠りに入ってしまった。

「…っと、まあこんな感じで事件は解決だ。残念ながら計画の首謀者である天ヶ崎千草はインベーダーに感染。撃破してしまったため捕まえることは出来なかった…以上だ」

「結構です。下がって下さい」

何十畳もあるような大広間には関西呪術協会の長である近衛詠春、西洋魔法使いエヴァンジェリン、ゲートキーパー太刀川里香というなんとも珍しい面子が集まっている。

「彼女がインベーダーに…ですか」

「ああ、桜咲って子から聞いた。後輩を連れてくるのが一番手っ取り早いんだが、今話すことを聞かせたくないんでな。帰らせた」

それを聞いた詠春は悔しそうにうなだれた。自分が命を助けられなく、人の形を保つことすらなく死んでしまった。関西呪術協会の長が一人の人間を助けることすら出来ない…それが悔しかった。

「それとエヴァンジェリン…って言ったか？一つ確認したいんだ。悪魔令嬢のコアは完全に破壊したんだな？」

「…？ああ、確かに破壊したぞ」

エヴァンジェリンは不思議に思いつつ、里香にコアの破壊を伝える。
それを聞いた里香は安心した顔をした。
「なんでそんなこと聞くんだ?」
「オリジナルインベーダーはコアを完全破壊しないと自然と復活するんだ。実際にその実例があるしな」
今度ばかりは対応できないからな、と里香は付け加えた。それでエヴァンジェリンは納得した。
すると詠春は里香に向かって話す。
「太刀川君…君はゲートキーパーらしいね。そこで本職の君に聞きたいんだが…人類はインベーダーに勝てるのだろうか?君の意見を聞きたい」
「…」
エヴァンジェリンもこれには興味を示した。学園長から同じ内容の返答は聞いていたものゲートキーパー本人の意見は聞いていなかったからだ。
里香はしばらく黙り…そして口を開いた。
「結論から言うと…人類がインベーダーに勝つことは不可能だ。どれだけ時代が進もうとこれは変わらず、人類とインベーダーの問題は永遠につきまとうことになる。それに…実を言えば人類はもう長くないらしいしな」
「「!?」」
詠春とエヴァンジェリンは目を見開いた。まさか人類の終末が近づいていることを知らされるとは…。
「どういうことだ…?詳しく説明しろ」
エヴァンジェリンもこれには激しく動揺し、里香に説明を求める。
「近い未来…人類の歴史を大きく変える出来事が起きる可能性があるらしい。それによって人類のほぼ全員が死亡またはインベーダーに感染。世の中はめちゃくちゃになるらしいぞ。…ま、あくまでも可能性だがな」
最後に希望のある言葉を残すが、詠春やエヴァンジェリンにはキツ

い一言になった。可能性に過ぎない…しかしそこまで分かりきっているのならもはや確定している未来なのではないか…？
詠春は口がカラカラになるのを感じ、この予言を出したある一人の人物に心当たりがあった。
「この予言は…影山さんの出した予言ですか？」
「…ああ」
それを聞いた詠春はグッ…と顔を歪ませた。よりによって一番調べて欲しくなかった人物の予言とは…！
エヴァンジェリンは全く話に着いていけず、影山がどんな人物か分からない。
「おい詠春、影山とは誰だ！？」
「インベーダー殲滅組織イージスのトップに立つ男ですよ。彼は未来や人の心を見ることが出来る『眼光』のゲートを持っているんです。そして世界は多少のズレはあるものの…彼が予言した内容に近づいているらしいんです」
詠春の話を聞き、エヴァンジェリンも驚いた。
「あくまでも予言だから本気にすんな。本当なら２００１年に人類は滅んでいたはずなんだからな」
２００１年…オリジナルインベーダー幽霊少女の戦いで東京一体が壊滅しかけ、人類の行方もこれまでかと思われた。しかし『疾風』のゲートキーパー、五十鈴天音と『跳躍』のゲートキーパー、真鶴美羽。この二人が倒すことが不可能だった幽霊少女を撃破したことで何とか人類は救われたのだ。
「もしかしたらだが…その不可能を可能にする人物が出てくるかもな」
そう言うと里香は大広間から出ていった。大広間には里香の発言に驚いている詠春とエヴァンジェリンの姿があった。

「全く…めちゃくちゃやったでやんすね！」
修学旅行の４日目。千雨と夕映は影山経由でメガネに呼び出され、再度盾神喫茶までやって来た。そこでメガネにＵＰ－９３の整備とデータ提供をするのだが…早速中身を見た所、メガネはカンカンに怒った。
バイク部分には影響はないのだがゲートエンジンモード中に使用する機器が何ヶ所かいかれていたのだ。
「「す、すいません！」」
とりあえず千雨と夕映は謝る。が、メガネはゲートエンジンの改善点に気づいたのか、ブツブツ呟いて自分の世界に入ってしまった。
二人の呼び声に気づいたのは少し経ってからのことだった。
「…？ああ、大丈夫でやんすよ。オイラもついカッとなってしまって…。夕映ちゃんのパスカードならこれでやんすよ」
メガネは机の上に置いてあったカードを夕映に渡した。これで夕映もイージスの一員に加わることになる。
「それとＵＰ－９３でやんすが…しばらく改修修理で預からせてもらうでやんす。ゴールデンウイークまでには戻す予定でやんすから」
そして世間話やゲートの調子などを話して千雨達は帰って行った。

千雨達が帰った後、メガネはＵＰ－９３を配線やマシンに繋いで詳しく調べていたが信じられないことに直面していた。
「パーツ自体が焼け切れている…千雨ちゃんのゲートの力に耐えきれなかったのでやんすか？浮矢先輩のデータを使ってこいつを組み立てたのに…」
メガネはパソコンの画面とにらめっこしながら唸った。
「千雨ちゃんのゲート『風雷』…パワーだけなら影山や雪乃ちゃんをも上回るでやんすよ…」
メガネはそこである危機感を覚えた。もしかしたら千雨が雪乃の様

に強大な力のせいで何かを失ってしまうのではないか…と。

第２８話　戦い終わって（後書き）

とりあえず修学旅行編は終了。次回からはオリジナル話を挟んでヘルマン編にいきます。そこで物語が動くかもしれません…。

第２９話　それぞれの道

波乱の修学旅行から懐かしの麻帆良学園に帰って来た翌日。
千雨は朝っぱらから自室のベッドに寝転がり、パソコンを使って久々のブログの更新をしていた。
「修学旅行ではトラブル続きでずっと更新出来なかったからな、バリバリやらせてもらうぜ」
鼻歌混じりの上機嫌でキーボードを叩いていると…ベッド脇の棚に置いてあった携帯のバイブ音が部屋中に響いた。
千雨は一旦キーボードを叩くのを止めて、携帯の待ち受けを見る。
すると美羽からメールが来ていた。
「…美羽さんから？」
とりあえずメールを見てみるとそこには今後の予定などを話し合いたいから夕映と一緒に美羽の部屋まで来てくれないか、とのことだった。
「…」
断る理由もない千雨は二つ返事でこれを承諾。すると目安の時刻と住所、部屋番号が送られて来た。
「…とりあえずは綾瀬に連絡だな」
早速、携帯を操作して綾瀬にメールを送る。そして返事が帰ってくるまで着ていく服の選別を始めるのであった。

「でっけえ…」
「立派です…私達が場違いかと思うくらい立派です…」
千雨と夕映は美羽が寝泊まりしている女子寮までやって来たが、そこは明らかに寮の域を超えている代物だった。
ロビーは高級ホテルをイメージさせる出来で、ロビーで見かける女

子達もどこかお嬢様みたいな雰囲気がある。自分達が寝泊まりしている寮も十分凄いが、こちらはそれを遥かに凌駕していた。
「千雨さん、その…美羽さんとは一体何者なのですか？」
だんだん怖くなってきたのか、夕映は恐る恐る聞く。千雨もまさかこんな寮に住んでいるなんて知らなかったため、少しびびっていた。
「わ、私もゲートキーパーだってことと真帆良の医大に通っているってことくらいしか知らねえんだよ。もしかしたら金持ちの家で育ったのかもしれないな…」
エレベーターに乗り、指定された階で降りる。そしておっかなびっくりなまま部屋の前まで進み、インターフォンを鳴らす。
「はーい」
美羽の声が聞こえ、すぐにドアが開いた。ドアの前には久しぶりに会う美羽の姿があった。
「いらっしゃい千雨ちゃん。…と、あなたが新しいゲートキーパーの綾瀬夕映ちゃん？」
「は、はい」
夕映は緊張気味に美羽に返答する。
「じゃあここでずっといるのもあれだし…中に入って」
二人は玄関で靴を脱ぎ、そのまま部屋へと入っていく。そして二人の予想通りで部屋の中も凄かった。
明らかに一人暮らしには広すぎるリビングに周りにある家具も高そうな物ばかりだった。
「…凄い部屋ですね」
千雨がポツリと呟くと、美羽は困った様な笑みを浮かべる。
「ここは真帆良大の医学部や工学部、法学部など学力が高い生徒だけが住むことが許される寮なのよ。それだけ私達の将来が期待されているのか分からないけれど…こういうのは止めたほうがいいと思うのよね。いつから日本は階級社会になったのかしら…ハア」
どうやら来る人全員が同じリアクションをしてしまうため美羽も嫌ならしい。と、そこで美羽は話を切り上げて椅子に腰掛けた。千雨

と夕映もソファーに腰掛ける。そして美羽はおもむろに真剣な顔になり、口を開いた。

「さて…千雨ちゃんは2週間近く、夕映ちゃんはこの間イージスネットワークの一員になって貰った訳だけど…初めてオリジナルインベーダーと戦ってどう思った?」

やはり聞くのはそこか。思えば千雨も夕映も圧倒的強者との戦闘などやったことがなかったのだから聞くのは当然か。とここで真っ先に答えたのは夕映だった。

「私達はまだまだ弱いのだとはっきり分かったです」

「…そうね、その通りよ。はっきり言って今のあなた達の強さは一般人より強い程度。何時までもゲート能力に頼ってばかりじゃ強くはなれないわ」

「…!」

千雨も夕映も美羽のキツい一言には黙るしかなかった。確かに千雨も本気を出した悪魔令嬢の動きにはついていくことが出来なかった。ゲート能力だけでは本当に強くなった意味にはならない。根本から鍛える必要があるということだ。

「そこで問題です。手っ取り早く確実に強くなる方法は何でしょう?」

美羽はここでクイズを千雨達に出した。先に夕映が答える。

「…?それはやはり…体術や戦闘技術を鍛えたりすることですか?」

しかし美羽は残念そうに首を振った。どうやら答えは違うらしい。と、ここで千雨が口を開いた。

「もしかして…気…ですか?」

ぴくりと美羽が反応する。

「…千雨ちゃん、正解よ」

「気とは…あのマンガとかのですか?」

気について詳しく分からない夕映が美羽に問う。

「まあ、そんなイメージで構わないわ。確かに体術や戦闘技術を学ぶのも大切だけど、その人に向いているいないでどうしても差が出

来てしまうわ。それに比べて気なら個人差はあるけど、誰にでも確実に手に入れることが出来るのよ。それに気が無ければ強敵との戦闘は途端に厳しくなるしね」

千雨はやはりそうかと思った。刹那と戦った時も向こうは気を使っていたし、悪魔令嬢が使った瞬動も気を利用した技術だ。気は言わば、強敵と戦うには必須技術なのだ。

「そこで相談なんだけど…もうすぐゴールデンウイークよね。二人共暇？」

「…？はい、暇ですけど…」

「私もです…」

そこで美羽は予想外の提案を出す。

「良かったらでいいんだけど…気を学びたいと思わない？」

「「！？」」

千雨と夕映はバッと向き合った。確かに二人共、強くなりたいと思ってはいたがまさかこれは…。

「もし二人が来るなら私はゴールデンウイーク期間中、強化合宿を開くわ。苦しいかもしれないけど、これを行えば確実に強くはなれるわ。無論、強制は…」

「「やります！やらせて下さい！！」」

気づけば千雨と夕映は同時に口を開いていた。美羽はふふっと笑いながら大声を出した。

「それじゃあ決まりね！連絡は追々するとして二人共、着替えなんかを準備しておいてね！！」

「しっかし美羽さんが修行をつけてくれるとは…」

「頑張らないとですね」

夕暮れの帰り道、千雨と夕映はゴールデンウイーク中の修行の話題で持ちきりだった。何をやるのだとかどれくらい強くなれるかなど。

それは寮の階段を登っている間にも続いた。
「それでは今日はこの辺で…」
「おう、じゃあなー」
夕映が自室の玄関を開いたのを横目にして、千雨も自室へと戻った。
とりあえずは夕飯までは時間はある。部屋の片付けでもするかな、と思った矢先…。
ピンポーン。めったに鳴らないインターフォンが部屋に鳴り響いた。
「誰だ…？はーいはいはい！」
ガチャっと鍵を開けるとネギ、アスナ、刹那、このかの姿があったのだが…そこにはとても不思議な光景が映っていた。なぜならアスナは顔を赤くしながらネギの方を見ていたし、このかは「せっちゃん大好きやー！」と言いながら、刹那の腰にグリグリと抱きついていた。
「…」
千雨は一瞬それを見た後、何事もなかったかのようにバタンと玄関を閉めた。
「ちょっとー！？」
アスナや刹那の悲鳴が響いた数分後、とうとう折れた千雨がネギ達を迎え入れた。ただし部屋の物には勝手に触るなと悲しいくらいに念押ししてだが。
「ドアを閉めるなんて酷いですよ、千雨さん！！」
「…あんな光景いきなり見せられたら、普通はドアを閉めると思うんだけどよ…それに何で私の所に来たんだよ！！」
「惚れ薬の効果が切れるまでしばらくかくまらせて欲しいんです！」
ネギがぺこりと頭を下げた。話を聞くとアスナとこのかはネギが調達してきた惚れ薬入りチョコを間違って食べてしまい、先ほどのような状態になってしまったというわけだ。
「あーん、せっちゃん好きやー」
「…うるせえ！」
千雨はイライラしながら机の引き出しから予備の疑似ゲートを取り

出した。
「惚れ薬ってことは一種の催眠術みたいなもんだよな。だったら…」
千雨は『幻惑』を聴覚から入るように設定する。そして机に置かれていたヘッドフォンを耳にかけ、MDプレイヤーを再生する。
「耳を塞げよ…桜咲、先生。ゲート…オープン！」
刹那とネギが耳を塞いだのを確認してからゲートを開く。そして疑似ゲートから幻惑のメロディーが流れる。そしてすぐその効果は現れた。
「…！？あ、あれ…？」
「…うち何やってたんやろ？」
惚れ薬の催眠効果を『幻惑』の効果で中和したのだ。結果は上手くいき、二人共厄介な催眠から逃れることに成功したのだ。

「…にしても、千雨ちゃんの携帯は便利よね。怪我を回復させたり凍らせたり出来るんだから」
アスナは千雨が出した紅茶を飲みながらそうぼやいた。
「携帯じゃねえ。疑似ゲートっていう、私達が所属している組織イージスの主力武器だ。正式名称はイミテーションゲート、開発コンセプトはゲート能力を持たない人間でもインベーダーに対抗出来るように、と人間が考えた武器だよ」
インベーダーと聞いてサッとこのかの顔色が青くなる。どうやらまだ千草の一件から立ち直れていないらしい。千雨は話題を変えるため、疑似ゲートが入っている小袋をテーブルの上に置いた。カモは千雨が使い終わった疑似ゲートを器用に前足だけで持ち、まじまじと眺めた。
「へー、これが疑似ゲートッスか！姐さん、俺っちにも一つ頂けないッスか？多分これ、魔法界でかなりいい値で売れると思うんスよ」
「バカが、お前らにこれはやらねえよ。これはイージスの一員にし

か渡されないんだ、私の独断で勝手に渡す訳にはいかないんだよ」
そう言われるとぐうの音も出ず、カモはうなだれた。
説明を終えた千雨はちらりとこのかを見た。
「…んで、近衛はこっち側に来るのか？」
「！」
ビクッとこのかは反応する。そしてしばらく下を向いた後、顔を上げた。
「うちは…魔法を習いたいと思うんや。いつもせっちゃんに守ってもらうばかりやったし、それにうちの魔力で多くの人が助けられるんなら…」
「…それはこっち側に来る、と受け取っていいんだな？」
こくん、とこのかは頷いた。
「…そうか。まあ、お前が決めたんだ、後悔しないようにしろよ」
「…うん！」

「影山さん…これで…本当に良かったんですよね？」
美羽は夕焼け空を見ながら影山と通話していた。
「ああ、戦力強化の面もあるが…今後、長谷川千雨になるべくゲートを使わせない為にするにはこうするしかないからな。綾瀬夕映に関してもそうした方がいいしな」
「…私、やっぱりいい気分しません。あの子達をまるで騙しているみたいで…」
美羽は下唇をギュッと噛んだ。
「…仕方あるまい、長谷川千雨のゲートは俺や北条雪乃に並ぶくらいに強力だ。どうしても何らかの対策は立てておく必要はあるんだ。…済まない、また連絡する」
ピッと通話が切れる。美羽は携帯を握りしめたまま、泣きじゃくった。

「ごめんね…千雨ちゃん、夕映ちゃん…」

美羽はそのまま崩れ落ち、ワンワン泣いた。…自分はこんなにも無力なのか、とひしひしと感じながら。

第２９話　それぞれの道（後書き）

やべぇ、千雨がどんどん強くなっていく…。連載初期はここまで強くはしない予定だったのに…どうしてこうなった。
次回はネギの弟子入り編を混ぜつつ、オリジナル話をやります。お楽しみに！

第３０話　修行前日（前書き）

短いです

第３０話　修行前日

人という物は嬉しいことが近づくにつれ、落ち着いていられなくなる傾向があるらしい。
ましてやゴールデンウイークが明日から始まるのに、お祭り好きな３－Ａがまともなテンションでいられる訳が無かった。
「えー、明日からゴールデンウイークになりますが…皆さん、長い休みの間に羽目を外さないようにして下さいね！」
「「「はーい！」」」
つい先週まで修学旅行というビッグなイベントがあったばかりなのにこの騒ぎようだ、千雨と夕映はその光景をぼーっと眺めながら全く同じことを考えていた。
（（バカばっかり…））
そしてホームルームが終わるとクラス中に歓声が響いた。千雨は通学カバンを背負って、とっとと教室から出ようとする。
「あっ、千雨ちゃん！あのね、ゴールデンウイーク中のことなんだけど…」
「悪いな」
千雨はアスナとの会話を途中で遮った。
「私さ、連休中ずっとやることがあるんだ。だからお前らに会うのもつきあうのも無理だ」
「あ…うん…」
「じゃあな」
アスナは何か聞きたそうな様子だったが、千雨はすぐに教室を飛び出した。教室前には夕映が立っていた。千雨のことを待っていたらしい。
「んじゃ、行くか」
コクリと夕映は頷き、２人はそのまま並んで歩く。今日の放課後、明日から始まる強化合宿の事前打ち合わせの為に、美羽の部屋まで

行かなければならないのだ。
（わざわざ呼び出すなんて…何をするんだか）
少し不安になりつつも、千雨は美羽の寮に向かって歩を進めた。

ピンポーン！千雨がインターフォンを押すと、中からドタドタと音がした。しばらくするとドアが開き、美羽がそこに立っていた。
「あ…2人共、ずいぶん早かったのね」
「…？美羽さん、何かあったんですか？」
千雨は思わずそう答えてしまった。いつも明るい美羽が今日はどこか元気がないように見えたのだ。
「！だ、大丈夫よ！早く中に入って！」
そう言うと美羽は無理矢理笑顔を作ると、2人を中に入れる。そして美羽は本題を切り出した。
「さて…合宿の件なんだけどね、2人は私の部屋で寝食を共に過ごしてもらいます。そして早朝から夕方まで私が立てたスケジュールに沿って修行をしてもらうわ。それと…」
すると美羽は机の中から疑似ゲートを取り出し、スタスタと2人に近づいた。
「2人には今回の合宿中、ある制限をつけさせてもらうわ。それは…」
そして美羽は『氷結』の疑似ゲートを使い、それを千雨と夕映に向かって放った。
「…！？」
襲いかかる冷気に耐えようと目をつぶるが…いつまでたっても冷気がこない。恐る恐る目を開けて見ると、千雨も夕映も体が凍ってなどいなかった。疑似ゲートは不発だったのだろうか？
「あの…美羽さん、何をしたんですか？」
さっぱり状況が掴めない夕映は美羽に答えを求める。美羽は少し笑

って、夕映に言った。
「夕映ちゃん、ゲートを開いてみて？」
「…？分かりました、ゲートオープン！」
…しかし夕映のゲートは開くことは無かった。いつもは必ず開くはずなのに。
「…！？」
これはさすがに夕映も慌てだし、どうにかしてゲートを開かせようとするが、一向に開かない。と、ここで…。
「…！まさか美羽さん…」
ここで千雨は美羽が自分達に何を行ったのかに気づいた。美羽は『氷結』のもう一つの能力を使ったのだ。『氷結』は単に物を凍らせるだけでなく、対象の動きや時間といった物の動きも停止させることが可能だ。
それを応用すれば、相手の固有能力なども封印することが出来る。
つまりは…。
「そう…合宿期間中はあなた達のゲートはこちらで封印してもらうわ」
「「！！」」
千雨と夕映は目を見開いた。まさかここまでやるとは…。
「ゲートキーパーは、自分に危機が迫ると無意識でゲートを開いてしまうのよ。少なくとも今回はそれを防ぐために封印をやらせてもらうわ」
そして集合時間や持って来る物などを聞いた後、解散することになった。

「…何か変な感じだな」
「そうですか？私は特に違和感は…」
「お前は最近、ゲートを手に入れたから違和感は感じないかもな。

私はゲートを手に入れたのが数年前だから違和感を感じまくりだよ。しっかしゲートを封じられるとはな…」

千雨と夕映は滅多に来ない食堂で早めの夕食を食べていた。普段は外食をしない夕映もルームメイトののどかとハルナが図書館探検部のメンバーと打ち上げに行ってしまった為、１人で食べるのも寂しいので千雨につきあうことにした。

「修行内容は結局分かりませんでしたね」

「分からないほうがいいだろ。キツい修行の内容なんて前日なんかに聞きたくはないな」

千雨はそう言うと生姜焼きを口に含んだ。夕映はそれもそうかと呟き、自分が頼んだミートスパゲティを口に運ぶ。そしておもむろに口を開いた。

「千雨さん…頑張りましょうね」

「おう」

２人の心は準備万全だった。後は合宿が始まるのを待つだけだ。

場所は離れて京都の盾神喫茶。ここではメガネがＵＰ－９３の改修修理を行っていた。

「えーっと、ここは…」

メガネはパソコンとにらめっこしながら、作業を進めていた。と、ここで机脇に置いてあった携帯から着信音が鳴り響く。一旦作業を中断し、携帯を開いた。画面には『影山』とあった。

「はいはい、メガネでやんす」

「俺だ」

影山は相変わらず口数が少なかった。メガネは苦笑しつつ、いつもは自分に対してメールで用件を済ます影山が、自分に電話をかけてくるなど珍しいことがあるもんだと思った。

「一体何でやんす？オイラ今忙しいんでやんすけど…」

「ああ。お前、ＵＰ－９３の修理はいつ頃終わりそうだ？」
「…？最終チェックも含めて、遅くとも明日には…」
メガネは影山の考えが読めない。すると影山が予想外のことを切り出した。
「麻帆良に届けにいくついでだ、長谷川千雨と綾瀬夕映。この２人の過去を調べて欲しい」
「－！？」
今度こそメガネは驚いた。何故なら影山は人の過去を無闇に探ったりはしないはずだ。…いや、あった。探る理由が一つだけ…。
「…あの２人が麻帆良出身のゲートキーパーだからでやんすか？」
「ああ。綾瀬夕映はともかく長谷川千雨の過去は必ず調べてくれ。もしかしたらだが…俺並みの過去を過ごしているかもしれない。でなければあのゲートの威力は説明がつかん」
「…気は進まないでやんすが…分かったでやんすよ」
「すまない」
ピッ！それだけ言うと電話が切れた。
メガネは携帯電話を握りしめたまま、しばらく黙っていた。
そして机に携帯を投げ出し、置いていた工具を拾い上げる。
（今年に入ってからの麻帆良周辺のインベーダー大量発生に影山の予言…もしかしたらでやんすが…。ついでに調べてみるとするでやんすかね）
胸に人の過去を勝手に調べるという罪悪感を残しつつ、メガネは作業に戻った。

第３０話　修行前日（後書き）

今回のエピソードはあくまでもつなぎのエピソードなので短いです…ごめんなさい。
次回は修行編に入ります、お楽しみに！

第３１話　痛みを超えて

夜が明け、ついに迎えた修行当日。千雨はいつもより2時間以上も早く目覚め、量は少なめだが朝食を食べていた。パンを口に運びながら千雨は荷物の最終チェックを行っていた。

（着替え類は大丈夫だな。歯磨き粉やタオルなんかはあっちで借りれるかもしれないけれど一応持っていくか。後は使わないかもしれないけどパソコンもだな…）

荷物のチェックをしながら千雨はふと、自分は随分と張り切っているなとぼんやり感じていた。

思えば千雨は誰かの家に外泊したことなんて一度もなかった。もしかしたら気分が高揚しているのは、修行ではなく初めての外泊にワクワクしているのかもしれない。

（…ったく、何考えてんだか。この合宿の目的は気の習得だろうが。単なるお泊まり会じゃねえのによ。まあ、プライベートでは初めて学生らしい行事に参加する訳だけど…）

気づけば千雨は小さな笑みを浮かべていた。そしてそれは寮の1階で待っていた夕映に指摘されるまで続いていた。

美羽との待ち合わせ場所は世界樹下のベンチの近くになっていた。2人は会話を交わしながら、そこまで歩を進めると…既に美羽がベンチに座っていた。すると美羽はちらりとこちらを向いた。

マズい…もしかしたら待たせてしまったかもしれない。焦りながら急いで2人は駆け寄った。

「み、美羽さん！待たせてしまってすみません！」

美羽は頭を下げている夕映に驚き、慌てだす。

「だ、大丈夫よ2人共。私も来たばかりだから…落ち着いて、ね」

美羽は落ち着いた対応で2人をなだめた。そしてしばらくすると真剣な表情をして2人に向き合う。
「…さて、いよいよ修行当日を迎えた訳だけど…私は修行期間中はあなた達を後輩扱いなんてしません」
「え？」
「そうでもしないと修行自体に甘えが出てしまうからです」
黙り込んだ千雨と夕映を尻目に淡々と話す美羽。
「美羽さん…」
「そんなに怖がらないで。…まあ、さすがにヤバくなったら私も止めるわ。ただお遊びじゃないってことを分かって欲しかっただけよ」
「…はい！」
2人は力強く答えた。すると美羽はポケットからブレスレットを2つ取り出し、それを2人の右手に向かって軽く投げる。ブレスレットはカチャリと軽い音を立てて2人の腕に装着された。
「それは気を引き出しやすくする魔法具よ。まあ…自転車の補助輪みたいなものね」
そして2人はそのブレスレットを修行期間中ずっと付けてもらうことを聞くと、早速修行を行う場所に移動するのであった。

そして真帆良を離れ、山岳地帯に入った一同は山道を進んでいた。
「結構遠くまで来たな」
「いや、そんなに遠くはないですよ千雨さん。まだ校舎が見えますしね」
夕映はサラリと答えた。流石は図書館探検部、すぐさま位置を確認した。すると美羽が明るい声を上げる。
「さあ2人共、ここがゴールデンウイーク中、私達が使う…修行の舞台よ！」
「「おおー！」」

たどり着いた場所にあったのは…木が生い茂っている森にぽっかりと円形状に開いているスペースが。まるでゲームでよくある闘技場の舞台によく似ていた。

「ここは昔、魔法使いが修行に使っていた修行場よ。今は使われていないようだから使わせてもらうわ」

千雨と夕映は辺りを歩き回っていた。大体広さはざっと見ただけで直径１５メートル程はあるだろう。

美羽はパンパンと手を叩いて２人を呼び出す。

「さて…この期間中、あなた達にしてもらう修行内容を発表します。それは…」

夕映はゴクリと生唾を飲んだ。千雨もドキドキしながら美羽を見た。

「私の攻撃をただひたすらに避け続けることよ！」

そして美羽は持ってきたスポーツバックから２つの物を取り出した。１つ目は自分達が修学旅行中に何度もお世話になった疑似ゲート。２つ目はメガネから貰った新装備、ゲートガンが２丁。

「初心者のあなた達に小難しいことは要求しないわ。それに分かりやすい修行の方が楽しめると思ってね」

美羽はそう言うと数歩下がる。２人との間合いは６～７メートルといった所だろうか？

「そろそろ始めるわ。２人とも準備はいい？」

「「はい！」」

それを聞くと、ゲートガンを両手に持ち、銃口を向けた。

「それじゃあ…行くわよ！」

ダンダンダン！ゲートガンから逃げる２人に向かって『疾風』の弾丸を飛ばす美羽。

「ぐっ…」

そして最初にその餌食となったのは…夕映であった。腕でガードす

るが、腕に響くその痛みで顔を歪める。ちなみに修行なので弾の威力は下げているものの当たればそれなりに痛い。

「ヤバい…」

千雨はサンドバックと化している夕映を助けるために夕映の下へと走るが…。

ドドドド！！狙いが夕映から千雨に移った。激しい弾の嵐で体のあちこちに被弾するが、千雨は何とか耐えきる。

「とりあえずは攻撃を止めさせないと…」

砲撃が止んだ一瞬を見計らって、千雨は美羽めがけて走り出す。

（確かに弾は速いけど威力も大したことない…攻撃軌道も直線だから読みやすい。…いける！）

…しかしそんな浅はかな発想で攻略できるほど、この修行は甘くはない。美羽はもう片方のゲートガンを構えると、接近してくる千雨めがけて撃った。

（軌道は直線なんだろ…！？）

しかし弾は直線ではなく、グルンと鋭いカーブを描いて千雨の脇腹に当たった。

「いっ…！」

予想外の方向からの攻撃に脇腹を抑える。

そして2丁のゲートガンから一斉に火が噴き、千雨は倒れた。

美羽は倒れた千雨を見て、一旦銃撃を止める。そして千雨に向かってこう発言した。

「弾は1つとは誰も言っていないわよ？ちなみに今の弾は『幻惑』のゲートを使った曲射弾よ」

そうだった、ゲートガンにはそれぞれのゲートの弾丸にして放つ機能がある。しかし今のは真っ直ぐ飛ぶといった銃の特性を全く無視する攻撃だった。曲がる弾丸など千雨は初めて見た。こんなトリッキーな攻撃手段など見たことない。

「さて、続けるわよ…」

（これは…ヤバいな）

千雨は心の中でヤバいとひしひしと感じた。

「無理…もう無理です…」

修行が始まってから何時間か経った頃。

最早どれくらいの時間が流れたかすら分からなくなった頃、ようやく休憩の時間に突入した。

夕映は倒れ込んだままカバンに近づいて、水分を補給する。

千雨は泥の様にぐったりと倒れている。

「疑似ゲートを補給してくるからそれまで休憩ね」

最早、美羽の声すら2人は聞いているか怪しい反応だった。

そして美羽が去った数分後、夕映はズルズルと地面を張って、千雨に近づいた。

「千雨さん…何発くらい弾に当たりましたか？」

「…分かんねえ」

千雨は弱々しく答えると、リュックから水を取り出し、口に含んだ。

「お前こそ大丈夫かよ…体中アザだらけだぞ？」

「…何とか」

あれから2人は数時間、速射の『疾風』と曲射の『幻惑』のコンボになぶられ続け、心身ともにボロボロになっていた。

「速いの避けたと思ったら曲がるのが来るんだ…キツいよ。更に『寸断』や『氷結』なんかの未知数の弾丸もあるもんな」

「まずはあのコンボを何とかしなければなりませんね…」

千雨は深く頷いた。そして2人は美羽が戻ってくるまで「あーでもない」「こーでもない」と語りあった。

一方、部屋に戻った美羽は使い終えた疑似ゲートを取り出しながら

2人のタフさに驚いていた。
「千雨ちゃんは分かっていたけど…夕映ちゃんはかなり体力があるわね」
美羽は後輩を傷付けることに少し胸を痛めながら、疑似ゲートの補給を行う。
（この修行の目的は大きく2つ。1つは気の習得…もう1つは痛めに慣れること。あの程度の弾で痛がっていたらとても実戦じゃ生き残れない）
痛めに慣れることはある意味、この修行中最重要課題だ。痛めに慣れていると攻撃を喰らってもすぐさま反撃できる。しかし痛めに耐えられずにうずくまっていたら、倒せる相手にも倒せなくなる。
（つらいかもしれないけれど…ここが正念場よ、2人共）
リュックを背負い、玄関から出て行く美羽。そう、まだ修行は始まったばかりなのだから。

第３１話　痛みを超えて（後書き）

結構短めで申し訳ございません。更新ペースもあまり取れないし…。
さて次回も修行編でお送りします。お楽しみに！

第３２話　男の覚悟

「美羽さん、聞きたいことがあるのですが…」
今日の修行を全て終え、美羽の部屋で夕食を食べている時に夕映が口を開いた。
「何？修行で分からないことなら「違います」
夕映は美羽の言葉を遮り、答えた。
「今までバタバタしていて聞けなかったのですが…イージスの生い立ちを聞きたいのです」
それを聞いた千雨は「あっ」と声を上げた。
「…そういえば綾瀬にはイージスのことは触りしか話していなかったな」
夕映にはいつかは喋ろうと思っていたが、修行やらのゴタゴタですっかりタイミングを逃してしまっていたのだ。
美羽は少し黙ってから口を開く。
「…そうね、夕映ちゃんもイージスの一員だもんね。イージスの成り立ちを教えなきゃいけないよね」
千雨は黙りながら、これはチャンスだと感じていた。もしかしたらだが上手くいけば、京都でメガネが答えてくれなかった真実に近づけるかもしれない。すると美羽は夕映に質問をした。
「それじゃあ夕映ちゃん…イージスの名前の由来は分かる？」
「…確か、ギリシア神話のゼウスの盾の名前…でしたか？あらゆる攻撃を防ぐ盾（イージス）。私もうろ覚えの知識ですが」
幼い頃から本にかじりついていた夕映は、少しくらいの神話の知識は持っていた。それを聞いた美羽は首を縦に振る。
「正解よ。ちなみにもう一つの名前の由来は、Ａｌｉｅｎ　Ｅｘｔｅｒｍｉｎａｔｉｎｇ　Ｇｌｏｂａｌ　Ｉｎｔｅｒｃｅｐｔ　Ｓｙｓｔｅｍ。意味は『異星人根絶のための全地球的迎撃機構』よ。それぞれ単語の頭文字を取って『イージス（Ａ．Ｅ．Ｇ．Ｉ．Ｓ）』

になるのよ」
すると千雨も美羽の会話に入り込んだ。「ちなみに今のイージスは民間組織だが…当時は国際組織だったんだ。世界中に支部があって、日本にもそれはあった。確かその支部は…表向きには高校ってことになっていたはずだぞ。イージスのメンバーもほとんどが学生だったらしいしな」
千雨は雪乃から教えて貰った情報の一つ一つ夕映に説明する。一方、美羽は千雨の口から出た『支部』という単語に少し懐かしさを感じていた。
「ちなみにその支部はね…私が通っていた高校なのよ」
「…！本当なのですか！？」
「ええ。今は廃棄されちゃったけれど、私も実際に支部の中に入ったこともあるわ」
美羽が支部に入ったのはゲートキーパーに成り立ての頃だ。そこでインベーダー追跡の為に、支部に残されていた脱出用車両、ＵＰ－１５を発車させたのである。ちなみに発車させたＵＰ－１５は大量のインベーダーを倒す為に美羽達が自爆させてしまったが…。
「当時のイージスはマジで凄かったんだよ。学校の地下に基地作ったり、車やジェット機、挙げ句の果てにはロボットまであったらしいし」
「…」
夕映は千雨の言葉を半信半疑に聞いていた。ジェット機やロボットなどの所有は流石に疑いたくもなるか。
「まあ…結局は色々あってイージスは組織解体されちゃってね。それから数十年後に新しいリーダーである影山さんって人が立て直したのよ」
「そうなのですか…。後気になることが…」
そして夕映は美羽にあれこれ質問する中、千雨は黙ったままでいた。
（やっぱり私が知りたい情報を美羽さんははぐらかしたか…何かヤバい情報なのは間違いないな）

やはりそう簡単には尻尾を出してはくれないか。
（まあいいや。まだ時間はあるんだ、また聞くチャンスはあるか…）

そして次の日の夕刻。今日もボロボロになった千雨と夕映は美羽と共に帰路に着いていた。ちなみにあちこち出来たアザは美羽が『生命』を使って、全て直してくれた。すると世界樹近くを通りかかった所で誰かの声がした。
「あっ、千雨さんに夕映さん！」
その声の主はネギであり、他にもアスナや刹那、このかやのどかやまき絵もその場にいた。
（修行期間中はモチベーションを上げる為になるべく会いたくなかったんだよなぁ…）
千雨はため息をついていると…。
「お～～い！！」
すると遠くから明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラがなにやら大きな包みを抱えながらやってきた。
「ネギ君、今日試合やるんだって！？」
「差し入れに豪華特製弁当作ってきたわー！」
数分後にはその場にシートを敷き、みんなで夕食となった。そしてその場の流れで千雨、夕映、美羽も座って食事に預かっている。
「んで、試合のほうはどうなの？勝てそう？」
裕奈がワクワクしながら聞いてきた。他の運動部メンバーも気になってしかたないのか、聞き耳を立てていた。すると古がそれに答えてくれた。
「それがネギ坊主、めちゃくちゃ飲み込みが早いアル。普通なら覚えるのに2，3ヶ月かかる技を数時間で覚えるアルよ。一体どうなっているアルか？」
それを聞いて運動部組は「それなら楽勝だね！！」など言っていた。

（…そんなに上手くいく訳無いだろうが）
千雨は呆れながら、おにぎりにかぶりついた。
夕映はネギの異常な習得スピードに驚きつつ、気を速く身につけねばと気合いを入れている。
美羽は伝説の英雄の息子であるネギを遠目でじっくりと観察していた。
「そういえば千雨ちゃんは何の用があったの？」
するとアスナは気になっていたのか、千雨の用の件を尋ねてきた。
「まあ…気の習得の修行をな…」
「気！？」
「バカ！声がデカい！」
アスナは辺りに響くほどの大声を上げ、千雨はそれをなだめる。あまりの声の大きさに運動部組がこちらを向いたが、すぐネギの方へ視線を戻した。
「私もあんまり知られたくないんだよ。しかも一般人がいる中で大声出しやがって…」
「ご、ごめん」
アスナは申し訳なさそうに謝った。

「ここにいたのか」
「あっ…千雨さん」
千雨は食後にネギがどこか自信がなさげだったのが、千雨は気になっていた。後を追いかけていくと、ベンチに座って下を俯いていた。
やはり自信がないのだろう。
「…自信、ないんだろ？」
「…はい」
ネギは不安だった。一応対策として古から拳法は習ったが、所詮は付け焼き刃程度。しかも試験の内容が茶々丸に一撃入れることなの

だ。茶々丸には一度大敗している。
「まあ…先生にアドバイスを何個か送るけどよ。まずは…すぐに決着がつかなかったら、その戦いは長引く。体力は残しておけよ」
「は、はい」
「後はこれが一番大切なんだが…諦めないことだ」
「…はい」
そう言うとネギは黙ってしまった。…まあ、今は何言っても無駄か。
「んじゃ、頑張れよ…」
千雨はそれだけ言い残すと、そこから去っていった。

そして数時間後、試験は開始されたが…それは見るに耐えない光景だった。何時間も茶々丸に殴られ続け、ネギの顔はパンパンに腫れ上がっている。
「お、おいぼーや…もういいだろう、お前のやる気は分かったからな…」
エヴァンジェリンは流石にヤバいと感じたのか、ネギを止めようとする。
「ま、まだです…」
まだ諦めないネギ。しかし茶々丸の拳は容赦なくネギの顔面に振り落とされた。
「ひい！」
アスナ達に着いて来たのどかは悲鳴を上げた。このかも見てられないとギュッと目をつぶっている。
（この場にあいつらがいなくて良かったな…）
そしてゲートキーパー組で唯一この場に残った千雨は、運動部組を強制的に帰らせたことは間違いではなかったとはっきり感じた。
最初は彼女達も文句を言い、千雨に猛反発していたが、千雨がドスの聞いた声で「お前らが大好きな先生がボコボコに殴られる光景を

生で見たいか！？」と言ったらようやく手を引いてくれたのだ。
そして結果は千雨の予想通りの結果となっている。もはや勝ち目などない…誰もが思うことだろう。しかし千雨はまだネギが諦めていないことを知っていた。すると…。
「…もう駄目！限界よ！」
アスナは仮契約カードを持って、ネギを助けに行こうとする。しかし、アスナの腕を千雨は掴んだ。
「…駄目だ、止めんな」
「…！だってあいつもうボロボロよ…子供があそこまで頑張る必要なんてないわよ！」
その発言にキレそうになるアスナ。しかし千雨は更に口を開いた。
「だったら！あいつは何であそこにいる？神楽坂も分かってるはずだ。あいつは自分がボロボロになろうと、自分の意志を貫き通している。そんな覚悟が出来る奴を、勝手に止める権利なんか私達にはない」
更に千雨は続ける。
「更に先生を子供って言ったよな？じゃあお前…貫けるか？どんなに苦しくてもつらくても、その意志を曲げずにいられるか？それが出来る先生は私達なんかよりよっぽど大人だ…！」
アスナはそれを聞くと、もう少しだけ、と足を止める。
「っ…！」
千雨の発言を聞いたネギは折れかけていた心を何とか踏みとどめる。
そして…。
パシッ。
茶々丸の顔へ、弱々しいがネギの拳が入り、そのまま地面に。
「あっ…」
アスナがポツリと言った。試験の合格条件は茶々丸に一撃でも拳を入れること。つまりは…。
「これって…合格？」
エヴァンジェリンは少し黙って…こう答えた。

「ふん、一発は一発。合格だ」
「…！」
ネギはヨロヨロと立ち上がり、千雨の下めがけて歩き出した。
そしてボロボロの顔で千雨を見上げる。
「僕…やりましたよ！千雨の言う通り、諦めませんでしたよ！」
「…ああ、そうだな！」
千雨は笑い、ネギの頭をくしゃくしゃにする。
するとアスナ達他のメンバーもネギを誉めるべく、わらわらと集まってくる。
しかしのどかだけは少し離れた所で千雨とネギを寂しそうに見ていた。
（もしかしてネギせんせーは千雨のことが好きなんじゃ…？もしそうだとしたら私…どうしよう…）

第３２話　男の覚悟（後書き）

とりあえずは嫌なフラグを立ててみた。うーむ、恋愛パートは上手く書けるかな…？

番外編　キャラ紹介（前書き）

更新が出来ない…。
とりあえずは作中で書き切れなかった設定などを書いてみました。

番外編　キャラ紹介

ゲートキーパー

長谷川千雨

今作の主人公。原作より若干、熱血度が上がっている。

幼少期は同年代の子供からイジメにあっており、それがトラウマになっている。それから数年後、ゲートキーパーとなり、同じゲートキーパーである北条雪乃と友達になる。（その時にゲートの使い方を習い、実力をつけた。ちなみに剣術は我流）

人類の敵であるインベーダーと戦う理由は『自分の周りの人間が平和に過ごせるようにすること』である。

ゲートという異能の力を持っているためか、原作より肝が座っている。そしてイジメられた経験から、自分の都合で他人を傷つけたり勝手に巻き込んだりする奴が大嫌い。

所有ゲートは『風雷』。風と雷の2つの属性を持つ極めて稀なゲート。

だがゲートの力がかなり強くコントロールが難しいので、基本的に『風』『雷』を一つずつ場面に合わせて使いわけている。

綾瀬夕映

ネギまキャラで2人目のゲートキーパー。

中等部に入る前後に尊敬する祖父を亡くし、一度世界への興味を亡くしてしまった。

千雨とは特に親しい訳ではないが、かといって仲が悪い訳ではない。しかし妙に気が合うといった変な関係になっている。

悪魔令嬢の戦いで自身のゲート能力を目覚めさせる。その後、正式にイージスの一員となり、原作より少しだけ早く『こちら側』の人

間になった。
所有ゲートは盾を出現される『防壁』。
前方にバリア状に展開される『鉄壁』とは違い、展開される範囲は狭いが、任意に動かせることが出来る。また、離れた所にも盾を設置出来るため、使い勝手が良い。

真鶴美羽
ゲートキーパーズ２１の主人公の１人。（２１は五十鈴綾音と真鶴美羽のW主人公で話が進むのである）
退屈な日常を持て余している普通の女子高生だったが、クラスメイトでゲートキーパーである綾音との出会いからイージスに入る。
最初は綾音の足を引っ張ってばかりで、綾音とは一時かなり険悪な仲になってしまったが、オリジナルインベーダーである幽霊少女との戦いで正式に綾音のパートナーになる。
現在は『ゲートキーパーだけでなく１人の人間として人を救いたい』とのことで、麻帆良大学医学部に入っている。
所有ゲートは脚力を大幅に強化する『跳躍』。
しかしこのゲートは脚力を強化するだけなので、単純に言えば劣化版『迫撃』。（一応戦えないこともないが決定打に欠ける）
そのため、彼女は疑似ゲートなどのツールや気を使った戦法で戦う。

五十鈴綾音
美羽の話でしか出て来ていないが、ゲートキーパーズ２１の主人公の１人。
かつて最強のインベーダーハンターであった男、浮矢瞬の１人娘。
しかし家族をかえりみなかった父の反発からか、気難しい娘に育つ。

そんな父の反発感からか、自分の名字である浮矢とは名乗らずに母親の妙である五十鈴を名乗る。
無口で無愛想、更に世の中を嫌っているなど主人公とは思えないほどの性格だが、根は熱血。
所有ゲートは父親と同じ、風を操る『疾風』。しかし本人は自分のゲートを使わないで、疑似ゲートを使って戦う方が多い。
現在は東京の大学に通いながら、イージスの活動を続いている。

太刀川里香
ゲートキーパーズ２１で途中登場のキャラ。
激化するインベーダーの戦いの助っ人として、神戸から呼び寄せられた。作中では綾音を一方的にライバル視していたが、当の綾音本人は特に気にしていない様子。
非常に好戦的な性格で、当初はインベーダーの戦いも単なるビジネスとしか考えていなかった。
所有ゲートはあらゆる刃物を作り出す『寸断』。
里香本人の身体能力の高さからゲートとの相性は抜群。作中ではインベーダーを鬼神の如き強さで倒してゆく。
現在は高校を卒業した後、イージスの活動を休止し、京都で配達業の仕事についている。
性格も大人になり、戦いを楽しんだり、戦いはビジネスと言った考えは止めるようになった。

影山零士
ゲートキーパーズ無印、２１の両方に出て来る、過去と現在を繋ぐ人物の１人。

綾音と同じく世の中を嫌っている。
今作では千雨の口から『かつてのクーデターの主犯』と語られるが果たして真相は…。

北条雪乃
彼女も影山と同じく過去と現在を繋ぐ人物。
今作では幼き頃の千雨の親友。彼女が麻帆良を離れたのは、２１で起こった一連の事件の前兆を調べるため。
所有ゲートは『氷結』。あらゆる物を凍らせる最強クラスのゲート。
原作では数回しか使われていないが、視聴者に絶大な力を見せつけた。
千雨には『いつかまた会える』と言ったが…果たしていつ会えるのだろうか？

目黒兼武
通称『メガネ』。彼もまた過去と現在を繋ぐ人物。
ゲートキーパーではないが、チーフメカニックとしてやる時はやってくれる奴。ハッキングや情報収集なども長けている。
真実を知りたがる千雨にはあえて何も知らせなかった。彼が知る真実とは…。

インベーダー
悪魔令嬢
今作で出て来た新たなるオリジナルインベーダー。

その能力は『喰らった相手の能力の吸収』と言った反則クラスの能力。
その能力や実力も恐ろしいが、最も恐怖すべきはその性格。『善悪云々より自分が面白いことをやる』という考えを持っており、そのためならどんなに残虐なことでも笑顔で行う。悪い敵ではなく天災のような敵。性格が悪いなどのレベルではなく、恐怖や無秩序が形を持った存在と言ったほうがいいかもしれない。
エヴァンジェリンとの戦いでは彼女を一時追い込むが、闇の魔法を使われて敗北。
そのコアは完全に破壊されたらしいが…？

ネギまキャラ
学園長
魔法使い達にはインベーダーには一切関わらないことを忠告している。そのことからイージスとは何らかの関わりがあるのだと読み取れるが…。

佐倉愛衣
アメリカのジョンソン魔法学校に留学中に魔法演習でオールＡを取った秀才。
原作と大きく違うのは魔法使いが唱える『正義』について疑問に思っていること。これが後にどうなるのか…。

高音・Ｄ・グッドマン

インベーダーに関わることを周りから警告されるが、それを無視して『正義』のために真実に近づこうとしている。
彼女の行動の行く末は果たして…。

番外編　キャラ紹介（後書き）

さて、ここで皆さんにアンケートです。
その内容は『今後、新たなるゲートキーパー候補キャラを入れるか否か』です。
正直かなり迷っている所なので、ここは皆さんの意見を聞きたいのです。
「嫌だ！」って人は何も書かなくてもいいし、もし「是非ともこのキャラを！」って人はそのキャラの名前と出来ればそのゲート能力なども書いてくれるとありがたいです…。もしそれを使う時が来たら、知らせます。
どうかこれからも宜しくお願いします。

第３３話　影と光

「派手にやられたわね…」
「アハハ…心配かけてすいません」
弟子入り試験を見事合格したネギは、自室で早速アスナとこのかに傷の治療をされていた。治療と言ってもパンパンに腫れた頬に湿布を張ったり、絆創膏で切り傷を張るなどの簡単な物だが。
「でもネギ君、本当にこれでいいん？うちのアーティファクトなら完全やないけど傷も癒せるんやけど…」
このかは最初、自分が外傷治癒が出来るアーティファクト『東風ノ檜扇（コチノヒオウギ）』を使ってネギの怪我を治そうとした。しかしネギはそれに待ったをかけたのだ。
「はい、僕が初めて自分だけで勝った戦いですから…。だから怪我も簡単に魔法で治しちゃうんじゃなくて…最後まで面倒をみたいというか…」
思えばネギはアスナに刹那、千雨など何人もの生徒に助けてもらっていて、自分一人で得た勝利という物が無かった。
一応、京都の小太郎との戦いではトドメは自分がさしたが、あれが出来たのも、のどかが乱入して来たのが大きい。
だから本当の意味での自分一人での戦いでは、この間の茶々丸戦が初白星だったのだ。だからこそ、ネギはその勝利を誰よりも喜んでいた。
一方、アスナはポカンと口を開けたまま黙っていたが、しばらくすると笑い出した。
「全く…この間まで泣き虫だった奴が何男前なこと言っているんだか。とりあえずはゴールデンウイーク中にいいんちょに向けての言い訳を考えておくこと！私一人じゃフォローしきれないわよ」
そう言うとアスナはすっと立ち上がって、玄関まで歩いていく。
「あれ？アスナ、どこか行くん？」

「まあね。ネギ、今日はしっかり休むのよ？」
「はい！」
アスナはネギに向けてそれだけを言うとバタンと玄関を閉めた。

そして場所は変わって山奥では。
ズガガガガガ！
美羽が放つ風の弾丸を避け続ける千雨と夕映の姿があった。
「足に見えない力を溜め込む感じで…！」
夕映は弾丸を避けながら美羽に教わった瞬動を使う体制を取る。そして…！
ギュン！夕映は弾丸の雨をくぐり抜け、その姿は弾丸が届かない安全地帯にあった。
それを見た千雨は思わず声を漏らす。
「へえ、やるじゃん…痛てて！」
「ほらほら千雨ちゃん、止まってちゃ格好の的よ？」
夕映の瞬動の成功に思わず立ち止まってしまった千雨は美羽のゲートガンによって打たれてしまった。慌てて回避行動に移す。
「私だってな…瞬動くらい使え…！？」
千雨もさっきの夕映と同じように足に気を溜め込む。…しかし。
（…ヤバい！）
使い慣れたゲートと勝手が違うからだろうか。自分が出したいスピード以上の物を出してしまい、勢い余って木に激突してしまった。
空気が一瞬止まり、それを見た美羽が一言漏らす。
「千雨ちゃんの課題は…気のコントロールかしらね」

「…やっぱりゲートとは感覚が違うんだよな」

休憩時間の時に千雨が言った言葉に美羽は笑いながら返す。
「まあ…気持ちは分からないではないわ。私の時もちゃんと扱えるようになるまで苦労したしね」
あはは…と笑いながら美羽は自分のパートナーとの修行を思い出していた。
（私も五十鈴さんに罵倒されながら修行してたもんなぁ…。しかも褒め言葉にもトゲがあるし）
とほほと心の中で泣きつつ、千雨にアドバイスを送る。
「千雨ちゃんに足りないのは気のコントロールよ。ゲートと気は別物なんだから同じ感覚で使ってちゃ上手くはなれないわ。まずはどんなに遅くてもいいから2、3メートル単位の瞬動を確実に出来るようになって」
「…はい」
がっくりと肩を落とす千雨。美羽にダメ出しされたのもキツいが、やはり夕映に先を越されたのがかなりのショックだったらしい。
「そして夕映ちゃんは足りないのはスピードね。コントロールは正確だけどスピードが遅ければ意味が無いし、戦いでも狙い撃ちされちゃうわ」
「…はい」
夕映も千雨と同じくダメ出しされ、がっくりと肩を落とす。
さらに2人ががっくりと落ち込んでいる様子を見て、美羽は何を思ったのか…。
（…あれ!?私、きちんと優しく教えているはずなんだけど…どうして2人は落ち込んでいるのー!?教え方が駄目なのかな?ううっ…やっぱり私じゃ役不足なんですか?五十鈴さ～ん!）
…2人が落ち込んだ理由が自分の不甲斐なさが原因だと思いこんだ美羽もネガティブモードに入ってしまった。

東京のとあるビルにあるイージスネットワーク本部。
その一室でメガネが影山からの依頼の報告が行われていた。
「…綾瀬夕映。中学に上がる前に祖父を亡くす…。まっ、彼女を大きく変えた出来事はおそらくはこれでやんすね」
「…」
メガネが独自のルートで作った資料を影山はじっと見つめていた。
やはりメガネが言った通りのことだが、勝手に人の過去を見たりするのは良い気持ちはしない。
「次は…」
「千雨ちゃんでやんすが…。こいつはかなり面倒なことになってたでやんすよ…」
「…何？」
メガネが発した言葉にピクリと反応した影山は驚きつつ、どこか納得していた顔つきだった。
「嘗てのアンタと同じと言えばいいんでやんすかねぇ…？イジメでやんすよ。しかも、ただのイジメの類じゃない奴でやんすね」
「それは何だ…？」
影山は半分分かり切ってはいたが、メガネにその問いの答えを求めた。
「…認識結界、でやんすよ」
その４文字の単語を聞き、影山は納得した表情をした。
メガネはイライラしつつも会話を続ける。
「だからオイラは魔法使い（あいつら）が大嫌いなんでやんすよ！関係のない一般人の思考を勝手にいじくり回して！はっきり言ってしまえば、あいつらがやっていることはたちの悪い洗脳でやんすからね！！」
メガネは元々、魔法使いを好きではない。そもそもあいつらの思想自体、気にいらないのだ。
何でもかんでも魔法に頼るやり方や甘っちょろい信念。その傲慢さの極みの一つが思考を歪める結界、認識結界だろう。

「一般人は魔法使いの人形じゃないんでやんすよ。あんなもん無くても充分やっていけるはずのに…！」

メガネの叫びを聞いた影山も分からない訳ではなかった。

幼き頃の影山は驚異的な洞察力や未来を予知する『眼光』のゲートキーパーであった。しかしその強大な力を恐れた友人や大人は影山を差別し、批判したのだ。

（嘗ての俺と同じ…か）

今でも思い出すあの忌々しい記憶。仲の良かった友達は手のひらを返したが如く裏切った。気持ち悪いと言われ、石を投げられた事もある。

父親が事業に失敗して死んだ時も、親戚は気味悪がって誰も引き取ってはくれなかった。そして自分は…。

『お前は…道端の虫けらだ…！いや、もっと最低の…クソムシだ…！このクソムシ野郎ー！！』

自分は闇に堕ちた。自分を裏切った世の中のクソムシを殺す為に…。

「だからこそ、北条雪乃には感謝しなくてはならないな。もし彼女が長谷川千雨の友じゃなければと思うとゾッとする。嘗ての俺と同じように闇に堕ち、死んでいたかもしれない…」

影山と千雨は非常に境遇が似ている。信じる者に裏切られ、踏み潰された点などが。

「何らかの対策は立てる必要があるな。最悪、このままゲートを封印させたままにさせる必要があるかもしれん」

「…」

メガネは黙って影山の話を聞き入る。

「それとな、メガネ…時渡哲也は知っているな？」

突然、話題の切り変わりにメガネは面食らいつつ、答える。

「そりゃあ…オイラ達の司令でやんすから。確か1年前、ようやく行方を掴んだって言っていたでやんすよね。どうかしたんでやんすか？」

メガネは朗報なのかと思い、顔を明るくさせるが、影山は暗い顔で

こう続けた。
「その時渡哲也が…死んだ」
「え…！？」
時渡哲也。嘗てのメガネの上司であり、イージス極東支部の司令だった人物だ。
イージスが組織解体されて以来、行方を眩ましていた人物であったが…。
「死んだので…やんすか」
「…落ち込まないのか？」
「…あの人はいらぬ責任まで背負ってしまったからでやんすかね…むしろお疲れ様でやんすよ」
メガネはそう言いつつも、目は潤んでいた。自分は何一つあの人に恩返しをできなかった。せめて死ぬ前に自分の店の菓子の一つでも食べさせたかった…。
「葬式の日程は後で詳しく話す。お前は今日は帰れ。彼女達に届けるはずだったバイクは俺が届ける」
それを聞いたメガネは無言で部屋から出て行った。そして影山は窓の外に視線を向けた。
空も悲しんでいるのだろうか、ポツポツと雨が降り始めていた。

第３３話　影と光（後書き）

とりあえずは次回からヘルマン編に入ります。
更新は…遅れると思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4576v/

風雷のゲートキーパー 長谷川千雨

2011年12月24日02時46分発行